

川柳塔

昭和六十一年十一月二十五日印刷
昭和六十一年十二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十二年 通卷七一五号



日川協加盟

No. 715

十二月号

1987年

新春おめでとう会

日時 昭和62年1月15日(祝)午後一時開会
会場 大成閣

大阪市南区大宝寺町中之町二六

(心斎橋大丸とそここの間を東へ約100m)

電話(06) 271・5230

挨拶
お話し
兼題

西尾 栞
阿部 柳太

「木」

藤村 女選

「歌」

河内 天笑選

懇親宴
会費 六千円

◆同人・誌友の皆さんのご参加をお待ちしています。

川柳塔社

社告

昭和62年1月号誌上から

女性コーナー「ういきょう茴香の花」欄を新設します。

振ってご応募下さい。

選者 小出智子(昭和62年度)

八木千代(昭和63年度)

投句規定

☆ハガキに雑詠3句、住所氏名明記

☆女性作家に限る

☆毎月10日締切

☆投句先 〒544 大阪市生野区勝山南1丁目18-10

小出智子宛

川柳塔社

街を歩けば

西尾 栞

私の在所から近鉄八尾駅まで、一時間に三回のバスがある。常にバスはガラ空きである。ある日、そのバスに乗った。

黒い喪服を着た婦人と三人許りの乗客だった。座席は自分の思う所へ座れるほど空いていたので、バラバラに座っていた。ところが、六十に手の届くと思われる喪服の婦人は、前の方に立っていたので、次の停留所位で降りるのかと思っていたら、次の次のその次の停留所でも降りずに依然として立っていた。自分の座っている前なので、「アンタ、座ったら如何ですか。何時急停車するかわからないし、沢山、座席あいているから」と言う、
「私はこの方がよいのです」「何故ですか。乗客は皆、迷惑していますよ」「今日は喪服を着ていますから、座るとスカートが皺になるので、格好悪いから座れません。」

女の人の心理状態とは、こんなものかいなと思って、つくづく気の毒になった。その言葉を聞いて、じっと顔を見ると

スカートが皺になるまでに顔の方に皺がよっていたのはさらに気の毒であった。市役所前で私が降りると、件の婦人もつづいて降りた。降りた途端に、K君と遭ったので、二言三言、言葉を交して別れた。少時して後をふり返ると、K君と件の婦人と話をしているのが見えた。それでK君のお知りあいの人だったのか、悪いこと言ってもうたなあと思って、あとから電話すると、K君は「私も深く知らないのだが、カラオケと一緒に習っている人です」ということであつた。

それから一〇〇米ほど行くと、今度は先刻の婦人とよく似た年頃の平服の婦人から声をかけられた。「どこかお悪いのではありませんか」と訊く。「何故ですか」「お見受けしたところ、お顔の色も悪いし、しんどそうですから」と、一度も見たこともない、話したこともない婦人から病人扱いされた私はむっとして「いったい何のためにそんなこと言うのですか」「いや、お顔の色が悪う思いましたから、もし、どこかお悪かったらお祈りしてあげようと思ひまして」「何のお祈りだ」と語気を荒らげると、「先日、私も身体がすぐれなかったのですが、T教に入れてもらってから大変よくなったので、T教に拝んでもらってあげたらと

思ひまして」「宗教拡張のために道行く人を病人にして何がおたすけか、莫迦にするにも程がある。それがシヨックになって本当の病人になったら、アンタの罪は深いですよ。つまらんことを言うのは止しなさい」と一喝して目的地へ急いだ。

それから一週間ほど経って、私は健康診断のため成人病センターへ採血に行った。採血がすみ、その場から五、六歩下つて針のあとをアルコールの脱脂綿でおさえて一分もしないうちに綿をとってワイシャツを下ろそうとすると、採血をした看護婦が「そんなに早くすると、血が吹き出てワイシャツが血だらけになりますよ」と注意してくれた。それで再び同じ所作をしていると、また件の看護婦は「廊下へ出ておさえて下さい。そこに立っていると、他の採血者の邪魔になります」という言葉に愕いた。自分は他人に迷惑をかけたり、邪魔したりしない心算でも知らず知らずのうちにそんなことをしているのだなあとつくづく思つて過日の喪服の婦人のことを思ひ出していた。

十二月邪魔なところへ人が佇ち
十二月小さな嘘を信じたし

十二月某日我と我が身に言いきかす
気のきかぬ手形の期日大晦日
たたらふんでふんで十二月

座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

(路郎)

私の句

石頭風の方から避けて吹き

近藤 一途

川柳塔 十二月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

街を歩けば

西尾 栞 (1)

'86年 私の回顧

橘高薫風 (2)

川柳塔(同人吟)

西尾 栞選 (4)

自選集

(28)

■川柳太平記(103) 川柳の群像 堀口塊人

東野 大八 (32)

■連載 誹風柳多留廿六篇研究(二十八・二十九丁)

(34)

水煙抄

黒川紫香選 (36)

秀句鑑賞「同人吟」

原 仙波 (31)

愛染帖

中川 滋雀 (53)

句集「愛染」を読む

橘高薫風選 (54)

偷しき哉 燕京の旅

中尾 藻介 (57)

東野 大八 (58)

'86年 私の回顧

橘高薫風

今年を回顧して一番の痛恨事は中島生々庵前理事長の死去である。麻生路郎門下の錚錚たる士を糾合して、先人の遺志を継ぎ、川柳塔社の今日の礎を築かれた。八十八歳の大往生とはいえ、悲しい出来事だった。

七月には三十名の参加を得て、第一回川柳塔勉強会が伊勢の答志島で開催され、東野大八さんが錦上花を添えて下さったので氣勢太い上がり、次回が楽しみだとの声も聞かれた。勉強会は、開催地の環境も大切である。今年の閑静さは貴重に思えたが、来年は観光の方も考慮に入れて、篠山のでかんしょ祭への企画などが取りざたされている。

第二回中国吟行の旅は、ハードなスケジュールながら無事帰国、観光と日中友好の成果は充分あがったことと思う。同行諸兄姉のご協力の賜であった。

新年から創設の女性コーナー「茴香の花」欄の募集は好評裡に第一回を締切った。新鮮であてやかな川柳塔の新しい顔に成長して欲

中国吟行の旅へ2……………(60)

薫風・ミサオ・君子・みつ子・正坊・てる・江美・佳秋

年代・菊野・智恵子・武庫坊・泰子・雅子・千代子

川柳人口調べ……………竹内紫鏑……………(68)

文献への彫琢……………紀市郁栄……………(70)

初歩教室……………阿萬萬的……………(72)

「将来」……………都倉求芽選……………(74)

一路集「贈る」……………竹内寿美子選……………(74)

「鍵」……………田中叶選……………(75)

柳界展望……………堀江正朗……………(78)

橘高薫風句集「愛染」刊行記念本社十一月句会……………(82)

大森孝華さんを悼む……………各地柳壇……………(83)

各地柳壇(佳句地10選／赤木和子)……………

■12月各地句会案内 95 ■編集後記 97

座右の句

あんたまだ一人だつかと亡妻笑う

(紫香)

私の句

直球のサインを妻はもう出さぬ

上田佳秋

しい。「愛染帖」欄の妹として競合する気合
いでいたいと思っている。何事も出発には困
難がともなうものである。女性作家のひたむ
きなご支援をお願いする。

十一月の本社句会は、拙著「愛染」の刊行
記念句会で、盛大な祝福を頂いた。

当夜の出席者のうち、わが目を引いたのは

小林一夫君、二十五歳。本誌前月号の目次下

エッセイ「シャネルの5番」の筆者である。

今は生活そのものに敢闘中だが、文章を書く

修練も積んでいて、川柳の好きなことからし

ても、将来の川柳塔を受け継いでくれる戦力

である。そして、もう一人は宮田純一氏。私

が昨年、保育社から「川柳にみる大阪」を出

した時、お世話をかけた課長さんであった。

奇しくも、中島生々庵先生や番傘の故高木幸

太郎氏らと堺の料亭で句会を持っておられた

という五十歳そこそこの方で、すぐにも同人

になって頂ける実力の持ち主である。編集の

企画のご指導や協力も得たい。

路郎先生の口癖の一つに「僕はいつも十年

先のことを考えておる」というのがあったが、

私もいつしか先生の言葉を、知らず知らずの

うちに意識していることに気が付いたのであ



西尾 葉選

京都市 松川杜的

この夫に草書のかすがちと欲しい

テレビが主役の日課動き出す

歯痒いが鬼にはなれぬ私です

残り香を大事に座布団裏返す

喪の家で一入匂う山梔子よ

沈黙考亀に思索の秋日和

倉敷市 野田素身郎

別れてもいいよと牽制球を投げ

颯爽と男泌尿器科へ来る

名月へ一句も得ずに丘を降り

よく喋る奴が黙って飲む怖さ

出張の仕事も終り宿の下駄

俺が来た道だ今から引き返せ

下関市 石川侃流洞

おしゃべりがとっても上手勇み足

四捨五入私は四捨に馴れている

お通夜で儲け話はよしましよう

天女哀し松は磯から枯れて行く

円高へ耳鳴りばかり鉄の街

生きのびる蜥蜴尻尾へ罌を持ち

現実や海苔巻きの海苔噛み切れぬ

松原市

谷垣史好

大屋根の重さいつしか文学へ

シャガールの絵が掛けてある神経科

お相伴越乃寒梅いただきぬ

進化論明治の顔と今の顔

マネーマネーこんな日本に誰がした

多情仏心私に流れ矢が当る

桜井市

岩本雀踊子

空白へ夜なきうどんの箸を割る

哀しくなつて作り笑いをする鏡

グラスの底へ何人男溺れさす

自由がほしい娘ジープはく二十

善人にも悪人にもなれぬ影法師

八尾市 高杉 鬼遊

十二月いのちの残り追いつめる

生き残る稲穂と共に秋のいろ

恋おわるストッキングをまるく脱ぎ

政治とはもつともらしいでたらめか

人生の途中で犬にめしをやり

来年も生きるつもり電話番号

堺市 高橋 千万子

路郎賞スタートにして又歩く

略歴に一行加えるこの受賞

天国へよろこびつなぐ糸電話

目ぐすりを差してまだよむ面白さ

二号への腹いせ妻の着道楽

人間も猫もサンマを食べて秋

岡山県 嘉数 兆代賀

敗けた日のさむさで明日の米をとぐ

莫迦なおんなとしみじみおもう師走風

喜寿の宴バカになることなど覚え

つまずき夫婦笑われ乍ら泣きながら

奴隷さえも泣かずに宙返る

すこしとぼけて流れの中に生きてやる

美禰市 安平次 弘道

遮断機が降りて不運な顔になる

不眠症いつか羊になめられる

よろめいてよろめきドラマ恐くなる

家計簿の赤字に効かぬ頭痛薬

日記帳の余白を妻に責められる

教養にふれてはならぬ蔵書印

熊本市 有働 芳仙

結婚も恋も何度でもええじゃないか

つり橋の真ん中辺でもつれ出し

目薬をさしつさされつ老夫婦

原石のままで一生終るかも

神様の横顔ばかり見て稼ぎ

物好きが迷路で一人石になり

平田市 久家 代仕男

葉脈を残し芋虫よく肥り

蟪蛄も花簪が欲しくなる

思ひあがるとき脳天に熟柿落つ

裏切りの目をこやかに迎えよう

泥かぶる肚で臨めば気もほぐれ

愛称で呼ばれてからの甘え癖

竹原市 小島 蘭幸

ひとりぼっちの母通帳を離さない

みんないい人だと思ふ晩年か

感謝状旅の終りが近くなる

二番にはなれると発破掛けておく

ひとり遊びが下手な男と秋にいる
深傷や秋もおんなもやさしかり

弘前市 波多野 五楽庵

頂上の亀の動悸がおさまらぬ

片羽根のトンボに帰る家がない

かたつむり哀しいだけでなきませぬ

茅ぶきの屋根に住んでるお人好し

乾盃になれば萎れてゆく闘志

シヨーウインドー旅の疲れを見てしまふ

岡山県 土居 耕花

コオロギよお前も一句考えろ

コガネ虫お前は虫の成功者

一番の音痴と思うクツワ虫

弔いは何処の辺りかカネタキ

減量をどう間違えた糸トンボ

戦争は暫く無いぞカプトムシ

米子市 林 瑞枝

秋だから似合う鸚鵡の物想い

釣り針に神話をひとつ棲まわせる

父の敷いたレールにゆらり茹で玉子

子雀へ神の許したこぼれ糶

旅でたつぷり答を拾うエトランゼ

作品のラストで春の絵を描こう

鳥取県 川 崎 秋 女

牙をむく海も安らく底をもつ

ぼろぼろの私を包んでくれた海
黙秘権女がひとつ持っていた

家族崩壊そこで朝の夢が覚め

愛憎の二字が私を苦しめる

美しい出合いだったネサヨウナラ

和歌山市 西山 幸

木の葉髪かなしい風の愚痴を聴く

妙法よ華経よと愚をくりかえす

破芭蕉破れて析るものがある

なぜ何故と私の中のノラが言う

影法師が今日も頰杖ついている

木枯らしは女ひとりを庇わない

八尾市 宮 西 弥 生

旅たのしブラスアルファというがあり

神さんが知ったはるといふ安堵

祭ばやし塾の子供は塾できく

草木染の朱を命とする女

転宅の今宵は違う音でねる

御近所は独身主義をいじめない
豊中市 安 藤 寿 美 子

母という重さぬくさへ無力なる

おつりまであつあつくれた焼詣や

赤い羽根わたしもととへそ曲り

引出しにしまつてあつた赤い羽根

秋日和友だちは皆旅行中

雑草という名で気楽にのびている

大阪市 西出 楓 楽

神ならぬ身にまちがいが多すぎる

挨拶の間に指輪も服も見る

はじめからひよっとこ面をつけておく

正しいと信じる道が細くなる

梓の中で自分の尻尾ばかり踏む

アドバイスより相槌を下さいな

和歌山市 福本 英子

寂しいことに冬の波紋が拡がらぬ

煮豆コトコト今年独りの味になる

温い人ばかり酒党に珈琲党

奔放に生きると風が避けてゆく

奥歯まだ生えず生意気ばかり吐く

他処から来れば目立の音も珍しい

近江八幡市 前川 千賀子

こぼれ萩罪のかおりを持ち帰り

青色のネクタイだから気を許す

背を向けて涙を武器になどしない

生意気な文ばかり書く秋のペン

一枚の絵を売ってより転落記

忍び逢う恋は紅格子の街で

松原市 佐藤 藤子

珈琲の味をおぼえてから独り

四面楚歌終電車にも乗りおくれ

消火器が埃かぶっている油断

癌病棟に千羽の鶴をおき忘れ

ご無沙汰を詫びて葬儀の列の中

花束に紫があり秋深む

米子市 青戸 田鶴

いつ来ても旅人になる始発駅

雑踏になれて安住してしまふ

冬近く無口になった北の街

民営化駅もなりふりかまわない

豊作になれた太鼓は気が入らぬ

時々あけよう亡母の針箱も

兵庫県 遠山 可住

けったいな服けったいな服と行く

どっちがよいんやせんべいぶとんと羽根ぶとん

花の香のやがてその名も忘れられ

石一つ一つと語り墓洗う

東京の孫からとどく万歩計

松原市 玉置 重人

年金で暮らしものさし替えている

プライドがすこしあるので靴磨く

刹那主義パチンコ勝った生ビール

敬遠の四球の味をまだ知らず

長城の話がはずむウーロン茶

東京都 増田 次章

とことん信じられてうれしい重荷

失敗の理由を他人はききたがり
失意の日妻に餅菓子買ってくる
青信号誰も通らぬまま変わる
定年の日も一喝の課長去る

伊丹市 榎谷寿馬

松茸の残り香があり始発バス
少し冷えて峠を越えてゆく嫉妬
スコッチが宗祇の水を想い出し
毛氈に負けぬ紅葉と酔うている
落人の笛を紅葉の風に聞く

奈良県 宮口笛生

中国旅遊

天安門広場人も車も蟻になる
北京ダックもつたいなくも食べ残し
パチンコ屋無いので中国早くねる
龍が舞う如し長城続く峰
懸空寺筋斗雲で飛ぶ悟空

倉敷市 小野克枝

来年の話は聞かぬ振りの鬼
八十の母が五十の娘を叱り
幸不幸どちらも同じ風に乗る
先頭が転んで楽になる歩幅
結局は負ける一人の夫です

今治市 越智一水

記念品貰わぬ妻が先に開け

観世音才知ひらめく膝を立て
しあわせが一杯孫がいる茶の間
ネクタイを娘が買ってくれ高くつき
再会へ言葉出ぬまま手を握り

大田市 藤田軒太楼

呼び水の効果に期待大き過ぎ
伏線を敷いて相手の出方待つ
仮名字増え老眼鏡の苛立ちよ
衆目を集めハネムーン駅を発つ
老いて子に従う道理は解れども

島根県 小砂白汀

潔く脱いで出直す大銀杏
出生を祝い保険がすわり込み
血圧のことなど自画像には入れぬ
匕首を吞んでいるのと差しむかい
平行線のままでレール外される

兵庫県 辻文平

綾とりの糸がもつれてゆく別れ
胃カメラに写し出されている自虐
終章は神にあずけてしまふ恋
酒に逃げ酒に溺れる負けいくさ
託児所を出ると母ではない歩幅

倉吉市 奥谷弘朗

喜びを分け合う妻がいてくれる
人間が神になったら嘘が消え

人様の立場で話の出来る人

シベリヤを耐えた仲間の手が温い
出雲には嵐を守る築地松

高槻市 辻 白 溪 子

その先を聞きたい酒を酌ぎこぼし
負け惜しみ教育ママは意地を持つ
披露宴で名刺交わしてそれっきり
妻に出す白旗いつも用意する
鍵かけて留守番本を読み耽る

呉市 林 野 甦 光

今年出す菊を見つめている手酌
水溜り飛んだら別れの道に出る
励まして呉れる好意の手がしびれ
選択が自由で瞬きしておれぬ
白足袋を脱げば情に脆くなり

名古屋市 越 村 枯 梢

泣き上戸かすみ草まで泣いてくれ
それほどの事もなかった玉の輿
たった一度の思い出がある秋ざくら
万才屋と笑いの列の中にいる
仏具磨く指の白さよ寒の冷え

倉敷市 稲 田 豊 作

活力素ですと毎晩二合酒
サラリーを渡した夫の軒です
備忘録どこへ置いたか置き忘れ

底辺に育ち未来図描く子供
めくらさん人の善し悪しよく見える

笠岡市 松 本 忠 三

外面がいい父ちゃんにも困ります
約束を破り野となれ山となれ
一端の口をたたいただけの腕
極道のことが気になる爪を切り
無い袖はふれぬふつてもいいのに

島根県 西 村 早 苗

ガス栓をひねり殺したいおんな
冬雨に打たれ満足して帰る
わが愛の的がはずれた根なし草
愚痴言いに女が冬の墓にくる
その愛をたしかめ銀杏並木道

東大阪市 森 下 愛 論

膝抱いて流人の如く酒を酌み
相談へ金は貸さぬが智恵を貸そ
遮断機の向うもいらいらしてる顔
お見舞いの喜ぶ嘘を言うてやり
ワープロに教えて貰うかな遣い

大阪市 天 正 千 梢

斜めから見れば核ボタン見えている
末席ですつしり重い意見もち
居ずまいなおしてタクト振るつもり
一輪の花のいのちも仏心か

むなしくてデイスコでおどり疲れてる

大阪市 江城 修史

桶となる妻にきびしい向い風

裏切られ尚信じたい性哀し

残り火よ燃えて火となれ灰となれ

秋風が遠い記憶を連れて来る

方便の嘔吐き義理を一つ欠く

大阪市 本間 満津子

お月さんとの話はいつも亡母のこと

今からでは遅いが種は播いてみる

青信号だから油断をしてしまう

秋深く通話料金多くなる

深呼吸して真つすぐに印を押す

大阪市 神夏 磯道子

ちらし寿司メルヘンにする青い空

私を変える苦心の化粧する

背伸びして元の姿勢にもどれない

やがて冬山も私も身縋い

妥協して素直に焼けた玉子焼

大阪市 黒田 真砂

自画像が少しいびつな俣に暮れ

スケジュールばかり組んでる女です

菊活けて心の安堵取りもどす

ふとん干してさわやかな秋を身近にし

氷雨降る別れ誤解はとけぬまま

大阪市 北山 悟郎

倅せは妻の笑い声から生れ
律義者周りの酒をまずくする

視察団そこそこにして虎となる

財布には一円玉だけ増えて居る

母出好きあの世に行つて帰らない

岡山市 時末 一灯

貧乏と別れてからの街にでる

簡単に頼んでからの重い石

饒舌に勝る両手と動かぬ眼

ハンカチの白さ日傘の似合う人

制服をきっちり着けたとき男

鳥取市 両川 洋々

ああ福祉檜山行きの駅が混む

標本の蝶は本望かも知れぬ

安楽死しろとレールを雪が埋め

裏切り者へ武士の情けは言うまいぞ

会者定離見た日のバラが散り急ぐ

堺市 中川 滋雀

ゆく秋を笑い話で送りたいし

悟れない方の頭で割り切ろう

人形のつぶやき喜劇に馴れました

駅前に待つ自転車も主があり

筆と墨今日のノルマに起こされる

浜田市 中川 幸一

敗戦も満更でなし得た自由

なびく気が手の鳴る音を待っている

ジュース一杯下戸が器用な隠し芸

頼る大地がマグニチュードに揺さぶられ

ゴキブリも間の抜けたのが殺される

今治市

矢野佳雲

七人の敵へ血止めを持って出る

喝采が待てずに開く玉手箱

スタミナが切れているのに脂足

街角の赤いポストが暮れ残り

鐘が鳴り終り女の気が変り

松江市

恒松叮紅

墓地裏の際まで高いビルが建ち

電話口話は尽きぬ国なまり

然り糸に愛がもつれている夫婦

子育てが終ると弾む妻の毬

七人の敵にネクタイ柄を選ぶ

松江市

柳楽鶴丸

旅行のお土産僕の腕自慢

絵が大好きでも絵が嫌っている

遅ればせながら銀婚でハネムーン

あと一段それがなかなかのばれない

二人で出ると女になる妻で

松江市

舟木与根一

家古くなりてすばらしい虫の声

親馬鹿も一緒に運ぶ宅急便

共稼ぎ新人類を育てあげ

善人をブービー賞で証明し

京都市

都倉求芽

流れ星男は潮時を考える

あつけない幕切れと見るは第三者

お気持はよくわかるでほっとかれ

非常口ばかりで安住はない都会

ご近所も時計打つ音しなくなり

京都市

山本規不風

嫁に欲しい娘のお点前と鳳仙花

小指火傷して花の契りを思い出す

家相より吉運のある奥方で

返済をせぬ岡太さが羨まし

将来の夫を易者へ聞く女

京都市

平田実男

ホステスの本音見ている昼の月

失言と詫びて本音の後始末

英語には英語の表情見せる猿

付添いへ恐縮している尾氐骨

高校出のうっぶん清原払うてくれ

和歌山市

堀端三男

無気力になると疲労が倍加する

漫画形式の日本歴史を読んでいる

連休をどう過すかでもめている

階段へ手摺を付けて姑を呼ぶ

スポーツの秋へゲートボールも仲間入り

和歌山市 内 芝 登志代

一日の祭りへ溜めたエネルギー

明日嫁ぐ母娘で幼い日を語り

ひとときの逢う瀬へコスモスゆれている

我が輩は猫と一緒に昼寝する

バラ活けてひとりほのぼのして居ます

和歌山市 松 原 寿 子

ひとしきり黒髪もえる蒼い刻

まなうらに紅ひと筋の慕情かな

あなた恋う死角で愛の詩を織る

胸の谷間を駆け抜けてゆくにくい人

来世もあなたへ賭けるいのち綱

和歌山市 神 平 狂 虎

青空の深さにふたり佇ち竦む

夜露朝露冷たきひとの靴の音

コスモスや小さき恋のかたちして

秋の花を君に喻えて夢の中

秋らしい秋に出合つて来た訣れ

唐津市 仁 部 四 郎

鱗雲妻と昔の恋を書く

銀婚の日です水玉ワンピース

松茸はともかく秋刀魚不漁とか

一茶にはやはりなれない九月の蚊
おふくろの味で売れてる外食屋

唐津市 田 口 虹 汀

噂には強い男の貰い泣き

大阪に馴染んで姉はまむし党

間道が見えぬ勝者の表門

薫風師の愛染発刊を祝して(二句)

愛染の句集は先ず神前に供え

還暦の虎は全土を席卷し

唐津市 久 保 正 敏

安らぎに行く止り木で安らげず

妻よりも大事な時があるメガネ

陽に叛き陽を仰ぎたい吹き溜り

悪弊の町に選挙を喰う亡者

続かない仲だと思ふ金屏風

唐津市 浜 本 義 美

炭坑の歴史が消えた赤字線

「出ました」と言つてボツボツ支度する

抽斗の夏と冬とが入れ替り

医薬分業カルテに再診料が要り

ゆで上げた蛸も刺身の中に入れ

米子市 小 西 雄 々

数珠を持つ母を輝くように見る

夢ばかり綴り孤独な苦労性

妻よりも淡谷のり子が若く見え

法の綱くぐり冷凍魚がはしやぎ
最初から子をあてにせぬ肩の凝り

米子市

林

荒介

ふる里の地図を離さぬ二度童子

腰骨に父の縄目が付いている

その刻のあかしを綴る花言葉

贅沢な二本の箸を捨てられぬ

言い訳はもう通らない煙草の輪

米子市

石垣花子

百花咲く野に一つずつ物忘れ

退院の主へパンも跳ねて見せ

梯子酒しながらきちんと朝の靴

受け皿の深さが少し足りぬらし

夾竹桃に長い長い夏終る

米子市

菅井とも子

組のリズムも狂う笛太鼓

不発弾抱いてる友と知っている

秋の彩配り終えたら白くなる

秒針の音聞えなくなる不安

終着駅見馴れぬ貌も降りて来る

ひよつともおかめも祭大好きで

おらが村だ祭太鼓を打ちまくる

来年の約束してはバラを切る

はしやぎすぎると舟が横ゆれ致します

米子市

田中亜弥

勝つたびに思う相手の胸の内

米子市

野坂なみ

百枚の地下に光る墨の跡

秋海棠バラを見上げて領いた

その余白コントラストが美しい

傷一つ持って心が温うなる

一人逝く又一人逝く親しい人

米子市

政岡日枝子

田舎には私の埋まる場所がある

人間に化けて狸も嘘を言う

善人に化けて疲れが出た狸

花が散る花の情をふりきって

雨の街バラの刺だけ濡れまいと

島根県

堀江正朗

真心がじわじわ沁みるブランデー

留守番の耳をごまかす風の音

負けいろになると笑って年を出す

相づちを打つとき耳も目も生きて

人不信指の先から冷えてくる

島根県

堀江芳子

悼・大森孝華さん

忽然と友吸いこんだ菊の空

冗談で逃れて年を知らされる

優しさも鋭さももつ風の声

引き算も足し算もして夫婦箸

溜息を洩らすと曇るガラス窓

鳥根県 綿織文子

秋日和話の好きな人ばかり

わびしさへ青空だけが味方する

人間不信女は軽い罪を持つ

外堀を埋めるつもりで帯を締め

友十彩私に染まぬ彩に逢う

高知県 松岡三吉

里いもの味おふくろは達者かな

思い切って買う松茸はみな男

十月の商談鍋のうまいこと

わが町が美しすぎている校歌

またしても報道陣の鬼ごっこ

高知県 赤川菊野

北京・大同の旅

戦乱の歴史を語る狼煙台

悠久の歴史を秘めた仏像の瞳

中国の旅へ甘えを捨てて来る

粟粥をすすり毛皮で潤歩する

仲秋の月も夕陽もエトランゼ

鳥取県 森田熊生

正直に子の鉛筆がちびている

金儲けに縁のない靴よくちびる

酒好きな口が知ってる秋の風

呑みすぎたことを政治のせいにする

反省の汗さわやかに日記書く

鳥取県 新家完司

にんげんに飽いてパンダの檻を見る

鳥威し鳥も必死に生きている

御寄附下されとはいずこの神さまか

カンナ屑きょうの大工は気が荒い

さがけて散るほかはなし花の意地

富田林市 岩田美代

沈黙の中で傷みを分かち合う

ウイנקを送られてからの熱である

幸福を聞かれてからのうつである

はかなさに開きなかつた椅子の貌

抜群の記憶で少うしうとまれる

富田林市 藤田泰子

ネオン無い北京の月は冴えに冴え

機内から海と見えたは楊子江

ニーハオー黒い瞳と黒い髪

オリエント急行紛いの軟座席

大同の鉄橋渡る汽車ポツポ

富田林市 田形美緒

女五十今しか出来ぬことがあり

物干しに登ると故郷が見えそう

困ります横断歩道で告白は

告白に重いページの直指庵

妻にだけ告白はせぬ思いやり

尼崎市 春城 武庫坊

残り火を大事に守り辞書を引く

大正の歌が流れて輪が出来る

斬新なスタイル過去の丸写し

どん底に捨てた言葉で蘇る

核ニュース埴輪まばたきせずに聞く

尼崎市 春城 年代

遠い日に産んだ覚えのある女

十月の空に引き立てられている

神様の手の鳴る方にゆきたがり

引き算が一桁になり生き易し

かん違いしないで欲しい酌きこぼし

西宮市 林 はつ絵

雲流れて頭の中も流される

雑木林も秋よろこびの音がする

誰を祭る祠をうずめ曼珠沙華

思い出となるころ亡父を理解する

戦絵の中で愛情告げられる

西宮市 野呂 鶴汀

夕暮れの墓参カナカナ蟬の中

あばたもあばたに見えて恋冷える

損得も合せて見れば百となる

ゴミ箱に捨てた人形を又拾い

秋深し田には雀の落穂狩り

西宮市 奥田 みつ子

中国吟行(四句)

真つ直の大路サルビア炎えつづけ

長城に老父を背負う人民帽

ジーパンの蔭に纏足杖を曳き

汽車のゆれ遙か娘の身を案じ

十二月忘れたいこと多過ぎる

神戸市 山口 美穂

ほの暗い帰途木屋の香に出会う

柿紅葉冬の足音小さくきく

強がりを言う私を嗤うのもわたし

電話ベル声きくまでのときめきで

コスモスの恋を秋風知っている

寝屋川市 柴田 英壬子

土瓶むし自然にふれた胃が和み

コスモスの真実そばに置きとて

乾盃の歌を唄おう金木屋

たたみいわし花のいのちを想う秋

十二月逆手に源氏物語

寝屋川市 稲葉 冬葉

棘のない薔薇を受賞の束にする

あにさんに会いたい時は一升さげ

女々しさを笑う月夜の腹鼓

空腹にさせると機嫌悪くなる

老人パワー人の良いのが気を配り

倉敷市 小幡 里風

内輪もめ秋桜大きく揺れている
松茸の匂は好きだが値が嫌い
カレンダー一枚脱げば柿が熟れ
体育の日せめて散歩の杖をつき
虫の音も殺す夜中の救急車

竹原市 森井菁居

カーブ優勝す(二句)

我が事のようにV5の美酒に酔う
カーブはカーブ私にもある棒グラフ
セールのシナリオに無い句読点
ベースキャンプに要らぬ男の化粧品
方程式解けず脱サラ考える

八尾市 宮崎シマ子

女の子が堂々としてよき見合
新調は夫と歩く日のために
温かい寝巻も用意冬近し
孫出来てジングルベルが復活し
点滴をまだ受けてます十二月

出雲市 園山多賀子

おたかさん赤いスーツが眩し過ぎ
イントネーション女は確かな自負を持ち
バラカンナ朱に老醜嗤われる
シーソーの偽善一方的かもしれない
心電図若さを残し古稀の自負

岡山市 行吉照路

標的か男野性がよみがえる
耳朶騒ぐ女の好きなドラが鳴る
囑託の十八番の舞で締めくくる
この指に止まれ皆んなは趣味の友
灰皿に今日の始末を押しつける

高槻市 竹内花代子

鮮明に西日とらえた白い壁
白髪より抜毛気になる秋鏡
値と柄にはれて衝動買いをする
つる桔梗伸びてのれんにする図案
血圧を聞いてくれはる月参り

弘前市 田中叶

秋深く父上と呼ぶ声がする
霊柩車まだ曲がらずについて来る
とうさんのひょうきん族を見る顔
世の終り来る宗教を信じてみ
膝小僧抱いて蛍の明りかな

七尾市 松高秀峰

剪定の鋏が弾む秋日和
中味より箱が立派な贈り物
前向きの意見やっぱり風当り
お日柄も人柄もほめ金屏風
実年のセンスか光る靴の色

羽曳野市 中村優
カレンダー破りて新たな明日を待つ

拡大鏡当てて初版の広辞苑
大器晩成信じなさいと天の声
合鍵が推理している貸金庫
ジャンケンで恨みつこなしの勝負する

鳥取県 松下 たつみ

アイロンで直る癖なら直したい
肥料より土が足りない子育て論
例外にして悪例をつくつてる
相打ちにしても傷つくのは女
刃こぼれになって戻った正義感

川西市 松本 ただし

晩年は並足で良い花の里
地球より重くて風に似た命
訥弁が雄弁になる唯一語
忘却が明日の妥協を肯定し
事あれば葵の紋の出る夫婦

西条市 片上 明水

手の指の太さ話を信じよう
しあわせは隠居の部屋の灯が明い
血圧をうっかりさせた秋の酒
ゆっくりと歩ける道に水溜り
妹の方はすらすら嫁にゆき

福岡県 横地 雅風

商魂がゲートボールも食いに来る
ゲートボールサドルバイクで老い達者

湯の街もゲートボールの誘致策
杖捨ててゲートボールへ腰が伸び
朝早い登校と老いのステックと

柳井市 弘津 柳慶

逆境へ灯して呉れた友の情
無所属へ牽制球を投げて来る
お二人へ風はピンクに吹き抜ける
脇役で通した母の手の温み

仙台市 川村 映輝

靖国の弟わが家では仏壇
卒業就職結婚してもまだ不安
うそをつけるのは人間だけの芸
こうすればああすればとは老いの愚痴

樫原市 岩井 本蔭棒

人は善門口ごとに四季の花
君が代はやはり国歌だなどと思う
謝ってばかりニッポン弱い国
独り居の気楽さ思いつきりおなら

町田市 竹内 紫靖

雄弁と寡黙こま大めく課長
吊革の背中である日主婦の愚痴
新型の電話器を知る不倫劇
オルガンを昔は弾けた祖父であり

倉敷市 藤井 春日

生きている自然を殺め文化だと

山麓のここが儂ら夫婦の桃源郷

こぼさぬと胸に畳んだ愚痴が出る

本筋に余談も交え話術長け

幼稚園（二句）

守口市 羽原 静歩

朝礼のあいさつこどもになりきって

白蟻の恐さに似たりクレジット

この世からあの世へつなぐお賽銭

四面楚歌国鉄さんの寒い冬

和泉市 西岡 洛醉

ノンフィクション無い恐山に立つ自分

全快の胃に遮断機が上ったよ

藤椅子の余生よ愚痴をこぼすまい

ポシェットの秘密を孫は語らない

浜田市 佐々木 裕

マニキュアの妻の髪にも白きもの

長男の電話の声の都会すれ

猥談の聞きしにまさる女房達

妻の客来てイアホーンに切りかえる

諫早市 原田メイシユン

海に陥ちても太陽は音ださず

嫌々に食べたにお代りもって来る

女房も子供も座り込む炭坑の町

宮仕えしっぱ振るのも業のうち

羽曳野市 佐野 白水

手型押しこの手と生きた七十三

喜怒哀楽この手と明日も生きんとす

過去 現在 未来この手を冥土まで

バレードの故郷の祭りに出る郷愁

八尾市 山下 みつる

眉かいて本音とうそを使いわけ

多数派が正しいですと言ひ切れず

定年の記念に帽章もらひ受け

総理さす白い手ぶくろすぐ汚れ

河内長野市 井上 喜醉

行車のトンネル嫌な汽車ボツボ

定退のプラン相手は銀行屋

ラーメンが美味い季節で回行道

実年の空鉄砲を笑う妻

東大阪市 斉藤 三十四

床の間に天皇の額過疎枯れる

正しいと思うことでも言いにくい

口だけの人と知ったあはらしさ

古稀過ぎて妻から白旗渡される

豊中市 田中正坊

中国の旅

銀輪銀輪銀輪北京朝陽門

絢爛の故宮庭には朱の柶榴

紫電一閃天安門を竜駆ける

石窟を巡りて釈尊一代記

鳥取県 清水 一保

何時の間に雲まで秋の歌になる

すず虫の鳴く音に口論そつと止め

太陽を相手今日も勝負せん

愛情に菊も比例はして咲かず

鳥取県 森田 布堂

真珠貝抱いた真珠の値を知らず

霊不滅墓参招いた北の島

案山子の進化稲田に吊す大目玉

警官の万引という今朝の記事

鳥取県 林 露杖

天高く猫も娘も太りすぎ

娘のお産妻をとられて厨ごと

秋の雲ポートタワーを傾がせて

気持ちでは疾走老人運動会

鳥取県 金川 満春

乗り出して思わず叫ぶ運動会

ボランティア人の情に触れました

凝り性で中途半端が嫌いです

タイミング狸寝入を起される

鳥取県 土橋 螢

行きあたりばったり雪が降ってきた

百聞の嘘とまことの中に生き

冬に向って走る男もどる女

大豆叩いて豊作貧乏まだつづく

鳥取県 羽津川 公乃

神様とお祭り広場で握手する

秋深し離婚届を書いた夢

よく見れば隣の芝も病んで居る

秋風に乗ってサンマの私語つづく

神戸市 仲 どんたく

おないどし金のあるなしだけ違い

過去手繰る糸を脊に秋の酒

レントゲン五臓六腑と対峙する

台本の無い双六の賽をふる

神戸市 山片 紀雄

句作するトイレの中の花暦

税払ろて片身の狭いタバコ吸う

試験管月の満つるを待つ科学

肩叩き趣味ひとすじの道がつき

大阪市 河井 庸佑

嫁がせてまた気苦労の種が増え

妥協点やっと思つた夜が白け

苦心して座った椅子がきしみ出す

雪深い赴任の土地にうまい酒

大阪市 西森 花村

新人類日本語らしい処も有り

飛行機の飛ばぬ日青空心澄む

いけぬ口酔生夢死がうらやまし

本籍は印度でもない仏さん

大阪市 鍛原千里

ふらついてよろけて耐える秋ざくら
うつろげな女心に萩こぼれ
心の深さに芋虫泣いている
一引いて二足した人生論

大阪市 藤田頂留子

くじけまいあしたの来ない夜はない
悪知恵が先乗りしてる社会面
先入観字引ひいても誤字を書き
三句のつけが巡った十二月

大阪市 吐田公一

網の目の地下に迷った母の杖
再起する日が楽しみの松葉杖
再起への決意に燃える車椅子
何もいらんと気持喜ぶ喜寿の母

大阪府 坂口公子

村祭りそれぞれ字にあった見栄
村祭りこんなに居った若い衆
祭りばやしのかげでたこ焼き売ってます
他所者は冷めて見ている村祭り

大阪市 大塚節子

都会人の夢満天の星月夜
レモン食む精一ぱいの熱い息
お迎えにセーター一枚持つて出る
今日だけはさかろうっている風見鶏

寝屋川市 江口度

時刻表をバツタも見てるローカル線
峠道闇深ければ指鳴らす
ゆで玉子きれいにむけて祖母達者
保険屋が帰ると老後を考える

寝屋川市 宮尾あいき

月見草そろそろ恋も終る頃
不倫してますやさしさにほだされて
博愛主義女性には特別に
いも虫を二匹救うた杖の先

寝屋川市 岸野あやめ

納豆が苦手浪花の女です
結構な祝辞延々披露宴
御先祖の写真しみじみ秋彼岸
灯が招くこの世は恐い事だらけ

寝屋川市 堀江光子

アートフラワー好みの色に花咲かす
好きな人の好物いつか好きになり
萩揺れるやさしい人の死をきく日
好ききらい増えて平和のただ中に

米子市 寺沢みど里

朝が来て叱る台詞も消えていた
二幕目から親しくなっていく舞台
曼珠沙華ほとけが托す片便り
針山と親しくなれた雨の午後

米子市 沢田千春

雨だれの音がショパンを呼びよせる
鍵穴をのぞけば月が澄みわたる

のびちちみしながら影が離れない
秋の山みんな私を待っている

米子市 光井玲子

こおろぎが鳴き止む針よ急がねば
傷があるからわたしに買えたダイヤです

白萩がこぼれてめぐる亡母の忌よ
夕ぐれの駅でこだわり捨てました

米子市 金山夕子

水がめに澄んでる月と語り合う
イミテーションの私の影が顔を出す

倦怠期はんばなゲームに生きている
ぼろぼろの帽子は壁のアクセサリー

米子市 茂理高代

あの角にかなしい借りがあるポスト
さみしくて萩しなやかに妥協癖

腹を切る魚に恨みないけれど
神に背をむける勇気が湧いてきた

姫路市 松浦輝月

親しのぐ酒量戒め旅送る
腐ったメロンの札がおそくなる

宝石かお金がいいわと形見分け
師を慕い集いし友も古稀を過ぎ

姫路市 人見翠記

喜寿祝大空翔けるパスポート
進む道ただ一筋に弥陀の傍

雀二羽犬の昼寝を翔び違い
秋の蜜酢橘の匂う隠居部屋

姫路市 丁坪サワ子

ファッションと縁が切れます車椅子
三猿に徹して嫁に頼る日々

昨日まで他人ごとだった病める床
昼メロに教えられてる不倫ごと

岸和田市 福浦勝晴

ため息が出るほどブルーに澄んだ空
残業のじつと掌を視る終電車

プラトニック・ラブもデートでゼニが要り
切支丹伴天連でボーナスみんな消え

岸和田市 原さよ子

お祭りが済むと正月とんでくる
苦勞して瘦せたが秋を食べ歩く

この齢になっても美顔術にある魅力
財布の中お守りばかり増えてくる

岸和田市 清野こゝろ

病人に死んだ話の軽はずみ
母さんに耳打ちしている娘の初潮

母子家庭弱味は見せぬ母の意地
父と兄置いて嫁げぬ隣の娘

岸和田市

古野 ひで

赤い羽根駅にずらりと知った顔

雨だれのリズム気になる夜の底

姉妹が揃うと何時も亡母の事

騙されてやろう綺麗な嘘だから

岸和田市

芳地 狸村

路地裏を小さな菊が秋にする

焼香の順に苦勞の通夜の席

老い呆けか食後のくすり忘れてる

借金の弱味に電話避けている

和歌山市

牛尾 緑良

生きてゆく痛みの針は受け入れる

一刀両断そんな浮世は見あたらぬ

やめてゆく人の笑顔は何だろう

お天気の子想程度に明日を待つ

和歌山市

福井 桂香

秋深し半熟卵の陽が昇る

未練まだくすぶるような落葉焚く

だまし舟だれも助けに来てくれぬ

大臣になっても貧乏ゆすりする

和歌山県

寺田 裕美

感情を殺せばロボットに負ける

新調へ首がうろたえてる鏡

風の意のままにコスモス咲き乱れ

ごたごたを喜んでいる両となり

和歌山市

後藤 正子

峰打ちを見事に躲す二十歳の背

ページ繰る二十歳の指にある痛み

思いあたる言葉に出遇う坂の上

かたむいたままで私の舟が出る

出雲市

吉岡 きみえ

秋風がやけに白髪へまといつく

しがらみに幾たび迷いの靴をはく

縁遠い娘にコスモス競い咲く

冷静で父の尺度は狂わない

出雲市

板垣 夢酔

ちらちらと良い約束か指コヨリ

首輪してもらって女よく眠る

金持の遺伝貧乏ゆすりする

欠伸してから倅せが崩れ出し

島根県

榊原 秀子

こともなげにそれは年だといひ切られ

あやまちを許す心に抱かれる

内幕のことは知らない方がいい

片便り来る日来る日も雨となり

島根県

石田 清泉

過剰米雀も一役買うてくれ

コスモスが可憐に秋を染めあげる

たとう紙へ愛の重さを確かめる

野良猫が去年のままの顔を見せ

島根県 岸 本 輝 水

羅宇替えのできぬキセルがうちにいる
嘘にうそ重ねておんなバラになる
限りない愛などあろうはずがない
年輪に時差の違いを確かめる

倉吉市 渡 辺 菩 句

露一顆蠢くものがなかにいる
典型の狸大会には来ておらず
コスモスのダンスを視てる石の椅子
音楽が踊り狂える部屋で寝る

倉吉市 野 中 御 前

アベツクの祭りは森の中らしい
最初から火種は嫁の掌の中に
仇酒を供える老母へ彼岸花
酒壺の父は枯野で酔いつぶれ

岡山市 井 上 柳 五郎

生涯学習せんじつめればボケ防止
お勤めもやめてのんびりせよと婿
お勤めをやめればボケと妻は言う
地下街の勤め鼻毛がよくのびる

岡山市 小 林 妻 子

古里は秋の味覚でさわがしい
コスモスも梅も正月いっぺんだ
どれ程の訳で古里捨てんかな
夜業続いて秋の夜も短かけれ

岡山県 山 本 玉 恵

逢える日へ一番好きな小紋着る
口下手な温みによわい日の女
言い過ぎた悔いのひと日の長すぎる
原色を濃目に塗って一人住む

大和高田市 岸 本 豊 平 次

マンションに出る月乾いた詩になり
スポーツ店雨の用意も売っている
日本の野を秋にした芒の穂
テレビ紀行行きたい夢が又ふえる

宝塚市 丸 山 よ し 津

土産店並びキーホルダー一つ買う
傘寿書く日記はきょうの遺言書
木犀の顕示欲には背を向ける
計の記事に古い書架から「若い人」

箕面市 坪 田 紅 葉

惚け防止五七五がよいと聞く
妹のさりげないしぐさも亡母のもの
意地捨ててすべておまかせまろく老い
ひそやかに好きなお食事老い二人

高石市 浅 野 房 子

外で元気家では疲れた我が亭主
人生の敗者復活はないものか
鴨が来た何れ誰かの手に落ちる
誘われて語るに落ちた秋のうつ

西宮市 西口 いわゑ

独りごと言うには惜しい円い月
萩桔梗絹の重さにふれて見る
逢いたくて走って亀に笑われる
紅芙蓉一日の思い抱いて散る

川西市 氏林 洋敏

水すましほどの波紋にうろたえる
信仰がままにならないご長男
バランスがとれて友情保たれる
通天閣残念ながらビルに負け

尼崎市 奥山 美智子

十二月こよみの中へ溶けこもう
知らぬうちいつかは開ける玉手箱
心貧しく核の危険にさらされる
雨の午後ふたりで飲んでいるコーヒー

兵庫県 中田 白李

妻が持つ鉄へ鈴はもうつけぬ
仏壇の鉦を叩いて留守にする
みな電池要るものばかり玩具箱
宿の下駄はけば体が浮いてくる

松原市 小池 しげお

恋したしサンゴのネクタイピンを撰る
係長働きすぎて叱られる
扇風機止っていると邪魔になり
露天風呂不倫な恋をしてみまし

静岡市 渥美 弧秀

朝焼けへ虫の音を追う散歩道
妻の笛朝からフォルテ恙ない
詩と楽のバランスもとれ古稀を越え
迎春へ心を締める十二月

大阪市 北 勝美

菊作り旅の話は上の空
シリーズの切手に威張る鬼ヤンマ
松の種蒔いて年齢忘れてる

大阪市 長谷川 春蘭

赤い羽根善人らしい勲章か
献立表旬のはしりを時価で逃げ
喋らない父が植木に対話する

大阪市 中西 兼治郎

盲導犬の柔順さには人も負け
家裁まで我が家の嵐持つて行き
船守の光が島の夜に生き

大阪市 坂本 仙吉郎

帰郷して健在老人只四人
今日もまた辛多き日が続き
目ざめれば厠へ走る年となり

大阪市 松尾 柳右子

長電話ひんばんになりお年頃
自転車次々置いて駅近し
騒動を起した猫は昼寝する

大阪市 大野 武 太

落着いてきけば保険の勧誘で
友が来て儲け話をおいていく
格好をつけて師走の街にでる

大阪市 寺 井 東 雲

空港がさわがしくなる一番機
狙い別棚に並んだタバコ打ち
残りもの食べてスカート又伸ばし

大阪市 板 東 倫 子

亡き母が無性に恋しまんじゅしやげ
マロニエの一葉しのばせバリ土産
梅干を地球の裏の宿で嘗め

大阪市 町 田 達 子

解答は此の辺と言う風の私語
想い出の夢を彩る花時計
秋の引越過去ありそうな女が来る

島根県 松 本 はるみ

ジャンケンに勝っておなか为空いてきた
リサイクルきかぬ脳味噌雪が降る
妥協したつもりで朝の歯をみがく

島根県 松 本 文 子

傷だらけになってどこまで生かされる
巡り合い又振り出しに戻される
つまりからからの情が身にしみる

島根県 北 川 民 子

うたた寝へ母の布団は暖かし
葉が落ちて蔦の執念からみつぎ
電線の雀ふくらむ朝の冷え

島根県 城 角 鶏 生

逃げ腰でゴキブリそつと顔を出し
手鏡の紅蓮の塗よ人恋し
主なき寺百日紅の咲きみだれ

豊中市 上 田 登 志 実

今更に失う地位も財もなし
老夫妻書齋と茶の間別に居て
仲人は素直な娘だとほめちぎる

豊中市 奥 田 満 女

ゴキブリが助けてくれと仰向いて
この喪服買い下された人に着る
「どうぞ」と代って立つは外人さん

和歌山市 坂 部 紀 久 子

場違いな席で揺れてるイヤリング
私一人抜けても歯車廻つてる
プラスマイナスなくて今日も無事終る

和歌山市 山 川 克 子

腹黒い腹へもバリウム白く落つ
そうですよ皆それなりに悩みつつ
水割りが薄くて恋もままならぬ

和歌山市 玉 井 豊 太

着流しで見当外す旅の下駄

庇い合う種を新居の庭に蒔く
一向に目鼻がつかぬ楽天家

岡山県 直原 七面山

正直を質に入れ
言い訳は舌先で
海鳴りを聞いて病み

岡山県 二宗 吟平

お四国の青空市場番いらぬ
狐雨運動会がからかわれ
方言が狭い日本にありガイド

岡山県 岩道 博友

苦しまず怠けず人生打ち切られ
真実を話して呉れずに事故で逝き
返礼をすれば仮面で物を言う

富田林市 新開 千代女

今にして思えばあれがプロポーズ
奔放に生きた末路があわれ過ぎ
熟年の相合傘も乙なもの

富田林市 片岡 智恵子

告白をして楽になる日記帳
一徹であとへ引けずに登る坂
勢いが過ぎて仇矢が放たれる

岸和田市 島崎 富志子

年金が旅の楽しさ少しくれ
編棒を動かす老いのぐちこめて

女らしい仕草に安堵の里帰り

芦屋市 竹中 綾珠

草紅葉も美しと見て土手散歩
街行けば木犀の香に出逢う頃
翌日は足の痛み増したとは言えず

兵庫県 藤後 実男

年金をあてにしてきた縄電車
会議室出てから無口よく喋り
OLが昼のひととき日向ぼこ

羽咋市 三宅 ろ亭

秋茄子よいつまで花をつけるのかね
変化球投げて反応確かめる
文化祭自作確かめ他に及ぶ

交野市 山本 テルミ

松茸も食えず仕舞いで秋が逝く
子すずめがはじめてあがる屋根日向
温泉の湯気に旅情の友が出来る

寝屋川市 平松 かすみ

ああ十二月奥様になる娘
新人類値切った分で食べに行き
くたびれてヒップになじむスラックス

茨木市 井上 盛雄

アタツシュの中に男の覚悟など
風の糸自分で切って飛んだ夢
お茶といううれしい日本のご挨拶

均等化男女平等我が夫婦

吹田市 茂見 よ志子

小春日の散歩見知らぬ人と解け

冬の陽を騙す造花を買ってくる
人間の性を喰ってけもの道
眼帯の下に持つて涼しい目

高槻市 川 島 諷云児

お金では買えぬ人情の機微に触れ

高知県 曾我部 裕

妻にいま声を掛ければ負けになる

老いて子に従う心する余生
足元を掬われそうな言葉尻
振り返る眼を意識するニュールック

大阪府 古 川 美津枝

年の瀬の町で多弁な人と逢う

餅菓子に胸やけなんぞ秋不粹
米ソ会談ネクタイよりも興味あり

吹けば飛ぶような男の十二月

境港市 細 木 歳 栄

ガラクタに埋もれながら生きており

コスモスの主義を持たないにぎやかさ
くすりからアロエに替えて癒えはじめ

大阪市 渡 部 さと美

秘めしままそれも一つのドラマかな

亡き父の墓にたつぷり酒注ぐ
雪が積む礼義正しく美しく

自惚れを三面鏡に嗤われる

堺市 柿 花 紀美女

子等遠くわびしさ募るこぼれ萩

泣き言は言うまい見事な茜雲
ブラットホームふいに木犀の風に会う

島根県 藤 原 鈴 江

ためらわず足跡残すかたつむり

天からの掛矢の音で家を組み

出雲市 石 倉 芙佐子

影法師お前も足が悪いのか

影法師が情を少しずつくれる

富田林市 松 本 今日子

生涯を旅人である駅の風

苦提樹の下で正直者の顔

吹田市 園 田 文 子

鳥取県 森 山 盛 桜

告白をされても困る藁人形
想い出の古都の紅葉はもえたまま

いのちがけアワダチ草も生きてます
余生ある女の性を丸く生き

鳥取県 森 山 盛 桜

鳥取市 広 本 文 子

人生の流転どこまで脇役者

富田林市 松 本 今日子

鳥取市 森 山 盛 桜

人生の流転どこまで脇役者

富田林市 松 本 今日子

鳥取市 森 山 盛 桜

人生の流転どこまで脇役者

富田林市 松 本 今日子

鳥取市 森 山 盛 桜

人生の流転どこまで脇役者

富田林市 松 本 今日子

鳥取市 森 山 盛 桜

人生の流転どこまで脇役者

富田林市 松 本 今日子

鳥取市 森 山 盛 桜

人生の流転どこまで脇役者

富田林市 松 本 今日子

鳥取市 森 山 盛 桜

人生の流転どこまで脇役者

富田林市 松 本 今日子

鳥取市 森 山 盛 桜

人生の流転どこまで脇役者

富田林市 松 本 今日子

鳥取市 森 山 盛 桜

人生の流転どこまで脇役者

富田林市 松 本 今日子

自選集

藤村 女

友二人ボーナス貰った頃を恋いても不如意で孫の数に吐血落葉かさこそ歴史の道の石畳ソーマン干す腕に一途な冬がある茜雲古都は旅愁の瞳に沈む

正本水客

ぜいたくの遠い記憶にたどり付く
みの虫の動きを風がのぞきに来
ツインビル夕陽に思い秘めている
女あり輝き続けて走り抜く
秋空に消えた噂を忘れない

小林由多香

蟹刺へ山陰の海荒れている
首位の座を守る采配胃が痛む
ふりかかる火の粉は父の背が消す
玉碎の島観光でよみがえり
澄んだ瞳に疑いなどはかけられぬ

黒川紫香

群れに居て母困らせていることも
大根を買うひと亡妻に似ていたり
背のチャックおろしてくれと気を許す
滝落ちるまわりをみんな紅にして
湯煙に霞む女は白かりき

市川鈴魚

土の温みと愛は知らない硝子靴
ロダンの形で里の情を考える
蠅一つ亡母のいそうな冬障子
思い切り泣けと言うたは冬の風
森の朱がふえて誘いは京の旅

本田恵二朗

これしきの波に負けまい夫婦船
話題の糸うまく引出す聞き上手
近道を知っているからあわてない
妻の留守一人芝居の下手役者
余生街道心豊かに漫步する

児島与呂志

長野文庫

適当に生きること知る歳になり
ほどほどの事をずばりと指摘する
おぼはんの言う通りだす本当だす
しっぽくの味を知ってる人と逢い
法善寺素通りされる路地になり

工藤甲吉

山内静水

天皇でないから帽子かぶらない
背番号閻魔のほうでつけてくれ
三百六十五日鳥に嗤われる

上阪して

大阪で蟹と逢うのも久しぶり
愛染明王はみどりに炎え上がり

大矢十郎

藤井明朗

三界に家も屋敷も持つ女
妻病んだ日をふと思う二人きり
ぼけたとは言わずに角がとれました
光栄の到りですよと喜ばせ
怖いのも中二可愛いのも中二

野村太茂津

水粉千翁

静かに静かに善人めいてくる
友の忌師走葉隠読み耽る
年末のストレスみんな捨てに來い
心だけ豊かで土地単価訊いてみる
異端者が逢いたがってる懺悔録

サインでもよいと配達急がせる
壺割れて空気ふるわす声となる
秋風を突き上げている京の塔
京の街五重塔が低くなり
行雲流水心を洗う額の文字
花屋にも秋が来た来た女郎花
札状はあまた竹原弁でも来るハガキ
爽やかな目覚時計が八ツ鳴る
十万円金貨で買いたいものしてみなし
子を捨てたおんなも婆あになりにつけり
健康なしわ実年の魅力なる
秋の景さわやかにみるバスの旅
親友の計を聞く秋風身にしみる
孝華氏逝く(2句)
いそぐことないのに浄土の旅へ発つ
秋風へ面影遠く雲の峰
見上げれば月のまるさに見直され
静動一如研ぎすまされしかな茶筌
哀歎を分けて失うものがない
遠州を問えば枯山水に尽き
欠くること余ることなし円無心

米澤 曉明

選挙カー妙な理屈の正当化

ナイターも駄目ジャンケンに負けた父

押す人の情にすぎる車椅子

床置き谁也知るまい裏のきず

わが子にも異議を唱えるこんな声

高橋 操子

御得意とよぶ有難きお客様

合掌で心のしこり消して行く

記録より完走しますとお年より

さざ波が私の恋の唄を消す

どぶ池の女の客の国ことば

八木 千代

中国の旅にて

長城が今ブツクからとび出した

天空に爪立ててたつ終の寺

いのちなまめかし故宮の石榴の木

秋風にゆらぐ蓮葉もわたくしも

雑踏に影をかさねて異邦人

小出 智子

情熱をたしかめんとて正座する

お弁当をまだ作らせてくれている

大屋根に一度は登ってみるものだ

友情はあつくみかんの味まろし

齢一つ重ねて走るのをやめる

月原 宵明

秋の酒男が男に惚れている

呆けた振りして二代目に世を譲る

カルストは一足早い冬の貌

目覚ましに三十年を威嚇され

クラス会肩抱いたまま抱いたまま

金井 文秋

古希過ぎてからの老化が足早に

血の気が少なくて蚊も寄り付かぬ

ほっとけぬ性格だから当てにされ

お灯明ライターの火をまだ嫌い

補聴器を売ってる店は覚えとこ

尼 緑之助

秋ある日やわらの宗家寂として

対策のない雄叫びは聞きあきる

仏さん片手拝みを許されよ

テロいじめ千年経っても変らない

これ以上背丈は要らぬ曲り角

橘 高薫風

稲光天壇瞬時塔の影

権勢といえ石舫を水に浮く（頤和園）

白塔に風荷葉の裏ばかり（北海公園）

われここに残り魑魅魍魎となれば（懸空寺）

菩提樹の数珠ありがたや香染ます（華嚴寺）

— 同人 吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

原 仙波

もったいないもったいないで太る妻

野田 素身郎

もったいないもいやしいからと言ふ俗言があるが、女も中年すぎると平気でばくばく食べるようである。夫のはらはらしてる気持が伝わって来る

長男にもうかなわないので寝るぞ

小島 蘭 幸

子供だ子供だと思つてゐる中にいつの間にか何をやってもかなわなくなつていた。あとは寝るしかあるまい。

うっかりと笑顔もらした婦長どの

小砂 白汀

看護婦というのは特に婦長ともなると、どういふ訳かいつも笑つたら損のような顔をしているものであるが、その婦長の笑顔を見つけてなんとなく親近感を持ったのではなからうか。

席譲る若者が居りローカル線

松本 忠三

近頃都会では席を譲る若者などほとんど見かけぬが、ローカル線ではまだ人情地に落ちずというところか。ローカル線がきいている仏壇の前で頑固を懐かしむ

中川 幸一

今となつてはあの頑固さもなつかしく一人言が聞えて来そうな句である。

掃きよせるゴミは昨日の白美著

安藤 寿美子

花も咲いている時は美しく楽しく見られるが、散つてしまえばただのゴミとなる。人間の一生も似たようなものであらう。

名案もあるにはあるが金がなし

崎山 美子

なにを考へてみても行き着くところは金になる。金に縁の無い庶民のため息が聞えそである。

子沢山誰も老後は見てくれず

内芝 登志代

何人育てても今の子は当てにならない。結局はたらい廻しにされるのが落ちか、悲しいことである。

幸せな人だけ集うクラス会

福井 桂香

幸せに暮しておればこそクラス会にも来れるのであらう。諷刺のきいた句と思つ。

みんな留守おしいれの戸を開けてみる

佐藤 藤子

ふだんはあまり気にしていない押入れを何げなく開けて見て驚いた顔が見えるようであ

る。

要る時が過ぎて出て来る探し物

奥田 みつ子

特に新しい想ではないが、要らなくなつてひよっこり探し物が出て来た時のなんとも言えぬ気持などなにも経験があると思つ。

犬ほどの躰も子にはしておらず

片上 明水

今の親は大なり小なり過保護で躰をおろそかにしている。そのくせ家の子にかぎつてなにと甘い考えをしている。

子の部屋があるのに父の部屋がない

田中 隆二

子供も中学生ぐらいになると自分の部屋を持ちたがる。やむなく整理して一部屋あたえことになるが、さて父は居間兼客間兼寝室ということになる。これでいいのだらうか。

内需拡大拡大しようもない家計

大原 葉香

いくら内需拡大と言われても庶民のふところはそうはいかない。政治家は勝手すぎると痛烈な諷刺である。

ヘルメット脱いで女だと判り

浜本 義美

近頃はちよつと見ただけでは男か女か判らない。特に単車など乗り廻すのはそうだ。ヘルメットを脱いだらなんだ女の子かとはよくある風景である。

川柳太平記 (103)

川柳の群像

堀口 堯人

東野 大八

「川柳は気のきいた機智をひけらかすだけの、うすっぺらな文学ではない。表現は軽妙であっても、内容には人情のこまやかな厚味を裏付とした文学である。世上、詩と名付けられた韻文には、作者の異常性格を母胎とした、異常識な作品も混っているけれども、川柳は良識から生れた人間詩であり、当百調こそその代表的な作品である。当時二十歳台の私に、若し基礎的な文学の素養があつたならば、当百調を文学的に研究解明しておくのが当然であつたにもかかわらず、勉学を怠り今日に至つた。はつきいことである。」（「ふうすと」連載「大正の関西柳人」堀口堯人）

「番傘」同人になつた26歳の堯人は引退した西田当百の「川柳当百集」の編集に当り、

成り行きとして明治大正の川柳誌に眼を通すことになった。この一年がかりの体験が、いわば、川柳博士といわれた堯人の出発点で作つては堯人得意の「なめらか調」の素地をつくることになった。「勉学を怠りはずかしい」と反省しているのは、その頃の若さの熱意不足への悔恨が言わせたものだろう。

堯人が作句をはじめたのは大正13年ごろで「番傘」「鯢鉾」「川柳雑誌」へ投句していた。柳号は凡堯伝、しかし程なく堯伝に改めたが、番傘同人に推された大正15年1月水府から命名されたのが堯人である。

同人になると早速、番傘編集の手伝いをさせられた。先輩は小田夢路、河野春三、志方蝶二がいて、「番傘」を月刊にすることで張

り切つていた。番傘の堯人の誕生である。

堯人は明治36年7月11日生れ。本名堀口濟義。福井県大飯郡高浜町の生れ。父波次郎、母ための五人兄妹の三男坊。

○山裾で僕が生れた若狭富士 堯人

○ふるさとの自慢は雪が降るばかり 〃

こんなわけで大阪へ出され昭和棉花の給仕から出世して勤め人になった。昭和3年に結婚したが「実は駆落ちでんがな」と富未夫人は今も屈託なく笑う。こつした世丈けた苦勞人の肌合いが、作句や雑文、講演などに活かされ、口八丁手八丁のなめらか調を生んだ。

昭和18年昭和棉花は合併により江商（現在の兼松江商）社員となり、満州連絡員で奉天にも出され、終戦後の昭和24年江商神戸支店長となり傍ら神戸経済同友会常任理事。昭和33年江商を停年退職し、直ちに大阪衡器株式会社に就任した。「ひらたくいえばカンカン屋です」つまり度量衡器の小さな卸問屋である。そして昭和45年社長辞任退社、以上が堯人の社会人としての履歴である。

「昭和棉花では妻子を抱えて十六人の同志とストライキをやり、そのリーダーでがんばった。金よこせでなく、大阪船場という土地柄に根強く巢食つた因襲的商家制度への挑戦

だった。山川均訳の資本論にかぶれてましてな。若い頃は向うみずで元気がよかった」

と筆者は塊人から当時のことを楽しく聞かされた。駆落女房もさぞ苦労したことだろう。こうした彼一流の反骨精神が川柳の方でも火を噴いていた。

「昭和十年「番傘」七月号の末尾に一〇ポの細字で、今回左記の諸氏より同人辞退の申出あり、との記事が出ている。岩崎蟬古、加賀破竹、田原七緑、堀鳥歌、永先芽十、宮田夕蜩、丹羽紫朝、小川百雷ら八名の名が連ねてある。それと前後して六月四日付で堀口塊人が脱退している。誌上では極く軽くあつかわれてはいるが、当時の番傘幹事の主軸ともいべき人達が大量に袂を分ったのである。正に、番傘史上の大動乱ともいべき危機に遭遇していたと言っても過言ではない。(中略)

脱退の理由の中に、右の内の某君が金銭上のトラブルを起したという虚説が、まことしやかに伝えられて、勿論私も深くそうだと信じていた。(中略)

水府さんはすぐれたアイデアマンであるが実にワンマンな気ままな人でもあった。その点、夢路さんはおだやかでやさしく、誰からも慕われていた。(中略) 私達は番傘の内幕に

疎く、ただただ塊人一派の野心が、これで粉砕されたくらいにしか思っていなかった。ところが或日夢路さんが、

「実は今度の塊人さん達の番傘脱退について、私を主幹として柳社創設の相談があった。けれど今日の実情からしてそんなことをすると、西田当百さん以来の永い伝統ある番傘が廃刊せぬともかぎらぬと思って惜しい彼等と袂を分かつことにした」といかにも哀しげな顔をしたのである。」「川柳文学」333号。其笛堂と塊人。鵜飼蟬朗稿抄録」

筆者は晩年の塊人から番傘脱退の真相を折にふれ詳しく書くことができたが、そのたびに心からの義憤を感じた。この塊人の話を別に宇和川木耳の水府秘話もあった。このため水府なる人物の人間像は音たてて崩壊した。

番傘を出た塊人は、昭和十年七月「昭和川柳」を創刊した。生活川柳を旗印にその意気込みは大変なもので、番傘を凌ぐとさえ思われた。番傘同人で有力な女流作家となった笹本英子もこの誌の出身である。しかし戦局の推移により昭和十六年六月終刊号を出し休刊。

終戦後の昭和二十二年「昭和川柳」再刊の「せんにゅう昭和」主宰、同三十年「川柳文学」に改編し、別号柳徳寺または柳屋徳兵衛などを混

え「ふあうすと」「川柳平安」等に柳話を連載し、その他軒なみという程各柳誌に健筆を揮い、その文才と講演の冴えは見事だった。

塊人は昭和四十六年暮、十二指腸潰瘍で三カ月間入院、死線をさまよったが幸い全快した。この退院を機に日本川柳協会の結成に取組み出した。近江砂人、片山雲雀、中島生々庵、松本橋次、岡橋宣介ら五人と塊人の「飯を食う会」が母胎だった。

近江砂人は塊人に運動資金十万円を渡し、一切を塊人に任ねた。「私はこれを資金として東奔西走することができた。反対もあった日川協の創立が成功しそうになると、各地にいやがらせがはじまった。はつきりした妨害もあった。しかし全国吟社の三分の一を占める「番傘」傘下の各団体には何んの動きもなかった。砂人主幹の意向が秘かに伝わっていたものであらう」と塊人は「川柳」誌の砂人追悼記に記している。昭和四十九年結成された日川協の産みの親は正しく塊人であった。

昭和五十五年十二月十四日没。享年七十七。慈照院済道隆成居士。

★次回は「白石朝太郎」

誹風柳多留廿六篇研究 (二十八丁～二十九丁)

南 得二・小野真孝・本多正範
石田成佳・大屋六郎・八木敬一
鈴木 黄・石田晋一・多田 光

故岡田 甫

478 重陽ハなんにも立テぬ節句也

南 五節句の内、正月の門松、三月の雛、五月の人形及幟、七月の五色の紙をつけた笹竹と、他の四節句には何かを立てるが、九月九日の重陽の節句には何も立てないという穿ちの句。

多田 贊。

岡田 平凡句。

479 白川の名歌能因黒くなり

南 白川の名歌」とは「都をば霞とともに立ちしかど秋かぜぞふく白川の関」。

作者能因は、實際に白川までは行かず、都

でこの歌をつくり、いかにも旅をしたように日にやけたという。主題句は、この説話をうけて作られたもので類句も多い。

霞から秋風長いうそをつき

二八三二

白川の関を窓から覗てる

六六二七

黒くなったハ白川の歌のため

七六二

多田 贊。岡田 同。

480 二タ所立る外山の金屏風

南 外山」は大久保外山が原にあった尾州藩下屋敷の外山屋敷。

この外山屋敷は十三万六千余坪、邸内に東海道五十三次を模して作らせた庭園があった。「二タ所」の「金屏風」は、何れも、箱根と

新居の関所の見立てであるとされている。

五十三次キ日帰りの御遊覧

一三〇三

双六の絵図で出来たる御庭也

一二二八

八木 贊。

川留も手形もいらぬいい御庭

五三二五

多田 贊。岡田 同。

481 立聞て末世へ残る名歌也

南 『伊勢物語』二十二段、業平が河内国高安の女の許に通うのを、紀の有常の娘が少しも嫉妬せずに送り出すので、不思議に思つて行つたふりをして前栽に隠れていると、女が男の身を案じて、「かぜ吹けばおきつしら波たつた山よはにや君がひとり越ゆらむ」と詠

んだのを立聞いて、河内通いをば止めたという物語りを踏まえて、「立聞」という行為は本来不道義な行為で許さるべきではないが、かえって名歌が末代にまで残されるという御手柄になり賞さるべき結果になったとの皮肉を穿った句である。

立チ聞をせぬと一首ハすたるとこ

一三六

多田 〓 賛。岡田 〓 同。

482 小式部ハ地利を功者に口こたへ

南 〓 『古今著聞集』巻五にある話。

定頼中納言の問いかけに對して、小式部内侍が答へは、「大江山いく野のみちの遠ければまだふみも見ず天のはしだて」というものだった。

小式部内侍が、大江山の地名を入れて、「文見ず」と「踏み見ず」の両意にかけてうまく大江山の歌に詠みこんだのを「地利を功者」とし、「口答へ」は小娘が長上に対して許されざる無礼な行為であるが、道理にかなったその当意即妙を讀えた句。

口こたへだが格別な大江山

宮 二二

おとなをやりこめた哥も定家入

一三三

小娘にいくの道ではりこまれ

四一 20乙

多田 〓 賛。岡田 〓 同。

483 神前てきの字を五ツよんで聞キ

南 〓 小式部内侍に関する説話を詠んだ句。

小式部内侍が北野社で読んだ和歌は、「鳴け聞こう聞きに北野の時鳥君のみかげでたつた一声」と伝えられ、此の歌の中に「キ」の字が五つあつて、首題句は洛北北野天満宮の神前でこの歌を読み、そして彫刻（或は絵馬ともいう）の時鳥が啼くのを聞いたという謎とときのそれだけの句である。

書たものの物をいったハ北野なり

三二 7

多田 〓 賛。岡田 〓 同。

二十九丁

484 艶藏人も即言て落をとり

小野 〓 「艶藏人」は「ものかわの藏人」の異称。徳川左大臣実定の家臣。

福原遷都後、実定は一夜京都に戻り小侍従

との名残りを惜んでの帰途、愛惜にたえぬまま、供の藏人に命じて小侍従の様子を見させた。藏人が様子をつかがえは、小侍従は別れた時のままの姿で立ちつくしていた。藏人が

「物かはと君が言ひけむ鶏の音の今朝しもな

でか悲しかるらん」と詠めば、小侍従は「待たばこそ更ヶゆく鐘もつらからめ帰る朝の鶏の音を憂き」と答えた。

藏人、この由を伝えると、実定もいよいよ感動して、これ以来「ものかわの藏人」と呼ぶようになった。

本句は、これを詠んだ詠史句である。

藏人ハ我カ物かわにして帰

五四 37

仇名のはまれ藏人に侍従なり

八一 21

大屋 〓 賛。『平家物語』巻五、「月見」の項。

多田 〓 賛。岡田 〓 同。

485 汐を汲む邪魔を二色残す也

小野 〓 既出の須磨における中納言行平と村雨松風の記事を詠んだもので、別れに際して烏帽子・狩衣を形見として兩人に与えたという。

雨には烏帽子狩衣ハ風は遺

二八 18

中納言わかれの時はたちのまま

四 7

八木 〓 烏帽子や狩衣を着たのでは汐を汲みにくからうという方が。

多田 〓 行平、松風、村雨で文句なしと思つたが、「二色」がよくわからない。「二色」は二点で「烏帽子」「狩衣」か。こんなものは汐汲の邪魔になるというのか。

岡田 〓 その通り。

水煙抄

黒川 紫香 選

高槻市 笠嶋 恵美子

八尾市 高杉 千歩

山紅葉湖の底まで紅葉成す
足折れたバツタそれでも跳ぶ勇氣
マネキンの微笑が消える灯が消える
自販機の疑い深く落ちる音
紙風船しぼんだままの子供部屋

富山市 舟渡 杏花

針と糸男へ秋がわびし過ぎ
遮断機を待つ間取り出すサングラス
現役のゴルフバッグを持たされる
てのひらに書いてはならぬ名がひとつ
行方知れずは西国に鈴を振る

藤井寺市 赤木 和子

やがて壊れるガラスの靴を大切に
恋のなかほど混線模様雨模様
誰も手をつないでくれぬ夕焼け小焼け
一日が始まる終わる歯を磨く
ポケットに昨日の虹のかげらなど

計算をする日もあつて十二月
半額に二度びっくりしてあきらめる
企みの行方を追えばあわだち草
忘年会三日つづいた鍋料理
生き恥をさらす個展へ鈍る筆

名古屋市 藤井 高子

ライバルの足音だけがよく響き
げんこつの中で泣いてる指もある
人の世の長し短かしどっこいしょ
からからと枯葉の私語をもろて来る
つじつまを合せて綴る冬の章

佐賀県 寺中 三枝子

木枯しへおとぎばなしの実がこぼれ
熱の子へアイスピックが夜を裂く
にこやかな会釈へ妬心ふとよぎる
模索する掌から偶像崩れ去る
約束の重さを男知りはじめ

熊本市 永田 俊子

歳月が生まれ故郷を遠くする
栗のいが人の情をよせつけず
わがままを通したあとの白い風
忍従を埋めずめる過疎のそば畑
ひとり旅同士の席を温め合う

熊本県 大川 幸子

妻の瞳の死角危険に触れたがる
愚痴ひとつこぼさぬ母の丸い背
レストラン何時もの席でほっとする
母さんの通訳で孫よくしゃべる
虫の声お茶が恋しくなっている

熊本市 宇野 昭代

漢和辞典国語辞典を寄せて読む
老化現象ですとはきついお医者様
横顔のままで女が言う別れ
姑の留守私の味が煮えている
お伽話知らぬ子ファミコンには強い

高槻市 河瀬 芳子

万一の仕度病夫には秘めてする

九月二十八日夫肺癌で永眠

「母さんを頼む」といまわの際の夫
運命線が私の伴せ赦さない
踏まれても切られても猶野の薊
意気地なし涙を隠すサングラス

大阪市 清水 康恵

聞かなくて良いことまでも喋る風

カラフルにお皿を並べただけのこと

ライバルとコーヒーゼリーを食べている

夢の中走り続けている私

花道へ転がる父と母の毬

長岡京市 木本 如洲

ふり向けばまっすぐでない道がある

石だたみ霜は夜から百度踏む

洗濯の嫌いなうちの王女さま

雑兵の記憶に海の詩がある

風化した森で天狗の面拾う

今治市 野村 京子

ブライドを捨てたい風の駅に降り

待ち針の頭並べて母が病む

遮断機が下りて考え又変り

そして秋女が紅を変えて見る

ヒョットコのお面は汗がとても好き

竹原市 信本 博子

髭を剃り残して少し呆けている

消灯前コオロギぴょんと跳び出した

街路樹が肩にひとひら秋の詩

海軍墓地手旗を振ってみる「いろは」

病室で稲が彩付く風便り

西宮市 紀市 郁栄

人妻だけを愛して終るかも知れぬ

ある日突然息子が彼女連れてくる

二人だけのはなしが指で往き來する

入院手術

入院を知らせる友を選っている

動脈瘤を切る天命に賭ける外なし

尼崎市 田中晴子

陰膳に南天の箸添えておく

お人好し少しため寝をしとかねば

低い声で唱和している子守唄

台風がそれリユックから出る位牌

表通りをななめに歩く人ざらい

久留米市 鶴久百万両

冬の灯台へ鳥の哀しき声が群れ

泣きごととはよそう水子が哭いている

恨みっこなしと訣れて鬱つづく

めらめらと妬心隠さぬ雪おんな

突然の懺悔へ男虚を衝かれ

弘前市 斎藤 島

一本の樹でも林檎の出来不出来

三年も立てて案山子を棄てられず

悠悠と国道歩く鳩が好き

セーラー服にくっついていた花粉

津軽野は林檎美味しくなつて秋

守口市 森川 まさお

ただの人になつて看護婦帰るなり

あつけらかと不躰なこと聞きにくる

ためらつて磁石はゆつくり北を指す

小さいが今を盛りの花を呉れ
酸っぱい蜜柑の思い出がある運動会

大阪市 上田柳影

無人駅花の香りが出迎える

宅配の栗と松茸に父匂う

秋の陽を浴びて羅漢の独り言

天皇のメガネも光る菊日和

定住と決めると風もあたたかし

熊本市 黒田 緑

心まで揺れたと見えるベンのあと

脇役は主役のためでない誇り

根の浅い草ならばいと捨てられる

自作自演の家を舞台に時を消し

割り切れぬ世を割り切った顔でいる

和歌山市 桜井 千秀

ゼニカネで買えぬ命に保険金

ほの暗い部屋へとけ込む雪時雨

意志の疎通欠いて一つの輪がくずれ

追ってくる影へ油断のない歩幅

折り折りの化粧で生きてくる私

唐津市 相葉 あき

花言葉シルバースhirtで聞いている

シンホニー一人で聞くに惜しい月

肩書のふえて肩幅ひろくなり

筋書が狂い時間を持て余す

静岡市 永倉 僕 川

虫に聞く季節の移り嘘がない
お誘いの受話器へ落す軽い咳

カナ文字を飛び越えて読む老眼鏡
不手際をやさしく攻めて来る上司

兵庫県 脇田米朝

虫すだく仕舞風呂から妻の唄
たこ焼の匂いが秋の胃に刺さり
浮き雲へ架けて見たいな縄梯子
知り抜いて出方眺めている愉快

東予市 小山悠泉

メルヘンの塔へ童話の雪が舞う
再婚へ子が喝采をしてくれる
裏表ない少年に陰がない
生卵働く英気妻がくれ

京都市 松川芳子

テレホンカード恋の手引もしています
階段を軽く昇った日の安堵
秋空へかーるく軽く雲浮かぶ
玄関の夫の靴へ安堵する

吹田市 井上照子

雲切れて門出祝うか靴の音
妻の出す薬信じている平和
くず糸のチョッキが温い霜の朝
世渡りに正直すぎる難をもち

浜松市 吉田かつ一

スパイスの効いた皮肉にトゲがない

中流のカードをいつもふとところに
助手席の夫に風の丸いこと
矢面に立って負けん気あからさま

熊本県 高野宵草

ジャムパンを食べたら幼き日を想い
デイスコから弾き出されて年齢を知る
夜のしじま町は生きてる救急車
ハイミスの悶えを人形みつめてた

静岡県 澤田きん

義理一つ果して心軽くなり
こんなにも良妻だったか古日記
背伸びして行き詰り迄来てしま
画用紙へ好きな色だけ孫はぬり

京都府 木村たけし

打算めく孫は上手に肩叩く
おじいちゃんの笑顔マンガになってくる
企みは袂に冬の街をゆく
坂みちの下りに冬の地図がある

箕面市 椎江清芳

丸窓に月が墨絵の旅の宿
吊り橋も平気バイクの村娘
貧乏はしてもエブロン真っ白い
保母さんが踊ると園児輪を作る

熊本市 北川一進

鬼瓦だけが知ってる子の育ち
精一杯話し別れたのがあの夜

値段など見ないで妻の柄選び
あれこれと荷物が增える里帰り

茨木市 堀 良江

読んでみませんかと聖書が届く
眠るまでママのお話つづきます
ゆれ動くこころ柿の実が赤い
十月の風に私語る野の仏

尼崎市 山田 保藏

貼り紙を禁止しますと貼ってある
万札をあげたら極楽行けますか
何事かパトカー取り巻く人の群れ
年金で暮しても酒を飲む

尼崎市 森 安夢之助

約束を守り馬鹿な待ちぼうけ
何をしても隙のない妻怖くなり
赤札を漁り続ける子沢山
振り向くと妻はウインドの前に居る

岡山県 清水 悠貴女

筋通す声がだんだん強くなる
とめどなく川は流れて花いかに
煩惱が涸れた証拠よ萩が好き
微笑めばほほ笑みかえす絵の女

青森県 富士 トキ

孫を待つように川柳塔を待ち
錠前の下に寝そべる秋田犬
思い出も一緒にしまふ夏の服

孫の描くおばあちゃんの顔皺がない
岡山県 矢内 寿恵子

三食がはずんで無事な保険証
盆灯籠亡夫を呼んでひとくさり
言い勝って敵の数など考えず
路地裏の喜劇情の涙あと

長岡京市 山田 葉子

砂時計そんなに慌てるとは
女一人蛇も一匹飼うてます
片方の耳が噂をききたがる
職場まで及んだ親の深なさけ

尼崎市 丹下 玉子

泣き虫になった私が作る花
私の終焉星に問うてる秋の空
淋しさににがい酒を胃におとす
山々に秋の序曲の絵の具まく

尼崎市 鈴木 良征

ループタイ締めて老化が早くなる
釣り書を漫画の文字で書く世代
真実をベールに包む負けいくさ
孫よりも便利な孫の手を探す

堺市 桜沢 あかり

次郎柿たわわに実る過疎の村
お隣のピアノめつきり腕を上げ
ほとけさまのお茶を欲しがらる孫がいる
切り貼りの障子に短か日が暮れる

唐津市 浜本 ちよ
手を病みて蛇口はいつもゆるみ勝ち
言動は呆け始めたが字は達者

ひと言を控えて隣と近く住み
筋書をはみ出したがる見栄っ張り

兵庫県 東浦 砥代
ぬるま湯に溺れてならぬ母の辞書
チト派手な化粧で良心塗り潰し

見るときの心で変るコケシの目
お茶汲みに立つ気軽さを愛される

鳥取県 土橋 はるお
髭がかゆうてつい叱りたくなってくる
澄み切った女に道をたずねられ

連休に疲れたかかとの高い靴
澄み切った水で老眼鏡を洗う

八尾市 驚見 章

只今の膝っ小僧は土つけて
香水は仕舞うた俣のバリ土産
サラ金のオフイス地獄とも見えす
年嵩が泣いて迷子の姉妹

出雲市 小玉 満江

お願いがあるのに星が流れない
親しさになれて階段ふみはずし
ゴミ袋無駄半分も入れて出す
ついと道曲ってカバンが消えました

尼崎市 吉永 伊三郎

女房に見えないように合図する
コップ酒のあては妻に任せよう
世渡りは下手だが孫に囲まれる
コロンブスの卵ある日横になり

米子市 小村 てい子

お月さんむすめも他家の人になる
手糸解くこわれた記憶からませて
朝を出す同じ言葉をくり返す
親が打つ子も打つ太鼓通じ合う

羽曳野市 吉川 寿美

藤枕想い出漸がつきませぬ
寂しくて一人芝居の芒の穂
ガーベラも女も一途なものを持つ
誰も来ぬ個室の窓の秋深む

広島県 田村 新造

海の墓標か菊の紋章まだ沈む
屋上庭園小さい秋を見つけたり
背番号ゼロも活躍草野球
満ち潮でボラがのぼった川の町

西宮市 松本 一郎

傷ついて遠い記憶の亡母と居る
夢の中これは夢だと否定する
小旅行無口の妻がよく喋る
ふえて来た老妻の愚痴聞いている

大阪市 井上 白峰

夜長の灯消せば何処かで虫の声

換氣扇女の愚痴は吸い取らず

女房が自信を詰める弁当箱

食って寝て喋って終る女旅

尾宮弘治

残業の電話に唄が流れこみ

落ちる陽を背にして帰る母子連れ

鐘の音が揃い兼ねてる京の寺

一寝入りしてから気付く妻の風呂呂

的場十四郎

外人の打率が目立つプロ野球

土産もの配って旅の疲れしる

目配りでわかってくれる妻がいる

案山子にも何かを守る顔がある

池田寿美子

燃え尽くさむ紅葉は風の思うまま

コスモスに少うしルージュ濃くする

信濃路や錦溶かして木曾川(信濃の旅)

満願の疲れさわやか流れ雲(西国詣り)

栗谷春子

蚊が一匹ドラマ終りに近づきぬ

傘いるかどうかにも責任持たされる

飛行機の影一瞬の秋を知る

歯の痛み梨の甘さと冷たさに

伊丹山崎君子

あわだち草上海っ子にも憎まれて

ゆきずりの女の告白きいている

姫君の気分にさせた古都の夜
少しずつ幸せの水娘が呉れる

山口高崎雀声

無所属で一匹狼にもなれず

均等法女房に多くなった留守

美人妻持てば気になる電話口

戦争を知らぬ子戦車に乗りたがり

肩書を今にロボット欲しがるぞ

おみくじの吉が出たので心決め

よく怒鳴る上役意外に恐妻家

授乳する女一番美しい

鳥取太田幸枝

無愛想に開いて閉じる自動ドア

割烹着は白く家計簿が赤い

石橋を叩いて渡り出世せず

占いの凶星に怖い掌を隠す

堺市宮本かりん

省略化かしは目玉だけにされ

ゆで玉子つるん少女の肌をみる

京料理深目の鉢をのぞきこみ

静岡県安本孝平

無器用に生きて古稀まで作業服

躓いた石に未練のしま模様

セールのメニューの味に乗せられる

大阪市喜多佐津乃

ひよつこりと並んだ下駄の懐かしさ
神無月神も出張旅行中

故郷の紅葉を抱いた母の文

鳥取県 黒田くに子

妻や子に充電されて靴をはく

どんぐりの仲間でぬくい輪が出来る

ひたむきに過疎を彩る赤トンボ

鳥取県 田村きみ子

正直な涙少年からもらう

髪を梳く妻は鏡の中の人

残り火にいぬむりしたい風がある

尼崎市 小熊江美

病状を軽く言われて不足顔

梅干の漬け方話す長電話

帰りにはコーヒーを飲む癖がつく

岡山県 千原理恵

反対の旗振ってからウツとなる

切れ切れの愛をつないで花うえる

失言もうまく交わして風見鶏

鳥取県 若林一止

平社員終着駅の灯が赤い

古狸ほど方便の嘘を言い

反省に正座さすのも体罰か

尼崎市 木下義嗣

出戻りの姉に気配る食事時

失敗を許してくれた若社長

壁を塗る職人芸に唯見とれ

岡山県 黒住美穂子

口八丁手も八丁の知恵も借り

雑踏にひとり微笑む日の孤独

謎めいて妖精微笑む月の夜

出雲市 小白金房子

逝った子を偲ぶ羅漢によだれかけ(立久恵峽)

民謡を一つ覚えた箸袋

いじめっ子童話の本を貸して上げ

兵庫県 森脇和子

鈴虫のリズムを変える月明り

マンションの無口に馴れて長い夜

肩叩く孫のこぶしがやわらかい

尼崎市 佐藤美代子

電気釜出来て女はカルチュアアーク

仕事になれ立食いをする仲間増え

老眼鏡かけた目には逆らえず

寝屋川市 井上すみれ

アーケード剥がれてお店恥ずかしそう

箒目を立ててお庭に朝が来る

ちびっ子の恋歌の真似の面憎さ

松江市 吉田笑子

女ひとり風の音にも身がまえる

人形の顔もほころぶ嬉しい日

曼珠沙華恋の残り火かも知れぬ

新発田市 上鈴木春枝

夫の名を借りて巧みに拒絶する
同情を言うライバルの無表情
子の口調母の急所を突いてくる

守口市 結城君子

神前の契りも保証期間すぎ
広角度レンズに正体みえてくる
この辺で妻のブレーキ待っている

岡山県 戸田種子

朝顔も枯れて朝夕重ね着し
日傘の中たたみこんでる内緒ごと
庭石をつとて入るゆとりあり

岡山県 牧野秀香

天高く老いて盛んなゲートボール
栗御飯先祖に秋を先ず供え
汽車を待つ人も少なく過疎の秋

岡山県 後安ふさえ

床の軸変えてまつりの客を待ち
お茶漬でサラサラすます夫の留守
咲きました私のすきな萩の花

岡山県 江口有一朗

病床十年

天運に任せ素直に今日を生き
音もなく香もなく空氣の如く生き
ダイヤルを回し心をほぐし合い

高槻市 芦田静江

炎えつきた主張哀しい風に逢う

夜冴えて松が戸惑う浮御堂
シンボルの噴水赤いバラが炎え

豊中市 小畑よし子

仏壇の花しか買わぬようになり
ライバルとおんなじ人を好きになり
十二月何が何でも片付ける

和歌山市 森敏子

ふせて伏せて母へ心配遠ざける
たそがれてポプラへ急ぐ雀たち
その人は訪れるふつと息ぬきに

西宮市 秋元てる

中国の旅に参加して

ポシエットの師のお守りと上海へ
男なら馬賊又よし地平線
水のない橋より仰ぐ懸空寺

米子市 川上より子

雨やどり深いひさしの方による
道行きの歩幅が少しずれている
さよならをきれいに言えて今日が終る

寝屋川市 宮崎菜月

ふと出会い素直な言葉交わして
ときめきにあの月のままの雲一つ
一筋の道まっすぐに青へ抜け

高松市 竹川憲一

運動会保母は息継ぐ暇もない
動く目に箸が戸惑う生きづくり

コッブ酒ここの親命は盛りがよい

広島市 望月 はるひこ

アイドルを壁に残して子は巢立つ

ここからは心を鬼にする話

成長へおやじの殻をまず破る

唐津市 入江 喜久夫

まずいのか夫は茶漬で食べ終る

秋雨に二人でさした傘一つ

往診の医者も驚く気の強さ

大阪市 榊 本 路 児

失言で人間性を認められ

停年もボーナスもなく小商い

あの人も貸衣裳らし桐の紋

今治市 渡 邊 伊津志

身に覚えあるから手相信じ切り

母の爪切って脆さに眼を見張る

惜しまれて去る人柄が背に光り

田辺市 染 道 佳 明

松茸を両手に提げた古写真

枯すすき泡立草の波の中

インスタント食品が続く食卓の恐怖

倉敷市 田 辺 灸 六

私此処ここよと金木屋が呼び

引立て役が似合う刺身のツマが好き

磨く歯が少なくなつたねとブラシ

密会の二人に能登の海荒れる

鬼灯を含んで少女人嫌い

母の轍踏まぬ女の男運

唐津市 山口 高明

再就職椅子の固さはがまんする

ぐい呑の程よい量で酔うて来る

任務終えてもかかし立てたまま

新潟県 高 野 不二

どんじりを走るあの子は優等生

乱雑な玄関のはきもの踏んで出る

昼間さえ灯に頼る町工場

大阪市 宮 下 と し

年齢とって来てからの妻白が好き

雑草を喰べた話も妻知らず

ボクも見る妻の鏡を留守の間に

榊原市 西 本 保 夫

なんとなく小走りになる十二月

右向いたままさびついた風見鶏

会釈され思い出すのに時間かけ

藤井寺市 福 元 みのる

アルバムに背広の父がありました

心経を唱え善人顔になる

人一人増えて隣の笑い声

鳥取県 西 川 和 子

愛媛県 八 塚 三五島

広い空知って蛙は井戸を出る
街角の地蔵と仲良くなる散歩
河川敷呑んで大河をとりもどす

鳥取県

乾 隆 風

六十になつても老母に案じられ
ネックレスをかけて数珠を忘れて来
この壺には菊の白さを活けて置く

大阪府

山 田 妙 子

コスモスに誘われ旅に出たくなる
倅せはほっこり炊けた朝ごはん
ヒロインになつたつもりで秋化粧

和歌山県

田 中 隆 積

在米の兄家族を想う

大陸の空気のうまさ伝えてよ
カスタムに慣れたと明るい便が着く
日本なら高値で住めない家に住み

兵庫県

奥 野 テ ル

白足袋に女の意地が光つてる
湯煙りに詠りの人も同じ傷
茶柱を信じて母の旅送る

鳥取県

津 村 八 重 子

児の瞳には母がいちばん美しい
福引も当らぬ師走通り抜け
芸術を食べております活づくり

鳥取県

久 野 野 草

栗の実が落ちる隣は出稼ぎに
余生いま月に叱られながら生き
真心を開けば人が近く寄る

吹田市

山 田 里 子

三十年振りの銀座を子と歩く
一つして一つ忘れる十二月
初雪を知らせ帰省を待つ囲炉裏

八尾市

松 下 蕉 露

火遊びの時間も秘書のスケジュール
伝言板怒った時間書いてある
系図書どこかで嘘が引き継がれ

岡山県

後 安 江 山

境界で真白に生きる葦の花
水引草そこにも秋が来てました
和服似合う女に負けぬ服を買い

和歌山県

山 田 久 子

吾子かと疑うような口をきき
風がふく一人よがりと耳もとへ
女房のふえた白髪に手を合わし

島根県

坂 本 雪 路

公園で青春の詩拾つて来
コスモスのゆれる風情がふとわびし
友が逝く知らせ烏のないた朝

島根県

喜 島 ノ ブ

人形を里子に出した淋しい月

どんな夢見たかしきりに寝言い、う
ひとくんだり揉めて納まる女部屋

十和田市 阿部 進

手袋の握手に嘘がひそんでる
秋晴れの川原で孫といも煮会
朝風呂で今日がはじまる旅の宿

大阪市 川原 章 久

網棚に誰が忘れた栗土産

懐かしい最初のデートのラムネ瓶
天牛のオツチャン チンマリ座ってた

岡山県 伏見 すみれ

別人になって出て来る美容院
これだけの職場に僕の席がない
好物がどうであろうと母の味

西宮市 上嶋 ふさ子

神無月神さんつかれて旅に出る
片すみに咲いたコスモス淋しげに
孫たちがやさしい言葉の贈りもの

大阪市 今西 静子

生活の匂いこぼれる初発ベル
古い二人今日のカレーは辛口に
日用の単語勉強ハワイ行く

泉南市 坂根 流水

菊かおる寺に小町の像のぞく
だんじりに坊さんまでが狩り出され

秋祭り松茸一つ買ってくる

羽曳野市 麻野 幽玄

泣いたらあかん今日は娘の佳き旅立ち
浴びる程呑む人と居てマイペース
一年で早いですねと古い二人

岡山県 福原 悦子

天高し町が揺れてる運動会

同窓生釜山旅

昔話風化しているビルの街
渚立ち少女を偲ぶ海雲台

徳島市 宮武 まつ女

責任をのがれ勝手な釘を打つ
太陽の高さへ恥じぬかたつむり
宅急便いっぱい詰めて届く愛

大阪市 新井川 青舟

ストレスがたまっただけ書く手紙
雲水の一汁ゆっくりかみくだき
自信ない答弁で声尻すばみ

河内長野市 植村 毬代

隣の庭覗いているのはうちの花
神々に通じる言葉覚えたい
ちぐはぐな舞で人生しめくり

岡山県 松本 元江

心病む冷たい風のささやきに
それぞれの想い沈めて干すグラス

本枯らしの広野へ招くすすきの穂

大阪市 亀井円女

嫁からの電話今日もたつぷり一時間

粗忽者で包丁研いでもらえない

老夫婦互いの頑固は見えない振り

旭川市 朝倉大柏

平凡という倅せにいる笑顔

編曲は妻にまかせていく余生

隙見せぬ男で猫も寄りつかず

桜井市 前山美恵子

カーテンの向うでコソコソ花泥棒

クリスマス年々靴下でかくなり

陽だまりを歩けば心のかげに会う

泉佐野市 大工静子

彼岸明け日傘持ったり忘れたり

孫が書く猫の寝たよな丸こい字

洗面の鏡にうつる垣根バラ

ロサンゼルス市 加藤明美

母乳を吸う娘の将来夢に見る

秋近し涼しげに鳴く虫の声

寝ぞうまで似てくる仲の良い夫婦

大阪市 堀口欣一

新世界温泉出来る頼もしさ

特急で来て特急で去る人よ

ただひとりふるさとはよしただひとり

寝屋川市 立床晴風
遮断機の向うと手話のセーラー服
おもい出の葉見つけた古日記
散る紅葉宿す土管の味気なさ

佐賀市 古川一徳

現ナマが動く裏にも道がある

単線の片道切符にある期待

メリットばかり欲しく主張が縮まらぬ

呉市 蔵重成人

晩年の刃は錆びたままでよし

足跡のつかない街を捨ててくる

唐津市 筒井朴竜

アジア競技お株とられたお家芸

老いて子へ習うも楽し意欲湧く

唐津市 米倉彩女

はしゃいでるリュックの中も紙おむつ

騎馬戦の軍艦マーチなら許す

岡山県 杉本伊久栄

未だ夢があります鏡に写す顔

無人市今日は芋の子買って来た

静岡市 柳澤たま

点滴を眺めてこれが命綱

背を向けてひそひそ話聞いている

藤井寺市 菊地繁男

絶え間なく引導鐘の鳴る彼岸

駅前案内板にベビー帽

広島市 流 奈美子

無花果にも花があったと言う話
気がつけばこんなに欠けてる認印

米子市 大 田 みさと

針千本のんで忘れた恐い嘘
配られた人生図には逆らえず

弘前市 真 喜 内 實

こすもすがけなげに咲いて父を待つ
妻の使い一つぐらいはやってやろう

京都市 小 林 英 子

青春を追いつつあゆむ浜の道
すわ着地国際線の大車輪

鳥取県 鈴 木 ふみ子

澄みきった丸いひとみに邪気はない
コスモスに道をゆずって遠まわり

静岡市 三 浦 つ ね

胃の調子茶碗よく知る朝の膳
弱い子に鉢巻させて強く見せ

八尾市 椎 尾 公 子

嵐山帰りは湯豆腐ときめている
陶枕備えられたる木曾の宿

島根県 菅 田 かつ子

まっすぐに歩いているのに片ちびり
可愛がりすぎたインコが籠を抜け

岡山県 富 坂 志 重
合掌をすればざんげが先に出る
まばたきも出来ぬ夕日に赤とんぼ

西宮市 飯 森 泰 世
敬老会ちよっと紅つけ出かけます
旅の夜は長い浴衣でがまんする

今治市 山 田 宝 保
トウキビは十二単衣を引ん剥かれ
献立に凝っても二人だけの膳

岡山市 中 嶋 千恵子
伝言を残してかえる孫が好き
彫り深き顔に打算がみえかくれ

奈良県 山 村 有 佳
留守番のおやつに栗と青蜜柑
花よりも雑木紅葉を好きになり

堺市 小 西 小 雪
一日を詩人となりし空の青
明日が有りもう走るのは止めにする

大阪市 島 路 太 郎
好き嫌い好み変って老いてゆく
投げ出した足の長さが子に負ける

大阪市 富 岡 温 子
松茸の御飯を炊いて孫を呼び
セールスに又だまされた小さい欲

静岡市 久 保 き ぬ
合掌をすればざんげが先に出る
まばたきも出来ぬ夕日に赤とんぼ

西宮市 飯 森 泰 世
敬老会ちよっと紅つけ出かけます
旅の夜は長い浴衣でがまんする

今治市 山 田 宝 保
トウキビは十二単衣を引ん剥かれ
献立に凝っても二人だけの膳

岡山市 中 嶋 千恵子
伝言を残してかえる孫が好き
彫り深き顔に打算がみえかくれ

奈良県 山 村 有 佳
留守番のおやつに栗と青蜜柑
花よりも雑木紅葉を好きになり

古希過ぎてなお身嗜み忘れずに
叱られて障子の陰で覗き見る

島根県 小田川 智重子

父さんの眼鏡にくさりをつけましよう
もやもやをベランダいっぱい干しました

岡山県 平田 たけよ

リハビリの一步一步に神の加護
たる神輿孫の鉢巻き追いかける

奈良県 井上 大

奈良坂も阪奈も混んで秋が来る

学習塾が鶴首している五日制

島根県 岩田 三和

誰よりもでっかい大根参加賞

コンバイン汗もかかずに刈り急ぐ

八戸市 島田 昭治

真つとうに生きて貧でも悔いは無し

聴き上手秘めごとまでも話させる

大阪市 吐田 純子

遠い娘の顔が臉の奥にある

食欲の秋で猫まで太り出し

出雲市 竹治 ちかし

内職の手間賃笑うサロンプラス

濃い影つくって照らす投光機

和歌山県 北山 凡太

負けたから笑ってお茶を濁しとく

双六は上がってからの孤独感

倉吉市 田中 八太郎

巨人負け虫の音色も喧しい

割勘の連れはトイレに行ったまま

米子市 宮本 佳女男

物忘れ多きをかこつ共白髪

無職さと言いい切り趣味に生きる幸

高槻市 笠松 高子

十勝野はどこ迄も何処までも続き(北海道旅行)

峠からみる国後は霧の中

豊中市 辻川 慶子

虫千の好きな着物に手を通す

鍵っ子も母が帰って明るい日

高知市 北川 竹萌

留守番をして耳を搔くマツチ棒

五稜郭明治の夜明け願みる

青森県 波 ただお

リング園色と匂いを満喫し

造花には見向きもしない蝶の知恵

和歌山県 森 三枝子

夫の皿一切れ多く盛ってある

靴底が癖と個性を秘めて老い

高石市 宮田 純一

ふるさとを愛した父の墓の苔

湯どうぶが恋し熱燗また恋し

岡山県 池田 半仙
弱い日ととても強い日お天気甚

切札に使う言葉は秘めておく

唐津市 浜本 治幸

街角のガラスに浮ぶ老いの顔
足腰の丈夫な内に旅したい

益田市 里本 たかし

翔んでいる女の乳房小さ過ぎ
不倫かも男の帽子被ってみる

愛媛県 西山 えつ美

流行ってる店へ泥棒またはいり
七面鳥の遺言を聞くクリスマス

福岡市 吉川 一郎

それなりに老妻が居てくれ満ち足りる
レストランコップの水で御用聞き

大阪市 平井 露芳

お馴染みが一組消えた左近シヨ
生水の飲める日本が見直され

愛媛県 藤原 無想

出してやると言う一言が気に喰わず
丹精の菊剪ってまで菊人形

静岡市 丹羽 定次

口火切る勇気を出して纏め役
タイミング良く彼女と口を開き

島根県 森山 英子

一輛を一人じめして娘を帰し
グチ言った昨日の空が晴れあがり

奈良県 和田 萬里

ほっとして気づいてみたら五十坂
母さんの手編みのセーター着ておくれ

吹田市 西岡 豊

上辺だけホイナサイナでよろこばせ
みごもった嫁にベタ靴買うてやる

泉佐野市 真崎 浪速子

披露宴弱味も知ってます祝辞
花名刺それが弱味となるポケツ

鳥取県 乾 喜与志

こめ過剰豊年踊りだけ弾み
年金の師走に温い風少し

静岡市 大石 たき

意地捨てて老眼鏡で見る相手
背を向けて聞くともなしに聞く噂

岡山県 土居 ひでの

嫁がせて苦勞の向きを変えただけ
同情をする口先がうるさすぎ

豊中市 一瀬 福一

ランドセル鳴らして走る俄雨
慰謝料の知恵は一人でないらしい

呉市 岡田 寿美礼

つれづれに句を詠みあかす夜長かな

老いの目にコンタクト入れ星の園

愛媛県 石手武

逃げ腰になった男を追う不倫

衣がえラッシュに匂うナフタリン

せっかちの値引きに釣られ損を買う

父の座は増える孫等に狭められ
新宮市 船越正

島根県 児玉幸子

山道の可憐に野菊秋ゆれる

娘の家で義母は神経使い逝き
御葬式領収証の無い金が飛び

すぎ鍋を囲んで箸の入りみだれ

森阿南さらい優勝一年生
西宮市 瀬尾六郎太

大阪市 渡部トキワ

朝もやと湯船まくらに露天風呂

国富めど人富まずウサギ小屋ねむる

ボーナスで小遣くれる娘婿

喜寿祝い元氣な祖父を孫描き
東大阪市 大平太一郎

河内長野市 大西文次

咲き終えた花に毎日水をやる

披露宴水の鷺も汗をかき

豊作を喜ぶ蛙の曼珠沙華

国際線茶漬の味が恋しくて
豊中市 額田明吉

大阪市 松岡久留美

故郷の親を写真で安堵させ

ふりかけでかけこむ茶漬午前様

孫の土産おための方がたくなり

地鎮祭固めの砂をじっと見る
熊本市 立道善太郎

岡山県 三村美恵子

カラスウリの花がヒントのレース編む

不治の身を妻の情で生かされる

初栗のごはんは昔語る膳

大阪府 橋本悦子

島根県 園山世似

老人の体操園児に笑われる

つれづれの身に句の友の有難さ
公園で伸びのび遊ぶ日曜日

虫の音を子守唄とも聞きながら

大阪市 朝田晃世

和歌山市 三谷周三

城や堀いらぬ現代核が飛ぶ

古代人の酒船名にロマン追う
山なみは一雨ごとに紅をつけ

例外が多く普通のこととなり

— 水煙抄 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

中川 滋 雀

死にたいと　されど薬は飲んでゐる

河瀬 芳子

言つてること、反対のことを何気なく繰り返す人の弱さを衝いて、哀れとも思える面白さが無駄のない句語とともに光っている。ひよつとこの面を被つて出遅れる。

野村 京子

出遅れはしたが、囲りを気にしない闘志が被つたお面から溢れて軽妙。

騙されていよう氣付かれないように

大川 幸子

騙すより騙されてやる辛さ切なき、女としての愛の温さがしみじみ伝わって来ます。

ドンファンに舌に合せたペンチ購う

寺中 三枝子

どんなに長く甘い舌だったのか、中七の巧みな言葉がこの句を盛りあげて痛快。

足跡の同じ形に今日も暮れ

永田 俊子

どうもがいても一日、平凡に暮れた有難さと愚痴を抱いて暮れてくる。そんな思いがすららと詠まれた句の奥に覗きかけて秀句。起承転結悼みを領つ仏の掌

吉川 寿美

人生五十、慈母観音のお手はやさしく、幾坂越えた悲願の終幕を包むでしょう。

夢でしか逢えない亡母が出て呉れぬ

松本 一郎

母を恋う夢は、はかなくさめた後味の甘さ温さだけ思い出させてくれる。共感です。

カプセルに容れてとつとく泡銭

上田 柳影

泡銭だからと言つて、ばらまくこともないが、カプセルに容れてもが、軽妙で洒脱。

したたかな顔などいない田舎道

足立 由美子

しかし夫の留守を守つた、立派なオバちゃん笑顔にも絵になる自然が浮かんでくる。

食べたがり寝たがりそしてやせたがり

山田 保蔵

飽食の時代に矛盾する痛々しい願いをついて、ひと息に読ませる佳句になりました。

自分史のどこでシナリオ変えたやら

黒田 緑

ピリオドを打つまでこんな筈では無かった。ストーリーを変えたのは自分だった。

流れ星児の約束を掬い上げ

森脇 和子

純真な願いに負けたのは、大人にしたいさせたい。美しい「約束」掬い上げます。

叱られた痛みは小箱から出さぬ

木村 富美子

仕舞いこまれた痛み、繊細な女性感があふれた思い入れが微妙に伝わってきます。

鳩を出す帽子を何時も持つている

相葉 あき

鳩を出す自信に、作者の希いがほのぼのと伝わってきます。

本心は訛になつてほとばしり

朝倉 大柏

ひと言が、つい国訛になった善人の表情と情景が、すがすがしい句になりました。

風下と風上という運不運

麻野 幽玄

運だけでないとは言うが、一言では割り切れぬ人の世を、作者の眼が温かい。

秋の夜を岡本綺堂ものがたり

堀口 欣一

着想とリズム感の良さに、読書の秋が一層深まって静かな人物像が浮かびます。

割愛するに惜しい句を、残りの行数へ。

何事もなかったように猫が居る

堀 いくの

ふるさとで先ず井戸水のうまいこと

山本 半銭

敬語を使って日頃のうさをほらしてる

佐藤 美代子

逃げ道を少し残して子を叱る

浜本 治幸

広重の絵は真ん中を人が行き

山田 宝保

愛染帖

橘高薫風選

米子市 八木 千代
うす闇のほとけを仰ぐほどの恋
いくつもいくつも帽子をとばす旅の風
西宮市 林 はつ絵
人の世に過去の華なる彼岸花
島根県 小砂 白汀
とすると落ちて鬼にはもうなれぬ
雪しんしんせめて聖夜を語るべし
ペガサスに跨りて入る冬の天
吹田市 栗谷 春子
過去遠く未来は近し桐の葉よ
若き日のウェルテル殿のふみもあり
青森市 工藤 甲吉
タイムレコーダーはいらない蟻の列
てんと虫は小さいな小さいなヘルメット
笠岡市 木山 遠二
陛下お達者軽々お掌を挙げ賜う
米寿われ五十五で逝きし母を恋う
今治市 月原 宵明
七十の顔は情性で洗うとく
メンタイコでうまい晩酌まだ死ぬぬ

近江八幡市 前川 千賀子
かこめかこめ周りの海は潜水艦
男ひとり点景に秋極まりぬ
米子市 川上 より子
想いあり選んだ帽の重たし重たし
遠出して虹にみとれている子猫よ
米子市 小西 雄々
一蓮託生妻を急がす訳でなし
くばみもつ石から神の声を聞く
鳥取県 乾 隆風
菊白し腹立ちごろ吾にあり
死ぬるまで愛をあかさぬ野菊かも
富田林市 岩田 美代
抜群の記憶でいつも落ちこぼれ
車椅子ひとつの秋を静止する
西宮市 松本 一郎
来賓の席に恩師の老いて座し
昼寝する罪の意識を少し持つ
守口市 森川 まさお
氷囊の落着く場所のない頭
ぬくもりのあるおしっこを見て貰い
高石市 浅野 房子
独り言一人で返事する習い
秋深く今宵の艶歌身にしみる
和泉市 岡井 やすお
上がつても下がつても厄介な円
だんじりの屋根に団扇のタクトかな
箕面市 椎江 清
酔う程は飲ませて呉れぬ病み上り
素通りが出来ぬお店で立話
茨木市 堀 良江

噴水に背中を向けているベンチ
ハイウェイ大阪城も目の高さ
寝屋川市 岸 野あやめ
灯を背に守りに徹す亡母なりのき
名古屋市 藤井 高子
ガム噛んで真昼を大人飢えている
鳥取県 奥谷 弘朗
ムードには弱く狸に化かされる
米子市 光井 玲子
音の出ぬ太鼓を今も打ちつけ
岡山県 松本 元江
郷愁やひとつ筋引く赤とんぼ
大阪府 小出 智子
紀の川の流れに添うている記憶
鳥取県 土橋 螢
この生命露の一億分の一
豊中市 奥田 満女
核の世にまだ美しい星がある
唐津市 山口 高明
台風が来るというのにバチンコ屋
大阪府 川口 弘生
夏の陣そしてそれから冬の陣
和歌山市 本本文子
うとんやで聞いているホワイトリスマス
藤井寺市 赤木 和子
刺激はしくて左へ回りだす時計
鳥取県 土橋 はるお
謝っているマニキュアの指が憎い
大阪市 島路 大郎
十月に生れ月子と名付けられ
米子市 林 荒介

雑巾を絞った水が澄んで来る

花むしろ花にも葉があるように
米子市 青戸田鶴

蒼空に継ぎ目がないという希望
今治市 渡邊伊津志

木屋は父の香りで私の香
大阪市 千原理恵

女酔い美しく燃え帰るゆく
吹田市 後藤火鳥

薄化粧一人の部屋が広くなる
兵庫県 北川とみ子

そこまではいつも話をする男
松原市 小池しげお

タイムトンネル抜け出た所脳外科病棟
竹原市 信本博子

タレントの軽い唇にも飽きた
飯山市 斎藤昌平

神さまと押問答をしてみても
和歌山市 西山幸

りんどうに呼びよせられて山へゆく
米子市 沢田千春

タンポポに少しためらう道普請
岡山市 土居耕花

お祭りのかけ声ならばまかされよ
鳥取県 新家完司

いろいろとわけあり御身大切に
羽曳野市 吉川寿美

辻曲る度に木屋香る町
芦屋市 竹中綾珠

歳の瀬や昔をしのぶ術さがある
羽曳野市 麻野幽玄

亡父の絵を時々出してみる挫折
和歌山市 神平狂虎

敵に廻すと恐いあなたで居てほしい
和歌山市 後藤正子

蟬の雄堂々と死を飾る
尼崎市 春城武庫坊

午後からの影は私の前を行く
米子市 政岡日枝子

その先を読んでおとこが手を離す
小松市 小森靖枝

強がりの男で切札持っていない
兵庫県 松本ただし

愛ゆえに女の性の裏おもて
広島県 藤解静風

好き好きと銀婚式に言つたろか
大阪市 山田妙子

古き北京語る東大人の眉
豊中市 田中千代子

中国の旅
中国の旅 懸空寺
河内長野市 植村崑代

好きな秋心ない冬急いで来る
西宮市 奥田みつ子

露草の哀しみ青い露宿す
米子市 菅井とも子

駅長が幼馴染みで拳手をする
茨木市 井上盛雄

雨月でよかった打明けぬままで
富田林市 片岡智恵子

饒舌にわたしを変えた旅帰り
岸和田市 古野ひで

夢の中スローで亡夫逢いに来る
唐津市 仁部四郎

男酒盛り合わせてる女酒
米子市 金山夕子

コスモスの影が離れぬ秋の部屋
高槻市 河瀬芳子

赤い屋根の下で続いている不幸
岡山市 黒住美穂子

愛憎が廊下の奥に立っていた
神戸市 片山紀雄

ふと気付くことばかり増え老いてゆく
広島県 田村新造

嫁いらず観音嫁に付き添われ
寝屋川市 宮尾あいき

長生きもよきかな末つてパパになる
和歌山市 山川克子

本当の勇敢女が持っていた
和歌山県 三宅保

台風目はやっぱり妻だと思つ
愛媛県 石手武

気の利いたセリフを探す負け戦
弘前市 波多野五楽庵

自信過剰少し深爪してしまふ
松江市 舟木与根一

止り木の幸せ舌禍などはない
平田市 久家代仕男

金のない癖に律義が顔を出し
宝塚市 丸山よし津

うす紅にあしたが匂う萩の花

來年の春へジョークと種袋
岡山県 清水 悠貴女

み仏の便りきき度い曼珠沙華
米子市 寺 沢 みど里

灯台のあかり暗夜をめつた切り
藤井寺市 福 元 稔

針山の針の交叉にある戦
米子市 林 瑞 枝

金おろすのにあはらしい手数料
今治市 越 智 一 水

ギター弾く木村好夫のポーズとる
大阪市 大 野 武 太

はらはらと狂い落ちたき胸がある
和歌山市 松 原 寿 子

追憶が揺れると終着駅が見え
伊丹市 樫 谷 寿 馬

里芋の旬に残留孤児迎え
米子市 田 中 亜 弥

島も街も流行ごっこ鬼ごっこ
唐津市 米 倉 彩 女

クラス会手垢のつかぬ毬一つ
島根県 堀 江 正 朗

結局は年がアハハと笑わせる
唐津市 相 葉 あ き

夏帽子今年の夢がかなえられ
豊中市 辻 川 慶 子

山茶花が一輪咲いて四季の音
泉南市 中 井 慧 梢

戦争が青春だった父が好き
岡山県 山 本 玉 恵

自分史に嬉しい色をぬりそえる
米子市 小 村 てい子

一心不乱音を探して咲く野バラ
大阪市 西 森 花 村

大学院虱という字まだ読めず
高知県 曾我部 裕

慈善鍋さもしい過去があつたから
吹田市 西 岡 豊

山百合がかれんに招く行者道
羽曳野市 田 中 隆 二

甘口も辛口もない父の酒
倉吉市 田 中 八 太 朗

聴く方も祝詞の途切れ焦るなり
島根県 榑 原 秀 子

ウエストを少しゆるめに縫い上げる
岡山県 灰 原 泰 子

何も彼も失い人間らしくなる
笠岡市 松 本 忠 三

聞く耳がどうであらうと言うてみる
島根県 板 垣 夢 醉

開かれぬま風呂敷の恋唄る
島根県 堀 江 芳 子

追加してもらい都々逸ながれまず
唐津市 福 地 よしみ

硝煙のけむりと消える防衛費
唐津市 浜 本 ち よ

婦人科の先生とばけがお上手で
豊中市 額 田 明 吉

シャネル五番恋の香りも半減す
岸和田市 芳 地 狸 村

間違いの電話へ孫が素直なり

メカニズム ハイテク明治黙るのみ
羽咋市 三 宅 ろ 亭

吸殻の乱れへ策が通じない
鳥取県 松 下 た つ み

勤めより勤めへ紅を塗り替える
鳥取県 佐々木 裕

夜なべする妻呼んでみる用もなし
唐津市 入 江 茂 久 夫

苦心作程には誰も褒めめせず
西宮市 瀬 尾 六 郎 太

自信持つ女でありたい白い雲
吹田市 井 上 照 子

もっ一度ナイフ角度を変えてみる
富田林市 藤 田 泰 子

投句先 千560 豊中市中桜塚三丁目13-15
橋高薫風苑(ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題「真ん中」選者 森中恵美子

締切 12月10日

(ハガキに三句以内)

投句先

大阪市東区馬場町3-43 NHK
大阪放送局「さわやか広場」係
12月26日(日)ラジオ第一放送
午前11時5分から

発表

句集「愛染」を読む

中尾藻介

薫風句集「愛染」を拝見した。還暦記念も目出度いし、第四句集も目出度い。第三句集「肉眼」の印刷所通いのとき偶々お伴したことがある。ついこの間のように思えるが、指を繰ると十三年間もそれから経つのだ。川柳塔誌上の自選欄に減多にしか作品発表がないし、一緒にするときの川柳大会でも超然としている。つまり句を投じた様子がない。それが全部では勿論ないが、第四句集を手にするまでいささかの危惧があった。自負なしに事を運ぶ人でないので、やがて新しい期待に変わった。句集「愛染」は、既刊三冊の句集からの抄録を兼ねているが、眼目は十三年間の川柳作家橘高薫風の新しい野心でなければならぬ。句は四百に及ぶが、薫風清澄にして、壮んである。さすがである。男は五十歳の最高のシーズンを余裕綽々、心動く句を積んでいたのである。

句の文体は、文語調を主に置くが、これが格調の高さにおいて他の追従を許さない句を

生む。一年三百六十五日私の部屋を飾っている「君にふたころわがあらめやもモノロー忌」の短冊の句にしても、文語を巧みに生かしてのモノロー借用の恋愛句であらう。平俗を詠んでも「西成のシャツステコは王衣に似」と、ユーモアまでを高貴に転じて終う。

「路郎忌や瘦身力士勝名集」〈勇の川白秋の川恙無きや〉「紫に男女の別のあるごとし」口語では出し難い感懐である。「七月よ煙草の輪にも力あり」その力が句にある。漢語駆使、文語多用は川柳を誤らすとの批評或いはあるやもしれないが、人間賛歌の柳俳一如とみればよいのだ。自在の詩「川柳」は、彼薫風に一分野を背負わせていることになる。

「蝶がいて石に老若男女あり」〈失恋の四十九日となりけるよ〉「かたくなに句をつくらねば喪のごとし」まことに独自なものがある。ご母堂の死を詠んでの「砂時計突如竜巻母が死ぬ」は、何人の胸をも打つ慟哭の一句であると共に超絶技巧の句というべきか。句集中白眉の句と申し上げたい。感動（作品から受ける）は、表現（芸といってもよい）を意味するが、私の主張であるけれど、その奥の実体験を否定しているのではない。実を虚とし実に還す、そこから感動の名句が生れる一と思っている。

気にかかるのは、著者あとがきにおいて、母の死前後より斷抜け同然と書いている点である。私も母一人子一人で育ち、母を喪った一人であるが、葬儀の朝まで泣きに泣いて、あとすつと起ったつもりである。役所の仕事（当時刑務所も大変であった）が涙を打ち払わせてくれたのであらうが……。精神的なものへの指向が、妙な悟り、妙な自尊、妙な遁世であつては困る。袈裟をまとつての今東光、瀬戸内寂聴であつてほしい。芸質を極めた川柳家は、これだけ盛んになった川柳界でも微々たるとき、第五句集に向つて新たな出発をしていただきたい。それでこそその第四句集「愛染」ではないか。

還暦を祝われたのであるから、見返りに貴公子の名を捨てなければなるまい。典雅から平俗へ階段を一つ二つ降りればよいことだ。

「恋文の緘は水平線に見え」〈銃殺と同じにモデル囲まれる〉〈飲む会のハガキは箸で裏返す〉の好見本が句集の中にもある。〈愚の酒で愚の骨頂となり給え〉それを地で行つて句に還すだけのことだ。〈八十になったら恋をしてみよう〉でなく、只今から実行である。乞つて句集に書いていただいた「秋吉白石の饒舌雲の黙」の「石」と「黙」のいくきに決着もつけねばならない。お互いまだ若い。

中国吟行の旅

偷しき哉 燕京の旅

東野 大八

観光北京の超目玉の一つである八達嶺の万里の長城を四十五年ぶりで歩いた。兵衣をまとって走り回った頃の長城は、砲火と風化で瘦馬の背中のようにボロボロだった。それが補強改修され、かつての日の面影はない。

雲一つない蒼穹を衝いて聳立する烽火台や保塁へは、ぎざぎざの胸壁に挟まれた石畳を歩いても歩いても簡単にたどりつけない。急斜面のところは、舗道が磨滅し、すべりやすくてへっぴり腰の行進だ。一車線ほどの舗道は往き来する人でいっぱい、七十老人の私はアゴを出して立ち止まればばかりいる。

「万里の長城で小便すれば ゴビの砂漠に虹が立つ

そんな昔のざれ歌を思い浮かべた私に、ト



孫悟空ではないよ！ 懸空寺で

イレのない長城にハラを立てるばかりだ。
長城でけちな話がまた消える

大八

長城の裾の辺で観光写真用の駱駝をみつけた。路郎先生が得意そうに、これに乗った写真の思い出し、薫風さんとその背中で写真を撮る。清潔に身づくろいしたこの老いたる駱駝は、私を乗せると哀しく吐息した。

路郎先生といえは、大同の石仏は、橋高薫風憧憬の涅槃像である。シャッターの中で石仏と彼を捉えながら私として感無量であった。

この石仏とは私にとって長い歳月の果ての二度目の対面であったが、この巨大な石像の貌は、歲月もロマンも感傷も完全に忘却しきった、虚誕な仏性に悟り切つて余情も止めずで路郎先生の懐かしい微笑だけが残った。

石仏にやすらぎそえる長い耳 大八

大同へきて懸空寺を見なければ、この地を踏んだ甲斐がない、と孫通訳に指囃され、一同その気になって出発、遠くて長い長い片道三時間余の旅に入った。

道は完全舗装で平坦一路、色づいたポプラや、青い榆の並木が、泰西名画でも見るようだ。道中、至るところで付近の農民が、その平坦な路上へ穀草類を道いっばいに広げ、自動車の通過を待ちうけている。つまり自動車の重味と速度で穀草の実を落してもらう仕組みだ。運転手たちもこの点は心得たものだ。

道中、枯れた大輪の向日葵の花の円盤を馬車に山と積み上げているのによく出会った。

このひまわりの種は食用油と瓜子(茶卓用)の原料になる。私はこの大輪のひまわりが広大な原野いっばいに咲き猛る、黄色い炎の海を思い浮かべ、ゴッホを想い描いた。

目指す恒山懸空寺は、みるからに怖ろしい大懸崖の中腹に、平蜘蛛のようにへばりついた十棟からなる飛棟画雲の山寺である。三

層からなる鼓楼二棟を中心にしたもので、登ってみると支柱の梁が木造だけに、今にも音たてて崩れ落ちそうな予感に襲われた。小さい一堂には、南無大慈悲観世音菩薩の古びた一軸があるだけ。果していつごろの建造物かどのガイド書には何も書いてない。僧侶はいつも一人だけだそう。売店の老人は「むかし孫悟空がここへきた」と筆談したが、それにしても、よくもこんなひどい崖の腹中に、こんなすくなく落ちそうな寺を造るとは余程奇特な坊主がいたものだ。

この寺のどこに降りたか孫悟空 大八

という駄句を作ったとふりかえり、ふいふいこの寺はおれたちがみるのが最後かもしれないと思つて心中で合掌してめい目した。

紫禁城の豪華な東門、東華門の前通りに、私の勤務する北京総局があった。劉通訳とかつての懐かしいその社屋を捜して歩いたが、今はいふせき町並に一変してその所在もわからなかった。

愛親覺羅・溥儀の自伝『我的前半生』 邦訳

『わが半生』の大冊には、紫禁城最後の皇帝として、この秘境の宮廷の人と建物すべてを描き尽した記録文学の超一級品だが、紫禁城を逐われ、満州国皇帝となった彼は、紫禁城はチミモウリヨウの巢窟で、ここを出たと

き私ははじめて人間になった、と記している。絶えて久しくこの城内を歩き回りながら、溥儀の「わが半生」をくり返し脳裡に思い浮かべ、同行の人たちに回覧させたくなった。

紫禁城 礼儀三百威儀三千 大八

ユーモリストの宮口笛生さんと王府井を歩く。この北京銀座は、昔の千日前の楽天地さながらの東安市場（現東風市場）が中心だった。むかしのこは庶民たちの一大娯楽場だったのだが、今は平凡な一大商場にすぎない私を待たせて笛生さんが手に持てないほどの焼菓を買ってきた。僅かな金で、日本の赤袋に入った高価な菓と比較にならぬほどうまくて香ばしい。むかしは北京のそこそこで「クリヌクイ」と声はりあげて売っていたものだ。この菓だけが王府井唯一の味覚だった。

東風市場の向かいが北京百貨大楼（デパート）でここでも弥次喜多道中ばりの二人にとって面白い体験もあったが、この楼上から見渡せばかつての華麗な北京料亭東来順も、鹿鳴春もない。すべて超級商場へさま変りだ。

私は懐旧の念にさいなまれつつ、北京飯店の珈琲をすすりながら

「惜しむべし歓娛の地、すべて少壮のときに非ず」の杜甫の一章を思い浮かべ、そして「世事、相違ふこと、つねにかくの如く、好

き懐いは百歳に幾回か開かん（陳師道）に思いついた。北京の昔を語るには「歓娛」の地故に寡黙にならざるを得ずで、歓極れば哀感多しの俗言を今さらながら噛みしめた。

今回の北京・大同の旅は、女性十余人の心あたたまる気くばりに囲まれ、これ今生のまとなき愉しき旅となった。同志諸君、まことにありがと、ここに心からの謝辞を述べ書きたいことの九牛の一毛に捧ぐ。

友ありき 北京啤酒もよく笑い 大八

川柳塔社常任理事会（11月1日）

出席者 栗・紫香・薫風・太茂津・柳宏子・形水・雀踊子・萬的・鬼遊・白溪子・笛生・寿馬・小路・重人・武庫坊・正坊

議事並に報告事項

▽大阪文化祭川柳大会について打合せ。

▽太茂津氏から「川柳わかやま」二〇〇号記念川柳大会（62年4月5日）開催について報告、支援依頼。

▽薫風氏から女性コーナー「茴香の花」欄の投句状況について報告。

▽永倉僕川、竹治かし2名の同人推薦を了承。

■12月の常任理事会は1日（月）

第2回 中国吟行の旅 〈2〉

61年9月18日～24日

北京・万里の長城・大同



中国への旅の印象

橋 高 薫 風

麻生路郎先生曾遊の地へ旅する興奮に終始した今回の中国旅行であった。

昭和十三年といえは凡そ半世紀も前のことそれも出発が同じ九月十八日だということのだから、大同の石窟の、あの巨大な石仏に相まみえる年来の夢を果たす旅にふさわしい因縁だ。中国民航機が北京空港に到着する十五分前頃に、右手窓外下方に大きな月が見えた。地平線から20裡か30裡の空に、たった今お陽さんと替りましたといった風情で、仲秋の名月もまだ澄んではいなかった。気が付くと、飛行機が下降し続けていた時だったので、飛行機と月の、下降と上昇が不思議な均衡を保って、月は地平線の20裡か30裡のところを動かないでいる。とうとう機が地上を滑走するまでその状態はちつとも変らなかった。私たちは、登らぬ月の出という稀有の面白い演出を見て、これは幸先のよい恵まれた旅になると確信したのだった。

路郎先生が親しく見聞された五十年前の北京は今の北京でなく、琉璃廠は今の琉璃廠ではない。それ故、「川柳雑誌」昭和十四年二月号掲載の雲崗石窟第二十窟の大石仏の写真

には、小さな石像の破壊された破片が散乱していて無残である。大石仏ご自身の御眼も、玉眼が抜かれてうそ寒く座しておわします。現在は美しく補修されて、啾々たるまなざしを取り戻され、大きい耳で俗人のたわ言をお聞きになっている。五万とも六万とも言われる仏像中、最も親しいこの路郎仏に川柳塔の加護を祈った。

オブショナルツアーというより、全員参加の「天から牡丹餅ツアー」、懸空寺への一日は、文字通り胆に銘じた旅だった。

シルクロードへ向う旅人、シルクロードから着いた旅人が、こもこも心身の労を預けるような寺だ。多くの仏像は、一口で言えは、泥絵の塑像で、かんばせも整っていない。

第一、仏教、儒教、道教、ラマ教、回教、キリスト教などの寄り合い世帯で、説明を聞いていても、いかにもややこしい。堂宇といえは、百米を超すほどの絶壁の高所にへばりついている。まるで夜の蜘蛛が数ひき黒い壁に足を踏んばっている態だ。見るからに妖怪変化が出て来そうな図、棲めは魑魅魍魎になつてしまひそうな構えに、一同ぞっとする。拝観をすませて下りて来て、再び見上げると、更に怖ろしい思いのする数奇な寺であつた。

四国の八十八ヶ所の寺々を巡礼する遍路はその道すじに深い意味がこめられている。懸空寺への道もその通りだった。一直線の舗装路を飛ばすパスは、窓外の景色の移り変りに

より、時には悟空の筋斗雲のごとく、時にはアメリカ西部劇の駅馬車のように思われた。日本内地では思いもよらぬあれもこれもシルクロードへと誘い続けるロマン。砂漠の果てにまで夢の広がる思いがした。

中流 いい気分

飯 西 ミサオ

幸運なことに第二回中国吟行旅行に参加することができた。前日まで行けるかどうか、出産をひかえた嫁のことではらはらする毎日、旅仕度のあてもないこうでもない荷物を出したり入れたりの楽しさを味わうこともなく出発となってしまった。

第一日目の夜は廻龍観泊り、翌日は万里長城、明の十三陵、夜のサカス見物、すべてスケールが違ふ。ホテルは華都飯店、三日目は天壇、故宮、天安門広場を見て夜行列車で大同へ。石炭の町大同から雲岡石仏、懸空寺等あまりの見事さに感動の一語を発するのみで、筆にも口にも尽くしがたい。往路復路はまるで西部劇の荒野を駆けめぐるようで、バス揺れに身を任せた想像の波紋はどんどん広がって夢見心地そのものであった。

再び北京に戻った一行は、琉璃廠や王府井での買物も楽しく、夜のホテル友誼賓館での

買物も慣れてできるようになったところで、明日は帰国となってしまった。北京ダックも食べたし、もう思い残すことはない。

最後の日は文化交流の会合もあり、中国の知識人たちの達筆もさることながら、橘高薫風先生や田中千代子さん（正坊氏夫人）も負けず劣らずの達筆でお返しし、さすが団長と感服した。記念撮影後、名残りを惜しみつつ北京空港へ。そして一週間ぶりに大阪の土を踏んだ。

栗先生や紫香先生をはじめ、たくさんの方のお見送りとお出迎えをうけて、何の事故もなく帰って参りました。また次回も参加できることを祈りつつ。



再見、朱銘さん・岳人・千代・年代

名月が半分になり旅終る
理屈などなしで中流いい気分

朱銘さんの親切

山 崎 君 子

この度の中国旅行では夢に見た万里の長城も、年代さんにひっぱっていただき、やっと征服できました。その他いろいろなところも皆様のお陰で見学でき、すばらしい思い出が沢山できました。皆様ありがとうございました。

九月二十日故宮見学の時のこと、「トイレにゆく人は早くして下さい」との声で、私共は走ってゆきました。トイレは有料でした。一元券を出しますと、手を振って断られました。何の事かわからず困っていましたら後から手が出てクシヤクシヤの一角券が手渡されました。振りむくとガイドの朱さんでした。その時は嬉しき一ぱいで、にこっと笑っただけでトイレに走りしました。

「八達嶺取費所」と書かれたこのトイレ使用券をにぎりしめ、胸があつく涙がとまりませんでした。この券は大事にとっておきます。朱さん本当にありがとうございました。異国での、心にしみるふれあいも、旅の楽しみ、喜びの一つだと思います。

皆様、お世話になりました。謝詞。

懸空寺三蔵法師の雲走る

九つの龍が泳いだ古い寺

露蘭菩薩ただ一人だけ笑み給う(華嚴寺で)

星が降る北京ダックの宴つきて

再見を約す北京のあかい月

中国吟行

奥田みつ子

北京点景

クレーン林立北京大路に陽が昇る

街のあちこちにクレーンが高く立ち並び、

高層住宅が作られている。街全体が只今建設

中という感じ。

広い真直ぐな道路には二輛連結のバス、ト

ロリーバス、野菜を山と積んだ二頭立て、三

頭立ての荷馬車、そして自転車と仲良く共存

しているようで何とも微笑ましく見える。

北京大路ジーンズ娘の長い脚

車の行き交う中を悠々と天秤棒をかついだ

おじいさんや、スタイル抜群の若い女性が歩

いている。中国の人は恐らく肥満ともダイエ

ットとも無縁なのであろう。

夫婦箸箸の長さも平等に

土産に買った竜の彫りのある夫婦用の箸箱

には同じ長さ、同じ太さの箸が並んでいる。
中国の男女は全く平等であり、「女性はその半
分を支える」という考えがそのまま箸箱の中
にも表われている。

大同にて

寝台車目覚めた耳に中国語

大同への八時間の寝台車は四人部屋で意外

に揺れも少なく、快く眠り、ふと廊下を通る

中国語にああ日本ではなかったと思った。

朝寒に小さきホテルのジャスミン茶

早朝に着いた大同は北京よりかなり温度が

低く、鄙びた感じだった。

地の果てを探すと如くバス走る

雲崗の石窟、恒山の懸空寺へと走るバスか

ら見ると果てしない荒地、黄色い地平線、そ

してそこにも人が住み、暮らしがある。

驢馬に乗る大男あり民話かな

万里の長城も、故宮博物院も、頤和園も、

その他みな目を見張るものばかりだったが、

やはり雲崗の石窟が印象に残った。今から約

一四〇〇年前に作られた数々の石窟、風化し

ているものも多いが、五万立方メートルの大小さま

ざまの仏像に心を奪われた。とに角中国の歴

史の古さ、偉大さ、迫力が感じられた。

もう一つ恒山の懸空寺が目に残っている。

絶壁の中程に貼りついたような色鮮やかな建

物である。そしてその辺りには黄色い小花が

ひっそりと咲いていた。

さわやかな秋おおらかに笑む飛天

北京礼賛

田中正坊

今回の中国の旅は、大同の一日を除いては
ほとんど北京とその周辺です。こしたわけだが、
故宮、天壇、頤和園などの名所が想像してい
たよりもすばらしかったことはしばらくおく
として、何よりも強く印象に残ったのは、そ
れらを含む北京市の町並そのものであった。特
に市内の道路の立派であったこと。

復興門から天安門を経て建国門へ東西に通
ずる道路は幅員一〇〇米、片側四車線のほか
に二車線ぐらいの自転車道があるのだから優
に御堂筋の倍以上はある。しかも何十キロと
一直線で延びており、道の両側には街路樹と
は思えないほどの巨樹がうっそうと茂ってい
る。まさに大街の名にふさわしい。

そして中国の顔といわれる天安門前広場、
南北八八〇米、東西五〇〇米ととてもな
く広い。国慶節の祝典などで何回となく映像で
見た広場ではあるが、しばらくはそこに立ち
つくし、壮麗な天安門を仰ぎ見た時、中国の
大地の上に立つているという実感がわいた。
故宮の北側にそびえる景山公園の高台から眺
めた市街の全景もまた格別であった。

「上方芸能」編集長の木津川計氏の持論に

よれば、都市には都市としてのグレード（品格）がたいせつであるという。一昨年、国際都市として知られる上海を訪れていささかがっかりしたが、北京は全く趣きを異にする。これまでの海外旅行で訪れたパリ、ローマ、モスクワ、ワルシャワなどの都市と比べても北京はその歴史的な厚味といい、都市的な景観といい、それらの何れにも劣らぬグレードを持つ都市だと思う。

とは言っても、わずか六日間の滞在で名所と大街の点と線をなぞったにすぎない見聞。北京のふところであるさまざまな胡同（横丁）にまで足をのぼすことができなかったのが心



天安門—千代子・サオ・ミ・てら・坊正・生笛

残りであった。

天壇いま竜三郎の画帖から

捜しもの

秋元 てる

お金にも身体にも無理をして二回目の中国旅行に私を駆り立てたもの。広大な土地、悠久の大河、四千年の歴史、近代化に燃える若い中国、どれにも魅力はある。また、原色の建物のよさが納得できない等いろいろあるがそれは一部分でしかない気がする。何故だろう。私は若い頃、二度、満洲の旅行をした。

「傀儡」と言われた国だが、そこに働いていた若い人々は希望に満ちていた。都会にも開拓団にも、いきいきとした瞳があった。私自身、国境に嫁いだが、それなりの希望も夢も持っていた。戦後四十年、失っていいものはすべて捨てた。あるいは失ってならないものも含まれていたかもしれない。今の私にないもの、欠けているもの、それを捜したい。それは遠い日の自分、失った夢、還らぬ青春。

今回の旅は長城、十三陵、石仏、どれをとってもスケールの大きさに圧倒された。またけげばしい原色も広大な自然を背景とする時、見事にその美しさを発揮し、そこに安らぎを見出した人々の心がわかったような気が

する。懸空寺の原色の伽藍さえ、紅葉した木の葉が散って断崖にひっかかっているようにて好ましかった。建物等いろいろ修復されて観光の具に供されているが、老妓の二度の勤めの厚化粧めいておびいる。土に還るものは静かに眠りにつかせたい。しかし、これは気ままな異国人のロマンチズムか。

さて到着の十八日は中秋の名月、雲一つない天空の月、中庭に鳴く虫の音、耳をかたむけている中にもふと四十数年前の北満洲国境近い街で、和服姿の亡夫と月見の宴とはしゃいだ自分の姿が蘇った。手作りのだんご、ゆれていた芒……この地続きの地に私の短かい生活があった。夢があった。……一週間は慌しく過ぎ、夜の大阪空港に降り立ったら、遺された一人息子の嫁と二人の孫が出迎えてくれた。ああ私の青春の続きはここに生きている。夢でなく。

中国紀行

小熊 江美

出発前は少し不安に思っておりました中国の旅も、お顔なじみの皆様方にささえられ、無事行って来られたことに感謝いたしております。

子供の頃より神秘的にまで不思議に思っ

おりました万里の長城を自分の足で踏みしめ
やった！と思う気持でした。

山を縫う長城に我登れたり

北京で見る仲秋の名月は、樓閣の瑠璃瓦に
映えて異國情緒に満ちた月はロマンチック、
故國でなじみだけに心温まる懐かしさで「貴
女も中国に来たのですか」という気持でした。

北京には中国の顔で出てる月

北京にも月満ち世界は一つなり
頤和園の万寿山頂まで登った時は、頂上近
くはロックガーデンのような大石が積み重ね
てあり、登れるかと心配しましたが、皆さん
声を掛け合い、とうとう山頂の仏香閣まで登
れたことが嬉しく見下す湖畔は絶景でした。

頤和園の頂上に着き玉の汗

断崖の懸空寺には肝冷す

巨大なる壁崖仏に威嚇さる

大陸を悠々貨車が横断す

孤児達もレンガの家で育ちしか

人民帽揃ってかぶり観光す

北京の夜別れのワルツも胸せまる

長城と明の十三陵

上田佳秋

修学旅行の中学生のような気分で初めて訪
れた中国の首都北京。夕闇の中、出迎えるパ

中国十句

春城年代

北京空港の名月 旅のよもすがら
万里の長城ああ長城は夢ならず
長城に友と互いを撮し合う
瓜滿載 馬車にゆられ揺られ農夫
漫漫的の中車にいましむこと多し
土ほこりバス延延と古都大同
民衆の悲願が溜まる石窟洞
斜め下より秋風の立つ懸空寺
地平線に沈みあぐねている夕陽
再見再見名残りの声を置いてゆく

スに乗り、ホテルへと向ったのですが、最初
に驚いたのは道路幅の広いこと、御堂筋の倍
は十分あっただろうと思います。次は町の中
が非常に暗かったことで、戦時中の灯火管制
を思い出しました。そんな暗い中を無灯火の
自転車走っているのです。ぜいたくな我々
日本人にとっては驚異なことでした。

二日目は、万里長城と明の十三陵見物。早
朝から晴れわたり、絶好の秋日和、日本より
昼間は温く感じました。途中、バスからSL
機関車にめぐり合い、一同がカメラのシャッ
ターをパチパチと楽しげでした。長城への昇
り口の八達嶺に着き、記念撮影をすませ、三
々五々と昇り始めましたが、人の波で驚かさ

れました。悠久の歴史を物語る偉大なる国を
この長城で思い知らされました。心地よい汗
を拭きながら降りて来た一行のどの顔にも、
満足感が溢れていました。

昼食をすませて訪れたのが明の十三陵。一
日三万人の労働者が六年も費やした、地下十
米にも及ぶ広大な、そして贅を尽くした皇帝
の墓。当時の人民は相当虐げられたことと思
います。そんな明から清の時代が続いたから
こそ現在の人民国家が生まれたのでしよう。
感慨ひとしおの思いで十三陵をあとにしまし
た。

大同にて

赤川菊野

大同は、山西省の北部大同盆地の中心にあ
り、首都北京を東に望み、北は内蒙古にほ
ど近い黄土高原に位置し、まわりは山に囲まれ
たところだ。この町には大きな炭坑があり
一日の生産高はなんと日本の半年分の生産高
に相当するとか。

万里の長城も見事でしたが、なんと言つて
も雲崗の石窟の石仏は見事と言ふ一言につ
きます。大きいものでは高さ一七メートルから
小さいものになると二センチそこそこ、合
せて五万一千体、その数の多いことにも目

を見張るばかりです。

次は恒山懸空寺。行く途中には人っ子一人姿が見えませんが、黄土の山また山、しばらく行くとやっと小さな集落が見えて来ました。黄土でかためた小さな農家が軒を並べているのが目に入りました。その庭先や畑の中にぽつぽつ人影が見えます。

農家では今、秋の収穫時、コーリヤンや粟その刈り取ったものを道路に並べて車の通るのを待つて車に碾かせ、それで脱穀するので、一台通るごとに棒状のもので上下をひっくり返し、次の車を待つのです。まことに原始的で、のんびりした脱穀風景です。

そこを過ぎると険しい山道にかかります。やつとこのことで懸空寺に着きました。大きな山の側面にへばり着くように見事なお寺が建っているのには驚きました。好い顔の仏像、日本で見る仏像そのものでした。

ここでは一人の日本人に会うこともできませんでした。西洋の老婦人がおぼつかない足取りで石段を下りて行くのに出会い、肩を上げて上げました。よく見るとだいたい年齢、肩につたわる温もりに母を感じました。

大同の帰りは北京まで軍用機で、平和ならではの旅でした。沢山の楽しい思い出と友情を土産に帰って来ました。ご一緒に下さった先生方や皆さん、山崎君子さん、ほんとにありがとうございました。

旅の想い出

片岡 智恵子

旅程の第一日は、月から見えるたつたひとつの建造物といわれる万里の長城へ。山の稜線を尾のない巨大な竜のように、うねり這いまわる様はまさに中国の悠久の時の流れを語っているようです。途中幾度か休み、仲間に加われ追いつきながら、急な坂も何のその。他国の観光客といっしょに写真を撮り、流れる汗を拭いながら頂上にたどり着きました。誰もいかなかったらきつと天にむかって大声で叫んでいたでしょう。人類が造った世界最大の建造物の雄大な歴史の厚さ、やはりロマンをかきたてずにはいられない風景でした。

今度の旅行のメインは何といっても、中国三大石窟のひとつ雲崗です。北京から夜行軌道車に揺られて八時間。夜のとばりをすすむ汽車の音も心地よく大同への思いを高まらせていきます。

さすが華北の朝の大同は肌寒く上着を着こんだ通勤の自転車群が流れてゆきます。

石窟寺院で出会ったのは、崖に沿って延々と連なる五十三の洞窟に五万一千体の石像が刻まれています。なかでも十七メートルの太仏像には嘆息。凛と私たちを見つめるその瞳

のすずしさにすっかり魅了されてしまいました。天上を見上げれば、古代楽器を演奏する飛天像などがピツシリ彫られています。遙か昔に数十年もの歳月を費しコツコツと岩を刻んだことを思うと感慨もひとしおでした。ギリシャ神話やスフィンクスを想わせるエキゾチックな像もあり、東西の文化をつなぐシルクロードの東端にいる思いを強くしました。

またこの地は炭鉱都市であり、石炭を満載したSLが懐かしい汽笛を鳴らしながら、四、五十台の貨車を連ねて、目の前をゴトゴト通り過ぎて行くのに出合いました。幼い日に見た風景と重なるしばしのタイムトリップでした。

中国の旅から

春城 武庫坊

北京到着今日一日は二十五時（北京到着）

仲麻呂も見た名月を北京にて
名月に北京空港星まばら

月餅は表と半分北京の夜
秦漢三国長城歴史を秘めし（万里長城）

長城の続く向うは秋の空
北狄も越えた長城今平和
明朝の哀史を聞いて秋日落つ（景山公園）
清朝の栄華の夢よ万寿山（頤和園）
五万余の仏が語る中国史（雲崗石仏）
雲崗にヒンズウ文化花開く

× × × × ×
天寿山麓明帝陵の華競う

定陵の地下に栄華の夢のあと

北京の北西約五十料、万里の長城につらなる天寿山の麓に明朝（一三六八年—一六四四年）十三代の皇帝の陵墓が点在する。その中で発掘、公開されているのは十三代萬曆帝と皇后の墓定陵である。

当時、皇帝は即位すると、生存中に自分の墓を作る事に熱中したらしい。萬曆帝が自分の墓の建設に着手したのは丁度、秀吉が朝鮮侵略の頃で、明は朝鮮に援軍を送るのだが、墓の建設と重なり、財政的・人的に遠征軍は苦勞したとか。内部見物中、この建設に一日数万人の作業員が数年にわたり従事したことが記されており、地下宮殿の壮大さに感心しつつ、日本との不思議なえにしと後世清朝末期、西太后が日清戦争の前に軍事費を流用して北京の頤和園を建設したことなど、歴史はくり返す中国の史実を思い浮かべながら、幅広い通路を地上に向った。

× × × × ×

五塔寺にシルクロードの華を見る

真覺寺と記された山門をくぐると、四角な建物の上に印度風の塔が五つ立っている。北京では異様な十五世紀のこの寺院の壁面には仏像や象、孔雀等が浮彫りされ、印度文化の交流を表わしていることが印象に残った。

謎の女性

藤田泰子

北京から大同行きは寝台車に乗った。寝台車と言っても日本のそれとは大分おもむきが異なり、すべて木でできていて、少し不潔だが、枕も毛布も白い布で覆ってある。入口には鍵のかかるドアがちゃんと付いている。そして廊下があり、洗面所へ通じている。

私たち一行の他に一人の西洋人女性が乗って来た。若いとも年配ともみえる女性で、男性方は二十八歳とも言い、四十歳とも言う人がいて皆さん興味しんしん。そのうち男性四人の部屋に呼び入れたのか、入り込んだのか片言英語でにぎやかに話が弾んでいる。そして、その女性を着にウイスキーを一本空けたという。私たち女性は財布が荷物でも狙っているのではないかとハラハラ。そのうち心地良い揺れ方に眠気に誘われ、ぐっすり眠ってしまった。

翌朝、その女性は夜通し通路をウロウロし

近畿文字放送作品募集

題「二人」

橋高薫風選

3句

締切 12月5日

ハガキに明記の上、左記へご投句下さい

〒540 大阪市東区谷町2丁目36

大手前ウサミビル3階

近畿文字放送 川柳係

ていたそうで、ひよつとしてという下心が皆さんにあったのではないかしら、とは、私の邪推である。

男性にとつては退屈な旅の一夜がとてまたのいいものになったらしく、鼻の下が十センチ程ものびていた。

思いがけない出会いも、旅の一つのたのしみである。

早朝、大同に着いた時は、その外人女性はセールの一人旅らしく、厳しい顔つきで、大きな荷物を引つ提げ、ブラットホームを突っ切って行った。

金魚の糞の旅

友 碇 雅 子

生まれて初めての外国旅行。上海の空港で

自分が外国人という立場に初めてなったのは何とも変な感じ。北京の空港の広く、北京という字のネオン以外に輝くもの一切ないという中秋の名月は感動であつた。

峨々たる山に横たわる万里の長城の崩れ、草の茂れる垣間見た時、時の流れを覚え、その頃の人をいとしく思えた。

明の十三陵といひ、エジプトのピラミッドといひ、権力者は同じことを思うものだなーと感じた。女性には思いつかないこと。夕闇の迫った五塔寺は、私達のグループだけで、静かな落着きの中に一日を締めくくつた。

天壇公園の広さ、祈年殿のきらびやかな装いに目を見はつた。天安門はテレビで見ているので目新しいという思いはなく故宮へ。

夜は北京駅より大同へ。生まれて初めて軌道台車に乗つた。最初の二晩はおしやべりでねむれなかつたが、揺られて母の腕の中。明け切らぬ大同の朝は寒く、石炭の匂いが懐かしかった。雲崗の石窟は期待が大き過ぎて溢れるような感動はなかつた。懸空寺への道はひたすらバスで走ること二時間余。広大な畠、とうもろこし、あわ、馬鈴薯等、そして牛、馬、ロバ、山羊、鶏、黒豚、山の見える迄の広大な平野に驚きを覚えた。絶壁の中空に張り付いたような懸空寺、一人しか通れぬ回廊は恐ろしかった。見あきぬ窓外の景色を再び見つつ大同市にもどり、九龍壁、上下の華嚴寺を見てホテルへ。

翌朝、昼の汽車の旅が飛行機になつてガツカリ。北京で王府井、友誼商店で買物の後、北海公園に。蓮池に白い塔が印象的だった。頤和園に来て岩を雲根と題して画いてある中国の絵の謎が解けた。庭に置かれた太湖石の姿であつた。そして至るところに絵、絵、一つ一つゆくり見たかつた。迷子や両替で皆さんを再度いらささせてごめんなさい。おはようを一つ覚えて旅終り

キヤベツ雑感

田 中 千代子

中国に行くことになった。三食とも中国料理、大丈夫かなという思いはあつたが、まあ本場の料理を楽しんでこよう。

第一回目は北京での夕食。前菜、いためもの、魚のから揚げ等、フルコースの如く出てきて私たちを歓迎する。

翌朝、ドーナツ、むしパン、キヤベツの油いため、顔の写るようなおかゆが出た。サツと手がのび、またたく間におかゆの鉢は空になる。長城へ行くと聞いていたが、おかゆ二杯で出発する。登れるかなという思いがふと頭をよぎる。

窓外には延々と続く畑、大量のキヤベツがコロコロと顔を出す。誰もいない。中国の農

業はどれだけ機械化されているのだろうか。広大な大地は目に入る限り見事に耕されていた。夕暮れ、自転車に子供を乗せ、野菜を荷台にくくりつけた人たちの群をみた。一人つ子政策の中国、いやに大人ばかりが目立つ。大事な宝物を乗せているような。後ろの野菜のしおれて何とわびしいこと。天安門広場でも、大同でも、自転車に紐でくくりつけたしおれた菜葉をみた。あれを持って帰って料理するのだろうか。私だったら多分捨てるような……。

北京でやつとみつけた野菜店をのぞいてみた。ジャガイモが、玉ねぎが、にんじんが、みたこともない野菜の数々、朧も路上に五百個位が無造作にころがされている。超特大のキヤベツがきたない台の上に積上げられていた。長旅で疲れたのが傷だらけのキヤベツ。油で炒めた料理、火の通った料理はかりなのがうなずかれる思い。新鮮な生野菜にはついでにお目にかかれなかつたように思う。

中国料理とは油の中に野菜が座つていた。帰る日が近づく頃になると、とうとうジャスミン茶でお茶漬となつた。

名物北京ダックがとても美味しかったことを報告して、中国十八食の旅、先ずは無事に終つた。

よつこそとトマト見事なお国色

川柳人口調べ

竹内 紫 鏡

前号で、清水白柳氏の遺稿を元にして、川柳人の年齢別の人数をグラフにしてみたが、一方、府県別に集計してみると、大阪・兵庫高知の作家数が比較的良好目立ち、個人で調査する以上、ある程度の偏りがあるのはやむを得ないと思った。地方により川柳人口に疎密があるのは、本来想像されることだが、組織的な調査があれば記録をぜひ見たい。そこで前回脱稿後に見ることのできた日本川柳協会編『日本川柳人名鑑(昭六〇・十一)』から府県別・年齢別人数を集計した。

表1の(A)欄と、図表がその結果である。同名鑑に掲載された川柳家の総数は約一、三〇〇で、雅号・本名・顔写真・住所・代表作五句を載せてあり、全員ではないが、生年月日がわかる。男女の比率を数えると、全体で七三対二七であった。前回の『川柳人の歴』に

表 1 川柳作家数

① 日本川柳名鑑(昭60.11)より
② 川柳年鑑(1977年版)より推定

府 県	①			②			府 県	①			②		
	男	女	計	柳社	同人数	人口1万人 当たり人数		男	女	計	柳社	同人数	人口1万人 当たり人数
北海道	21	9	30	25	2,750	4.9	京 都	15	4	19	8	420	1.7
青 森	14	1	15	14	530	3.5	大 阪	96	53	149	32	2,050	2.4
岩 手	11	0	11	10	540	3.8	兵 庫	54	27	81	21	1,300	2.5
宮 城	12	2	14	13	290	1.4	奈 良	17	6	23	5	240	2.0
秋 田	3	3	6	5	370	2.9	和歌山	19	13	32	3	120	1.1
山 形	15	1	16	8	850	6.8	鳥 取	23	8	31	2	60	1.0
福 島	21	5	26	17	850	4.2	島 根	21	9	30	8	350	4.5
茨 城	5	0	5	1	120	0.5	岡 山	44	16	60	33	1,500	8.0
栃 木	10	2	12	11	350	2.0	広 島	16	9	25	7	420	1.5
群 馬	5	2	7	32	40	0.2	山 口	15	8	23	20	600	3.8
埼 玉	41	8	49	5	600	1.1	徳 島	14	4	18	7	250	3.0
千 葉	25	8	33	6	130	0.3	香 川	10	9	19	12	250	2.5
東 京	81	14	95	30	1,050	0.9	愛 媛	16	5	21	18	950	6.3
神奈川	36	7	43	8	1,000	0.9	高 知	12	2	14	6	580	7.0
新 潟	18	1	19	10	690	2.8	福 岡	28	10	38	15	630	1.4
富 山	11	3	14	6	130	1.2	佐 賀	2	1	3	2	160	1.8
石 川	21	8	29	23	700	6.3	長 崎	8	2	10	7	170	1.1
福 井	6	3	9	6	280	3.5	熊 本	11	3	14	2	460	2.6
山 梨	10	2	12	11	760	9.5	大 分	19	8	27	3	40	0.3
長 野	9	2	11	16	620	3.0	宮 崎	7	3	10	3	60	0.5
岐 阜	16	6	22	2	700	3.6	鹿 児 島	10	5	15	1	210	1.2
静 岡	35	9	44	11	280	0.8	沖 縄	1	0	1	0	0	—
愛 知	47	5	52	15	1,100	1.8	海 外	3	6	9	7	—	—
三 重	7	6	13	5	180	1.1							
滋 賀	12	2	14	2	170	1.6	合 計	953	345	1,298	477	25,900	2.2

載った作家とはあまり共通していない作家たち（時期も十五年以上の差がある）と思われる。筆者が「川柳塔」に入会してから十年間見なかった他誌の柳号に再会したが、この種の記憶は長く続くものだと思った。顔写真については「塔誌」の作家を含めて、一種の意外性を感じた。べつに川柳人らしい顔というものがあるわけではないが……。

この名鑑の出来るまでの経緯はよく知らない。局外者として想像するに——案内が伝わっていたか、各自のふところ具合の関係、覆面好きの性格とか、作品についての自信の有無しだいでも申込み数が変わらうと思った。統計をとる上では、総数が一千を越すぐらいが手頃なのであるが、果別にして十人、二十人といった数は偶然性が大きい。そこで一九七七年度の『川柳年鑑』（雄山閣出版）のあちこちの記事から数字を拾い、府県ごとの川柳社と各々の同人数を集計してみた。これを③欄に記入した。

③欄の川柳人の数を、その府県の人口（最近の国勢調査による）で割り、一万人あたりの川柳人を求めてみた。これは、人数の絶対値のほかに「密度」を考えたからである。人口が百万人以下の県は、鳥取、島根、山梨、福井、徳島、高知、佐賀だが、その点で山陰は注目に値しそうだ。また、交通便利と言えない地方では、柳社（句会中心に運営されると思う）の総数は多く、散らばる傾向が

あろうと想像した。

次に、棒グラフを眺めていただきたい。大正生れの人が大半を占めており、平均年齢が六四・五歳ということとは、大正十年代の中頃の生れの人全員がまん中にいることである。もっとも、この種の文芸愛好家の年齢としてはやや高齢の方に寄っている。詩人などはグンと若い人が多い。

女流川柳家の比率は、若い方ほど（平均よりも）高いようだ。全体では、昭和四十五年より一〇％近く増えているが、この名簿上の比率よりも、現在の女性作家の比率の方が高そうに思う。ただ、①欄から和歌山・大阪・兵庫・群馬は女性進出の傾向が知られる。

「日本川柳人名鑑」より年齢別集計(全国)

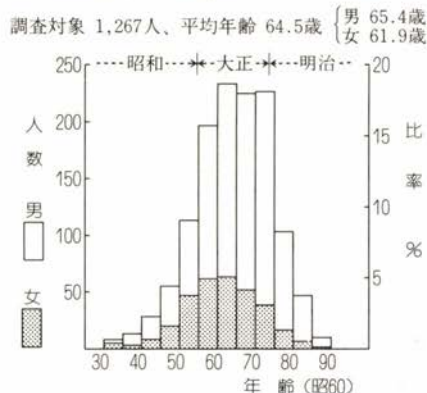


表2 俳人協会会員数 (昭60.6.5「俳人文学館」より摘録)

	会員数	人口10万人 当たり人数	男	女	女性比率
全国合計	7,486	6.4	4,494	3,012	40%
①東京都	1,442	12.4	692	750	52%
②神奈川県	635	9.2	375	260	41%
③大阪府	599	7.1	324	275	46%
④兵庫県 (以下略)	356	6.9	195	161	45%

ところで、全国の川柳同好者数はどのくらいであろうか。

表の③欄の合計が二五、八〇〇余となったが、これは①欄合計の約二〇倍である。府県によりその倍率に差はあるが、組織を通じての集計が出来たのは幸いである。ただし、同人の数といっても、定義は統一されていないので、誌友を含めたもの、含めぬもの、などでまちまちな感じがある。①欄合計が氷山の

一角で、③欄は氷山の半分ぐらいと思うがどうだろう。

なお『川柳年鑑』は一九八〇・八一年合併号で打ち切りとなっている。その記録では、同人はやや増えているようである。(集計略)

以上のデータから、川柳同好者は、元作家とか時たま作人新聞投稿者などを含めて、③欄の合計の二倍、

つまり五万人という大ざっぱな見当をつけている。

前に、俳人の年齢分布を男女別に示したが少し補足する。昭和六十年の俳人協会会員数の上位の府県を、同会機関紙から引用すると①東京都②神奈川県③大阪府④兵庫県で、東京は数も一番、密度も一番の俳句王国である。人口十万人中の会員（『指導者』）の数は二、四人である。これに対応しそうな前表の川柳人は、〇・八人にすぎない。

大阪や兵庫は、同じ分析をすると、俳人は東京の半分、川柳人は東京の倍以上となつてゐる。なぜそうなのであろうか。

文獻への彫琢

紀市郁榮

第一節

京都に三年、坂というのがある。『広辞苑』によると、その坂で転ぶと三年以内に死ぬと言われている、京都清水寺の坂、

東京霞が関の坂などと解いてある。

三寧坂が正しいという人がいく人かい。清水坂の石柱にそう書いてあるし、京都の名所案内にも載っているという。

ところが、読売新聞の「読売ファミリー」という週刊紙に、今年の春頃だったか、トップの一頁を費やしてカラー写真入りで、産寧坂という記事があった。お産が軽く済むように、お参りした清水寺の坂道と解説されていた。

『広辞苑』は権威のある辞書だから、その記述に間違いはあるまい。一流全国紙である読売新聞社には、調査部とか、調査審議室とかいうような機構があつて、根拠のない記事は掲載しないであらう。三寧坂と清水の坂に標記してあるとすれば曰くがあるはずである。結局、三年坂が本質かも知れないが、三寧坂も産寧坂も誤りではない。そういう説もあるということではないだろうかとわたしは考えた。

第二節

わたしたちが今、親しんでいる川柳は、柄井川柳という人の名前であることは広く知られているとおり。宝暦、明和年間（約二二〇年昔）前句付の点者として卓抜であつたので、柄井川柳の選による前句付を川柳点と呼ばれ、やがて坂井久良岐、井上剣花坊の出現によつて明治の中頃、「川柳」の名称が定着したという史実がある。

その川柳は幼名を勇之助、長じて正通とな

り、通称八右衛門、号は川柳、無名庵、緑亭のほか、いくつかあったらしいが定かでない。とにかく一人で七つも八つもの名前を有していたことだけは確かである。

◇

以上の二節は、これから述べようとすることからのプロローグであり、布石にすぎない。今年の五月号と六月号の「ふあうすと」にわたしたは「句沙弥と豆秋序章」という文章を連載した。まず、前編（五月号）の一部を転載しよう。

「これを裏書きするように、須崎豆秋自身の発言がある。

「千利久が

一より習い十を知り

十より帰るものとその一

と茶道を教えているが、僕もとうてい十までは行かないが、頂天の十から逆もどりにして単純で、むづかしい表現をせぬように、平言俗語の表現を狙っている。平言俗語の冴えと平凡とは実に紙一重の隣あわせで、むづかしい道だ。」

以上のとおりだが、たまたま五月号の「ふあうすと」本社句会で、兼題の選者が、披露前にこの文の誤謬を指摘された。

利久は利休の誤りであり、利休の教えてゐる、一より習い十を知り、という和歌に、「習い事は……」という上五の言葉が脱落しているというのであつた。選者は女性で茶花道の

お師匠さんであった。

専門家の彼女の言だから、習い事は……というのには素直に聞けたが、利久が誤りであることについては、わたしは拘泥した。

わたしは豆秋さんの文を、昭和二十五年の「川柳雑誌」（「川柳塔」の前身）から引用する際に、既に利久に気がついていたので、それで百科事典を調べたが、やはり利休と確認した。それを承知で引用したにはわけがある。

豆秋は「ふあうすと」の延原句沙弥と共にユーモア作家として著名であり、学識もあり社会人としても大成されているので、なにか曰くがあった「利久」とされたのかも知れないという気があったからだ。

それに前章の「三年坂」の諸説や、「柄井川柳」の名前の例もある。あるいは利久と称えた時代もあったのかも知れないと考えた。わたしはとりあえず「川柳塔」の古い同人数人に、豆秋に茶道のたしなみがあつたかどうか聞いてみた。が、特にかかわりがあつたという答えは返ってこなかった。

それがわたしの疑問を深くした。茶道に格別関心のなかった豆秋が、利休の教えを引用するについては文献を調べたに違いない。文献では利休であつたはずである。それがなぜ「利久」となっているのか。

利久下駄の出典は、元々利休の名前からとつた利休下駄であつたが、商売人が休むというのとはよくない、むしろ久しいが定義として

も似合わしいということから、利久下駄となつたという俗説があると教えてくれた博識の川柳家がいます。

利休は豊臣秀吉に仕えて、御茶頭となり、三千石の知行をもらつて天下一の宗匠と評判された。秀吉が禁裏で茶会を催し、正親町天皇に献茶したとき、はじめて利休の号を賜つたという。

三千石の本身で、茶頭であつたというから利休の号を賜わる以前から無論、宗匠を名乗り、あるいは利久であつたかも知れない。これは全くわたしの憶測であるが。

わたしはどうしても、それを検証したくて十月某日、西宮市立図書館へ出向いた。文献が揃っているか懸念があつたが、係員がコンピュータではじめてくれた図書カードによると、十数冊の研究文献があつたのには驚いた。わたしは数冊を借り出して、時間の経過も忘れて、興味深く拾ひ読みした。

利休は単に茶道のみではなく、政治にもかかわり、大きな権力をもつて、日本を動かした人物の一人としてその華麗な生涯が展開されている。その点描を抽出してみよう。

○利休が創造し、その命をかけて守つた茶の道とはなにか。茶の湯という遊びを、人間の生き方にかかわる「道」に引き上げると同時に、豊かな造型と演出を加えたのが、利休の茶道であつた。

○聚楽第の利休屋敷に茶室を建て、晩年は

とくに草庵ふうの侘び茶事の完成に心をくだいて、茶道の心と理論を確立し、日本の生活文化の基準を定めた。その功績は偉大といわねばならない。

○天正十九年、大徳寺の山門に寄進した金毛閣上に自像を安置した事で罪に問われた。自分の茶道と生きざまに自信をもっていた利休は、その帰結として、茶道を守るために一五九一年二月二十八日自刃して果てた。七十歳であつた。

切腹という尋常ならざるもので、その不幸を利休はみずから菅原道真の太宰府への左遷になぞらえて、一首を娘のお亀に残し、京都を出立して堺へ下つた。

利休めはとかく冥加のものそかし
菅丞相になるそとおもへは

菅原道真と同じことになるとは、ありがたいいことではないかと、と冗談めかして詠んだ歌に利休の自負があつた。

それらのおびただしい研究文献から、僅かに「千宗易」と「理休居士」の号を探りあてたのみで、短冊の多くの和歌の中からも「習い事は……」の一首は遂に発見することができなかつた。

わたしは文献を系統的にさらに精査し、深く彫琢を加えて「千利久」の真偽に迫りたいと念じたが、私事のにわかな事態の発生から他日に譲るほがなく、さしあたっての心残りを筆にきざむこととなつた。

初歩教室

題 屋根

阿 萬 萬 的

今月の課題「屋根」についてですが、新人の方はどうしてこんなに真っ向から取り組むのでしょうか。だから句の中味が狭くなり、詩情というものが入り込む余地がなくなってしまうのと違ひでしょうか。

では、屋根へ出る前に屋根裏の句から
 屋根裏で密会かさねる鼠ども 晃世
 (屋根裏にも団欒がある鼠の巢)
 屋根裏の鼠をおどす猫のまね 陽子
 屋根裏のネズミ人間の裏を知る 金吾
 (屋根裏の鼠が知ってた人の裏)
 屋根と言えはお寺のと来るちと古いかな 輝月
 古里のシンボル見える寺の屋根 喜代志
 大御堂の屋根ご愁志でふきかえる 保夫
 屋根瓦寄進を頼まれ名前書く
 (屋根瓦寄進へ義理で書く名前)
 寺の屋根隆盛ぶりが目に見える 悦子
 (古都税反対お寺の屋根がよく目立ち)
 月の出に古都の藁が浮び出る 白峰

千年の曲線鴟尾を乗せた屋根
 お寺の屋根の次に目立つのは 保子
 親からの大きな屋根が重すぎる
 倉の屋根壁に家紋が入れてある 吟平
 古瓦ひっそり暮らす元地主
 だがだんだんと、こんなふうには 志重
 過疎の地で朽ちる家紋の屋根瓦
 葎屋根は修理できずに朽ちを待ち 方子
 (朽ちるのを待つように過疎の屋根)
 住めば都屋根でペンペン草育ち 兼治郎
 そしてふる里は
 我が屋根を憶えて今年も来た燕 実男
 父が逝き屋根は燕が単を作る 輝月
 (父が逝きても屋根裏今年も燕が来)
 屋根の上烏ひと鳴き夜が明ける 博子
 (屋根の上嫌な予感で鳴く烏)
 貧しくも一家団欒屋根の下 久留美
 草屋根の奥で囲炉裏と国説り 豊太
 わら屋根に昔話がたとある 一郎
 (昔話たんと知ってる葎の屋根)
 茅葺きの囲炉裏で飲んだお茶の味 カネ
 大根が美味そに煮える屋根の下 久子
 お人好しが住んでる屋根と知る土鳩 保夫
 善人の屋根に仏は住みにくし 隆風
 (善人の屋根を見過ぐす福の神)
 屋根の鬼瓦町の歴史を知っている テルミ
 冒頭の「屋根の」はなくても解ります。
 城下町今なお残る瓦屋根 ぶさ子
 (城下町の名残りへ湿る瓦屋根)

草屋根に郷愁を抱く六十歳 金吾
 (草屋根が減ったとなげく石地蔵)
 もや晴れて葎葺きの屋根煙立つ 泰世
 (もや晴れて絵になる屋根に立つ煙)
 (そして北国の屋根の下にはこんな暮しも、
 出稼きの父が帰らぬ屋根の雪
 雪国へ出稼き屋根の雪おろし
 陽当りの悪い屋根の雪威張ってる
 (北側でまだ屋根の雪威張ってた)
 出稼きの夫待つ屋根の雪威張るの漏り
 でも、こんな句もありました。
 日曜大工なお雨漏りがひどくなり 陽子
 夏休み五年振り塗るトタン屋根 明吉
 旅の記憶に残る屋根は懐かしいものです。
 もう煙屋根から出ない大和棟 勝美
 秋雨が今日もしとと屋根ぬらす 千代女
 下五も「古都の屋根」としてみたら
 汽車の窓茅葺屋根に旅情出る 秀香
 (汽車の窓旅情をそえる茅の屋根)
 金沢の街にしっかりと黒い屋根 よし津
 (金沢に濡れた瓦がよく似合う)
 屋根ごしに狭い空見る北の窓 温子
 手を合わす姿で雪の里の屋根 緑良
 屋根に雪のせて都を貨車走り 周三
 (屋根に雪のせて都会へ貨車が着き)
 ころから屋根の葺き替えとゆきますか。
 屋根瓦替えて古家見替えする 房子
 屋根かえてそれから雀帰らない 八重
 屋根替えをしたのに鳩の糞たまる サワ子

じつくりと我家の屋根が見て見たい 保

高原には北欧風の街などもありまして

赤い屋根夕日に光り目じるしに 登美子

坂道にホームの赤い屋根が見え 太郎

（赤い屋根が夕陽に光る山の街）

山里の夕焼けに映える青い屋根 喜代子

山里に緑に赤い屋根を埋め すみれ

（教会の屋根から高原春になる）

明日もまたお天気らしい屋根の星 有佳

ニコライの屋根に絵筆を持たされる 博子

（ニコライの屋根が絵になり秋深む）

だが、田舎にも団地の波が押し寄せて

屋根越しの緑が逃げる河内の野 太一郎

（ニュータウンの屋根が緑を追いつめて）

カラフルなベッドタウンの屋根瓦 トキワ

不揃いな屋根が並んだ住宅地 よし津

隣は何をする人ぞじゃないが、

カラフルな屋根で触合い遠くなる 一郎

そして鯉のぼりさえも、ちと……

カラフルな屋根に戸惑う鯉のぼり 信子

縫うように屋根の谷間の鯉のぼり 方子

菖蒲の日マンションの屋根高すぎて カネ

そして、都会へ行くと

御堂筋何処へ行ったか瓦屋根 東雲

ビルの街谷間に残る瓦屋根 ツヤ子

ビルの谷老舗の味ある屋根瓦 山久

（ビル谷間ここが老舗の屋根瓦）

アパートの屋根はアンテナ展示場 やすお

写りまっか屋根のアンテナ話する 東雲

（屋根上会議のようにアンテナ立並び）
小さくとも屋根にアンテナ上げておく 喜代志

（ルンペン小屋の屋根にもアンテナ上った）

土地高騰都会の屋根は重なって 実男

（都会の屋根がおしくら饅頭してござる）

メルヘンの世界にもいろいろの屋根が

満ち足りた雀が三羽屋根の上 章久

小猫にもあなどられてる鬼瓦 義雄

メルヘンも煙も出ないビルの屋根 克子

メルヘンを追うペンションの屋根の月達子

ゴム風船風にとられて屋根に住み 志重

糞虫も屋根がほしかり秋の雨 緑良

メルヘンの屋根はチョコで葺いてあり 繁男

（小人さんのお屋根はチョコで葺いてあり）

だが、こんなのは淋しいですな。

トタン屋根ガタガタ冬がやってくる テルミ

トタン屋根冬が来そうと雨が言う 喜美子

雨音が奏でる飯場のトタン屋根 山久

屋根を打つ雨にひや酒軍手泣く 芳水

（トタン屋根打つ雨飯場は昼の泣く）

萬や朝顔の蔓が屋根まで伸びると

萬の蔓野心とこまで屋根の上 奈美子

屋根づたいに延びた朝顔明日は咲く 種子

（あした咲く朝顔屋根の上へ伸び）

では最後は、屋根E・T・Cで

田舎では屋根ぶき職人胸を張る 隆積

（屋根葺き職にまだプライドがある田舎）

道いっぱい屋根届きそうバスの窓 静子

（旧街道バスは小屋根に届きそう）

バンガロー屋根熱愛をじっと見る 兼治郎

（淫らな愛も見ていたバンガローの屋根）

新婚の温み味わう屋根の下 種子

屋根汚れ丁度よい程雨よ降れ 悦子

（屋根の汚れを適度に流してくれる雨）

風雪に耐えた自信の鬼瓦 白峰

葺屋根を知らぬ園児を見せに行き 喜美子

人の生き様じつと見下す屋根瓦 円女

水害のここまで来た屋根を撮り 露芳

峠から未練が残る屋根が見え たかし

ストレスの抜け場が屋根に開けてある

（はるお）

屋根裏で終えたアンネの青春記 奈美子

天守閣閣にくつきり鷺が飛ぶ 遊光

石州の屋根瓦焼き年暮れる 新造

下の歯は屋根に上げると母に聞き 温子

題「言い訳」 12月10日締切（2月号発表）

「平行」 ハガキに5句以内

宛先 千598 1月10日締切（3月号発表）

泉佐野市中庄一〇八一—九九

阿萬 萬的

川柳塔柳箋

一冊 二百円
送料 二百四十円

将 来

都倉求芽選

将来を無邪気に夢みる子供達 明美
将来の夢くいちがう親と子と 純子
将来に希望持てない長寿国 倫子
将来を聞えはシャトルに乗るとい 代仕男
吊皮で父越す将来考える 久子
将来性見込んで縁談もつてくる 純子
子が決めた将来だから子にまかす 可住
将来を賭けた重たいランドセル 宵明
新婚の将来飾る言葉選る 正坊
小学生多忙将来の絵が描けぬ よし津
将来を憂うと雲も怖くなる 勝美
将来はどうあろうとも陽は昇る 満津子
将来は政治家という子が居ない 不二
一冊の本に将来決められる 可住
将来の礎にする汗である 緑良
将来を囑望されたまま不発 正敏
将来の夢が並んだ産児室 ちかし
将来へ向って二人の歩が揃い 芳朗
バラ色の将来だったはずの僕 本蔭棒
将来を案じてばかり親心 諷云児
将来は大物となる背番号 高子
あすなろの苗にせつせと水をやる

将来のわたしが見える老母の皺 たず子
将来の期待大きな名を付ける 規不風
将来も蛙は蛙の子で生きる 理恵
将来の望みは温い風の音 元江
将来へ密かに自画像描いている 紀美女
将来を追いかけ追いかけて今日の靴 道子
将来の夢を見ているやせ蛙 和子
将来の夢を 只今昼寝中 あやめ
将来の大物 只今昼寝中 重人
将来を思う真面目な出勤簿 重人
将来を十指に握って呱呱の声 洛醉
将来を冷静に見る二度の縁 三五島
将来性見込み無名の絵画買う 博子
将来は知らずとにかくよく食べる 素身郎
小企業でも将来性を買いました 達子
将来の夢をベンチのペアルック 奈美子
佳
易の灯の将来意外なことをいう (失名)
将来の拾石として握手する たつみ
将来へ真直ぐ歩く彼が好き 諷云児
将来に役立つ鬼を飼っている 里風
将来の夢を小指にからませる あき
人
将来は罪つくりそな娘の器量 本蔭棒
地
保険屋は将来の事ばかり言い 兼治郎
天
将来の約束事のある積木 雀踊子
軸
政治屋のビジョンに国民不在なり

贈 る

竹内寿美子選

花束を贈る笑顔と涙顔 不二
お返しが必要な母の贈り物 輝月
贈られた日から休まぬ鳩時計 久子
なには無くとも真心へ熨斗をつけ どんたく
贈りもの家計に妥協した軽さ 義美
贈られた言葉が理解出来ぬまま 克子
贈られる物の心を読んでみる 隆積
礼状が来ぬ子に贈る里の味 ちかし
母の日に声を便りの贈り物 清芳
逝ってから勲一等が贈られる 米朝
親友に贈る言葉は飾らない 本蔭棒
折鶴を贈る指先裏切らぬ 洛醉
それとなく暗示をかけた贈り物 雄々
贈り物してから売場見て通り 実男
子に贈る言葉は背中に書いている 満津子
遺産贈る手続きすませ安堵する 綾珠
贈られた花にささった刺ひとつ 智恵子
お隣の贈り物ばかり預けられ 重人
贈ったというのに着かぬ腹立ちさ 有佳
一生を縛る指輪のプレゼント 白峰
贈るのについて一言が多くなる 砥代
添えてある手紙がきつい贈り物 保夫

冥土まで届くだろうか叙位叙勲 やすお
ライバルにまず贈るのは水だろう 緑良
贈られた苗木を南の隅に植えろ 亭

臥す母に贈る言葉がとどかない 裕
真心を贈る小さな箱を組む 元江
贈られた花の重みを忘れまい 道子

ライバルに贈る拍手は惜しくない 高明
贈られてうるさい絆逃げ切れず 紀雄
嫁ぐ日に贈るひとことだけの父 代仕男

几帳面にいが付きの栗贈り来る だし
幼な子の描く母の日の母の顔 河瀬芳子
義理で来る贈り物にも持つ期待 花代

注文をつけた祝の品がつきあき
田舎から贈る新米里の味 秀峰
命名に幸運贈る親ごころ 規不風

はしけ飛ぶ想いは君にだけ贈る 正敏
淋しがりに屋に青い鳥など贈りましょ 藤原秀子
文化の日母の眼鏡を買いに行く 四郎

愛してはならない人へ贈り物 美穂子
キッス贈る相手がやつと現われる 螢
毒舌を贈る本当は好きだから 高子

爆弾かも知れぬ重たい贈り物 三五島
娘に贈る言葉がなくて空を見る 里風
軸

薔薇贈るわたしの情熱を贈る

鍵

田中 叶選

鍵っ子のブランコ常夜灯に揺れ 義美
鍵っ子のお八つに添えた母のメモ 多賀子
鍵っ子にせぬ母さんの手内職 三枝子

三日目で鍵を預ける仲となり どんたく
合鍵を返しお嫁に行く 私 たず子
使う気の無い鍵男に持たされる 規不風

裏口の鍵は祇紗に包まれる 白峰
親善の鍵を渡して姉妹都市 大柏
文豪の鍵の穴から見た世界 芳子

鍵束の謎が見事に解けた雨 まつ女
どの鍵も結局合わぬ貯金箱 明水
鍵束に内緒の鍵が一つある 公一

鍵一つこんな楽しい事を秘め 洛醉
子をひとり産んで男にもらう鍵 可住
合鍵を渡せぬままに一人居る 久子

合鍵を渡してからの女坂 三五島
合鍵に心が通う共稼ぎ 炎六
共稼ぎ三つの鍵が夜に逢う 玉恵

犬小屋に鍵を預けて共稼ぎ 秀峰
強情を通して生きる鍵の貌 實
姑に重たい鍵を譲られる あやめ

自画像に鍵を隠したサスペンス 風云児

メモ一つ捜査の鍵となる不覚 美子
少年が母の事件の鍵握る 克子
但書き此処に謎解く鍵がある 高子
鍵穴を抜けて自由な風に舞い 花代
フライドに鍵かけて出る大広間 豊

愛の詩歌った頃の鍵が錆び ちかし
鍵ひとつ増えて気儘な旅に出る 智恵子
小旅行キーホルダーを三個買ひ 虹汀

引き継いだ鍵が秘めてた負債額 軒太楼
神様に預けた鍵が錆びている 文平
鍵穴の視野でマッシュンおつきあい 寿恵子

鍵穴に香水少し匂わせる 螢
鍵かけていても電話で呼び出され 素身郎
アパートの鍵を敗者が置いて出る 博友

愛終わり鍵の入った手紙着く 新造
封筒に入れると鍵が秘密めく 正敏
鍵つきの日記思い出秘めたまま 正坊

ときどきは知らん顔する妻の鍵 雀踊子
自転車鍵の鍵を失くした田舎道 サツ子
ノックせぬ兄が居るので鍵が要る 宵明

しあわせな街で鍵屋が欠伸する 島
鍵かけておくれよ風は浮気者 枯梢
きつと来る幸せを待つ鍵の穴 佳雲

軸

見つからぬ鍵は死体の腹にある

柳界展覧

集録・板尾岳人

年記念誌上川柳大会
課題と選者

紳士

今

めし

枕

断つ

兄

雑詠

表札

買う

山脈

投句締切日

昭和62年1月15日必着

投句用紙・ハガキ大の用紙

各題2句(別紙に句・雅号

住所記入)

投句料千円(小為替)

発表表

番傘九州人間座17号

投句先下

836福岡県大牟田市

天領町一

一八六―二外

山あきら方

番傘九州人間

座

★「竹の里」第2集

川柳界の情熱の人、山内静

水(川柳塔社参事)の率い

るだけはら川柳会が、創立

30年を迎えて上梓された合

から卒寿まで幅広い年齢層
で、作者の氏名を自筆サイ
ンで写植してあるのも個性
的である。
夢一つ一つ生き恥さらさん
か 山内 静水
序文・西尾 葉・石原伯峯
上製本59頁 頒価二千円
発行所下725広島県竹原市竹
原町田中 山内静水
★編集工房・円から句集
「母子草」が出版された。
著者浜田ゆきゑ・山崎佳子
A5判150頁、序文時実新子
384句を収録。頒価二千円
★時実新子著「川柳秀句館
神戸新聞川柳壇の10年」を
上梓、神戸新聞読者文芸の
過去10年の特選句42句と選
評を収録。頒価一五〇〇円
「母子草」と共。
申込先下61神戸市中央区熊
内町7・4・15メゾン橋本
301編集工房・円迄

★川柳句評集「北の相貌」

細川不凍著、北海道川柳作

家50名の各自各様の作風を

真向から批評、著者の川柳

に対する熱情があふれ、読

喪中につき年賀欠礼いたします。

文衛の生前に寄せられましたご厚誼

にあたためてお礼申し上げます。

岡山県英田郡大原町宮本二四九

白岩美智子

喪中に付、年末・年始のご挨拶
欠礼いたします。

角野かず子

む者をして納得させられる
頒価千円、発行所札幌市西
区曙3―3―6D105
北海道川柳研究会
★川柳展覧50号大会は第5
回火の木賞発表を兼ねて61
年8月2日にセントラルフ
クオカ福岡市で開かれる。

近年とみに字を書くことがつらくなってま
いりましたので、年賀のご挨拶を欠礼させて
いただきます。
皆々様いとお年をお迎え下さい。

岩田美代

★第37回新年交歓36題川柳
大会

日・62年1月11日AM10時

所・広島市中区西白島町・

広島中央公民館4F

宿題Ⅱ兎・紙・眉・汁・裏

糸・皿・絵・親・劇・飾

る・開く・呼ぶ・塗る・乗

る・浅い・吹く・刻む・盛

る・続く・空・根・根・帽

子・名刺・二階・無言・大

胆・徹夜・責任・豪華・ト

ップ・ベンチ・ムード・ゆ

とり・手の内・それから・

以上36題各2句吐

投句料千円同封12月31日必

着 下733広島市西区三滝町

23―6 中村義雄宛

主催 広島川柳会

★番傘九州人間座創立七周

★兵庫県芸術文化祭県民川柳大会（11月9日）

篠山町教委賞 林 はつ絵
山びこが聴きたく少年島を
出る

★尼崎市文芸祭川柳部門

一席 春城年代
朝のコーヒー大き目の地図
ひろげよう

二席 西村かすみ
ライバルへ傷の深さは伏せ
ておく

▽お便り及び消息△

■10月14日から19日迄県立
鳥取図書館にて鳥取県川柳

展が開催され同人多数が作
品を展示、故河村日満氏の
川柳資料約二千点も展示さ
れた。

■川柳塔まつえが9月100号
記念号を特集「不滅の遺徳」
—その足跡をたずねて—と
題して、その巻頭に津川紫
吻氏が執筆されている。

■こまつ川柳社（小松）の
「川柳わかまつ」が100号を
迎え、その巻頭に吉田秀哉
主幹が「100号を迎えた本誌
を真に意義あらしめる光彩
は、若木の未来を信じた34

人の尊いみ霊にある」と述
べている。

新 同 人 紹 介

永 倉 僕 川

—紫香・鬼遊・薫風推薦

竹 治 ちかし

—きみえ・芳子・鬼遊・薫風・緑之助推薦

■海地大破氏（高知）が第
4回川柳乙賞準賞を受けら
れた。

ゆるい靴はいていくさが嫌
になる

たましいと旅を続ける油蟬
ほか28句。

■久家代仕男氏が島根新聞
の人物風土記に川柳「高ら
か人間賛歌」に紹介され、
「川柳を文字の組み立てに
終わらせてはならない」と
力説されている。

■柳宴11月号に梅蘭芳の髭
と題して東野大八氏が執筆
され、その文中首都北京の
一大繁華街で、私が忘却し
去った梅蘭芳を見出し、「貴
妃醉酒」の写真に不覚にも
懐旧の涙を催したと述べて
おられる。

■故河村日満氏の奥様（貞
子）が日満氏の収集された
川柳資料約二千点を鳥取図
書館に寄贈され県より感謝
状が贈呈された。

第38回大阪文化祭川柳大会

11月15日、大阪府・市、同府・市教委主催の61
年度大阪文化祭第38回川柳大会が大阪市中央公会
堂で開かれ、一四四名が参加した。各席・宿題の
秀句は次のとおりで、川柳塔から河内天笑、河内
月子、岩本雀踊子の三名が入賞した。

席題 「顔」 塩満 敏選

真ん中に鼻があるから顔だろう 山本 翠公

同 「底」 田頭 良子選

どん底に生きたたかな華となる 河内 天笑

宿題 「近い」 鍋島 十歩選

屈葬や蹄の音が近くなる 定金 冬二

同 「巧」 久保田寿界選

巧者が紡ぐカルメンになるマリアになる

同 「望」 島崎 信子

薬一本握りしめている望み 西田柳宏子選

同 「音」 岩本雀踊子

曼荼羅絵図のまん中へんで音がする 清水 斗升選

同 「時事雑詠」 定金 冬二

同等になってもお茶は入れてくれ 広瀬 反省選

同 「懐」 河内 月子

懐はいつもさびしい本の虫 榎本 聰夢選

中田たつお

橘高薫風句集

「愛染」刊行記念本社十一月句会

11月7日(金) 午後6時・メンスファッションセンター

久しぶりの句集刊行記念の句会とあって出

席者は、初参加八名、他柳社からの参加も含めて百一名という盛会、これを見越して会場を七階のホールに移したが、椅子が足りないほどの盛況のうちに開会、祝電披露の後、某主幹から薫風氏に常任理事会からの記念品を贈呈、続いてサークル樺櫨、翠洋会、川柳泉尾、常任理事会、堀江正朗・芳子夫妻からの花束がそれぞれ女性陣から贈られる。

おはなしは、紫香氏と田中好啓氏で、紫香氏は工藤甲吉氏の心のこもる素朴なものでなしで回遊したみちのくの旅の回顧談、好啓氏は薫風氏の代表句を挙げながら、その人柄を紹介、寺尾俊平氏はじめ各選者からも交友の思い出が語られ、祝賀一色に塗りつぶされた。月間賞は清水健司氏、呼名賞は眉水、満津子、好啓の三氏。

(進行・天笑) (受付―はつ絵・いわゑ)

(記録―射月芳・健司・山久)

出席者―岳人・はつ絵・武庫坊・年代・紫香・笛生・諷云児・白溪子・杜的・みつ子・照子・雀踊子・健司・康恵・鬼遊・池田寿美子・紀雄・作二郎・佳秋・恵美子・泰・好啓

眉水・正坊・一郎・俊平・英千子・三男・満津子・道子・勝美・太茂津・君子・春子・白峰・文子・狸村・柳影・きみ・登志実・天笑・月子・寿馬・水客・清・女・白兎・悦郎・喜風・藤子・重人・冬葉・隆一・敏・柳宏子・愛論・射月芳・春蘭・楓葉・章久・柳伸・洋敏・ただし・博泉・亜成・季柳子・文秋・東雲・勝晴・三十四・泰子・智恵子・今日子・安藤寿美子・智子・一夫・八斗鮒・美代子・白洋・萬的・英子・頂留子・庸佑・形水・薫風・山久・和子・一策・花村・純一・光代・吸江・杏花・古都路・度・あいき・栞・寿美規不風・寿子・いわゑ

席題「愛」 寺尾俊平選

限りなく愛を溜めてる長い橋

双眼鏡孤独な沖を愛してる

引き出しにぎつしり褪せた愛がある

愛錆びる花に終りがあることく

港の愛は悔し涙を積み残す

愛のテーマバックに離婚考える

愛されているので雨の日には読書

少年の愛寺町を抜けてくる

けったいな愛で毎日喧嘩して

おそろきが鳴く頃愛はやせ細る

空気の快感山を又愛す

夫の肩を揉んでいるのは枯れた愛

レモンスカッシュの匂いで愛を確かめる

エスカレーターのふり向くところ愛がある

無器用な愛だと思うつるし柿

騙し合いながら育てる夫婦の愛

その森を愛しきれない月が出る

愛と言う証に柿の皮をむく

愛されにゆく近道が胸にある

これも愛となりの落葉掃いている

ぶつかり合つて気付いた愛でした

月はつとめて愛する人を避けたがる

いまわの際に愛のことが言えなかつた

晩秋に愛ひと文字の帯をとく

愛が崩れて枯葉が動くのを見てた

子に恥をかかせぬ程度はつくしてる

いわゑ 白洋 和子 正坊 白兎 英人 岳人 作二郎 智子 射月芳 女 智子 勝晴 恵美子 健司 天笑 紫香 雀踊子 寿子 年代 天笑 白兎 年代 萬葉 萬葉 博泉 藤子

ポケットを出て行く愛のこまきれば
 老妻がローヤルゼリー買ってくる
 愛してるなどと言われた事がない
 愛染の仏と愛は雪になる
 遅くないこれから愛す老妻ひとり
 愛憎を越えたと言わぬ夫婦著
 愛だけが有ればとお腹空いて来た
 落ちてる愛を数えあきてる花時計
 ネクタイの色が変わって終わる愛
 こおろぎの愛を愚かと言えようか
 かまきりのこんなに愛されていた夫

作二郎
 みつ子
 白漢子
 恵美子
 佳秋
 水客
 満津子
 度
 健司
 はつ絵
 英壬子



肉買つて来いと愛妻から電話
 こまやかな愛を芒の穂に探す
 鍋料理ときどき愛を確かめる
 愛不在おでんに味がしみてこす
 味噌汁を熱くするのも愛だろう
 一番に花を愛している花屋
 腎臓をあなたに一つあげましょう
 相思相愛おもいすこしでないように
 妻や若いぬ愛より強いものを知る

席題「染」

西出楓楽選

鬼遊
 好啓
 泰子
 楓楽
 恵美子
 紫香
 満津子
 鬼遊
 俊平

藍染に昨日の悔いを深く染め
 余生まだ染めたい彩を探す日々
 母の色にやはり染まっていた私
 どの色に染めても自分を抜け出せず
 それぞれの彩に染まって子が巣立ち
 振り過ぎた白旗染める彩がない
 晩秋に染まり記憶が疼きだす
 平均的人間でよく染まります
 髪赤く染めてマンガのヒロインに
 貴男に染まるスペースをあけておく
 織田作を読めば織田作に染まるボク
 するするに愛の深さに染まりたや
 染め替える効かない妻と日が昏れる
 少しだけ噂に色を染めたがり
 日の丸の血染に託びることがある
 紅葉に染まる音色も木挽唄
 ビルの窓染めると夕陽眠りだす
 爪染めて都会の風はままならぬ

みつ子
 三男
 安藤寿美子
 光代
 月子
 白峰
 重人
 白洋
 眉水
 天笑
 白洋
 雀踊子
 鬼遊
 重人
 柳伸
 健司
 柳伸

葉の色に染まって糞虫自己主張
 まだ燃える女でいたい白髪染
 都会には染まり切れない国なまり
 冷え込んで紅葉のしずくまで赤し
 どの彩に染めても白に負けている
 髪染めて女訣れを決意する
 釣鐘の音が次々秋を染め
 梅染まる紫蘇は脇腹心得る
 戒律の寺を紅葉が染め変える
 草木染尼僧はひとと秋に住む
 藍染めの袈裟を比丘尼に送らんか
 姑に染まってケチになりました
 髪染めて淡い期待を抱き寄せる
 染めかえてだんだん亡母が遠くなる
 あぶな絵の赤に染まってみたくなる
 惚れている方が染まってゆくのです
 天高し十一月が染めあが
 血の色に染め落日の呻き声
 みかん好きかんの色に手を染める
 どなたにも染まらぬ色を着ています
 もつどんな色にも染まぬ黒を着る
 コスモス色に染まってしまった父無し子
 秋が逝くわたしを染めたい人もなく

兼題「勇気」

橋高薫風選

優しさ深からん勇気は高からん
 正義感匹夫の勇と言われても
 ねんねこで寝ている勇気にある未来
 丸刈で歩く勇気が少ししいり

ただし
 楓云児
 笛生
 英壬子
 英子
 佳秋
 武庫坊
 美代子
 道子
 萬的
 好啓
 道子
 柳伸
 光代
 柳伸
 寿美
 天笑
 年代
 射月芳
 智子
 和子
 満津子
 藤子
 楓楽
 天笑
 射月芳
 岳人
 紫香

勇氣ある忠告親友だと思つ

玉となつて碎ける勇氣もついらぬ

別れると言つは勇氣のいる言葉

神さまにまかす勇氣がまだ持てず

勇氣ある貨車が脱輪考へる

大金が入つて急に勇氣を失つた

たいせつな一本の歯を抜く勇氣

喪服持つてゆく勇氣は口にせず

少年の勇氣が拳から出ない

勇氣下さい私がわたしで有るための

虎の子でN T Tを買つ勇氣

白は白黒は黒だと言ふ勇氣

失敗へ萎える勇氣と湧く勇氣

尻込みの勇氣に聞かす錢の音

股引きのたるみ直して出る勇氣

貧しさの勇氣を妻と子に貰う

奥さんに背中押されてる勇氣

勇氣ある男に髭はついてない

首括る程の勇氣を持ち乍ら

ちよつとした勇氣で柵を飛び越える

飲ませたら勇氣がすぐに出る男

吊皮に勇氣を持たぬ顔ばかり

勇氣ある男が並ぶ晒し首

屋根に上ればヘッピリ腰になる勇氣

三日月に祈りふり立たせている勇氣

散りざわの勇氣知つてる沙羅の花

ひとりだけ判をつかないのも勇氣

散髪が終つてすこしわく勇氣

初恋の思は勇氣なかりけり

君子

眉水

登志美

みつ子

美代子

太茂津

メ女

水客

緑良

芳子

泰子

一郎

楓楽

白兎

白洋

雀踊子

和子

武庫坊

耕花

勝晴

白溪子

惠美子

緑良

健司

射月芳

照子

みつ子

康惠

一夫

弁慶の菊は勇氣を持つてゐる

ナポレオン飲んで勇氣をたくわえる

その人の真正面に立つ勇氣

群衆の中で勇氣を考へる

おばあさんに付けてもらつてきた勇氣

もう一度男に惚れてみる勇氣

残された勇氣で梯子から降りる

悪友へ弔辭を書いている勇氣

兼題「水面」

板尾岳人選

水面を出たり入つたりして生きる

浮き草の涙が抜けてゆく波紋

水面の下は知らない水すまし

水面はさむい答を出している

うたかたの愛水面を浮上せず

水面にはすかしそふな昼の月

弱虫が水面へ亡母を呼びにくる

帽子一つ水面に浮くサスペンス

政治家がゴチャゴチャもめる水面下

水面をピアノ弾き奴が狂わせる

水面が手招きをする思案橋

水面の平和が石を投げさせる

けしからんことを企む水面下

水面で迷いつづけるみすまし

たそがれる湖面詩人の懷手

水面のわたしにダブる鬼の貌

水面を走る男に手を借さう

白鳥がいるから水面信じよう

蛇が泳いで悪い予感かしてならぬ

惠美子

柳伸

康惠

俊平

智子

千代

薰風

天笑

満津子

柳影

智子

月子

いわゑ

佳秋

杏花

勝晴

はつ絵

柳伸

道子

楓楽

智子

萬的

寿美

惠美子

柳影

年代

水に落ちてなおモナリザは笑ひ続け

水面から鶴しなやかに脚をぬく

水面へ亀はおどけた顔を出し

水面の油がピカソの絵に見える

あめんぼうと同じぐらゐに生きている

水面で首したたかに微笑する

水面の波紋にみごと裏切られ

水面に出ると戦は済んでいた

名月を砕いてみたい池の面

水面に出ると敵の矢飛んでくる

名水の水面に値札が貼つてない

水面を割る少年の沓えた顔

水面が静かで油断してしまふ

水面が光り電話が鳴っている

水面へ下りてきたのは縄はしこ

水面にうつった影は鬼である

人はいないぞ水面に顔を出す

水面に出ると一氣に翔ぶ女

水面の藻との生死を奇とすべし

水面の上にも下にも敵がいる

水面下はかほか弁当食べている

兼題「握る」

西田柳宏子選

新米の握り飯です秋祭り

縄尻を握つて妻が油断する

天下握る手相と易者酔っている

顔持たぬで誰とも手を握る

お握りの角に出てゐるヒステリー

にぎり飯母のまるさで握られる

杏花

春子

笛生

杜的

惠美子

はつ絵

寿子

重人

メ女

楓楽

章久

白兎

楓楽

健司

康惠

安藤寿美子

和子

天笑

好啓

隆二

岳人

今日子

寿美

花村

楓楽

耕花

笛生

ドアノブ握ってからもまだ迷い
 檜山でにぎり拳を開けてみる
 手を握るただそれだけで心足る
 ババ抜きババを握った焦りだな
 止り木で握った拳ふり解く
 引き際は綺麗に敵と手を握る
 弱点を握り矢面には立たぬ
 麻酔から醒めれば妻が手を握り
 鍵握る男がトイレから出て来ない
 ボケットで握りしめてる核一つ
 切れそうな縄を握っていくれる
 真つぐに育つて欲しい握り飯
 妻に手を握られながら死ぬつもり
 鍵の束握って放さぬ座りだこ
 鬼と手を握って渡る冬の橋
 いわし雲一緒に食べよう握り飯
 権力を三日握ると離さない
 指みんな握ると武器になる拳
 妻の手を握る冷たいなとおもつ
 腐った菓を握っていた不覚
 雄兵の正義が握りつぶされる
 亡父の手を握ってあげたことがない
 にぎりこぶし開けば何のことはない
 深い眠りはしくて君の手を握る
 握りつぶして事なかれ主義通す
 鉄棒を握る少年ひとりの冬
 還らない船待ち浜の砂握る
 騙し方考えながら手を握り
 子に渡すバトンしつかり握ってる

英子 耕花 紫香 美代子 佳秋 諷云児 好啓 季柳子 岳人 柳影 千代 惠美子 八斗 白峰 楓楽 いわゑ 射月芳 女 泰 白兎 雀踊子 年代 はつ絵 寿子 水客 作二郎 武庫坊 天笑 美代子

鉛筆を握る闘志は持つている
 お伽噺を握って秋の児は睡る
 握り箸自己主張は曲けていず
 金婚に始めて妻の手を握り
 握りめしいちども義母を疑わす
 握り拳に自分の弱さ笑われる
 兼題「ふところ」 西尾 栗選
 ゴムの切れたパンツをにぎるふところ手
 ふところ刀と言われた人の死に出会う
 いい酒と山ふところに住んでます
 ふところを誇大妄想せぬように
 おもむろに懷紙を出す女将
 窮鳥がふところにいる軽い咳
 ふところに油断の出来ぬ金がある
 お百度をばんやり見てる懷手
 ふところを押え豪傑笑いする
 ふところにめどの立たない請求書
 懷手で絵になる人とならぬ人
 ふところに手をいれているだけのこと
 ライバルのふところ深い日の焦り
 ふところに生涯消えぬ傷を持つ
 ふところに聖書一冊秋の道
 ふところの深さにまけた雪女
 ふところに五度目の辞表持つっている
 仏像半眼ふところの深さ知る
 ふところの深さ男の髭濃ゆし
 神さまのふところにある面の数
 ふところの鬼が時どきそのかす

いわゑ 作二郎 水客 満津子 月子 柳宏子 鬼遊 水客 天笑 頂留子 純一 柳伸 眉水 寿馬 和子 杜的 一郎 重人 和子 勝美 藤子 俊平 一夫 岳人 千代 いわゑ

蹴躐き懷中時計動き出す
 懷手詩人は秋の空が好き
 他人様のふところ読んだ奉賀帳
 切札は握つたままの懷手
 ふところの論吉が肩で風を切る
 人使い荒い男のふところ手
 ふところへ入れて育てた男親
 ふるさとの山はふところ母に似て
 茴香の花ふところは大きいぞ
 ふところにあるは妻への謝罪文
 芒ゆくふところ深き詩の想い
 ふところ手明治は遠くなりけり
 ふところ手バランスシートが合ってる
 ふところ鬼も仏も棲まわせる
 ふところの中で貧しい指を折る
 ふところの奥からいやみ言うてはる
 ふところのふかあい父の樹に登る
 気の弱いふところ刀にそむかれる
 まだ少し残る客氣をふところに
 ふところにひとつ残つたにぎりめし

(清記・楓楽)

冬葉 萬的 柳宏子 柳宏子 白峰 新造 どんたく 文子 惠美子 俊平 好啓 智子 白兎 楓楽 耕花 月子 天笑 頂留子 俊平 健司

堀江 芳子
 吉岡きみえ

金一封拝受いたしました

川柳塔杜

大森孝華さんを悼む

堀江正朗



孝華さんが心筋梗塞で急逝と聞いたのは、十月七日早朝のことである。一瞬耳を疑った。全身の震いが止まらず啞然とした。最近に至って元気で県大会に出席されたり、秋彼岸の水子地藏供養をお世話されたり、五日は町内会の行事のリーダーとして予定があると聞いていたが、同日、救急車で入院されたという。

孝華さんは柳友であり、小学校一年生から教室を共にしたので、親身の不幸を聞くような計報だった。家業の印刷業に励み、昭和三十八年九月、ご主人に先立たれた後も、生来の「やる気」いっぱい二男二女を立派に育てあげ、木次印刷を盛りたて十一人の良いお孫さんに恵まれ、幸せな「おばあちゃん」だった。四十六年、本社同人として孝華さん調の句を発表されていた。

商魂の道一筋に賭けて老い
生き抜いて共に歩んだ愛しい手
むらくも”では年役として活躍、毎年の
観桜句会には各地からのお客様を笑顔で迎える役を引受け、「いずも」「仁多」へも参加され、川柳塔まつえへも投句されていた。

句集「つれづれ」を還暦記念に発刊されたのは四十八年四月。水客先生の序文の一部に「孝華さんの句は大別して三つの傾向になると考えられる。一つは人生を生き抜いて来られた性格の強さを示す句である」と書かれ、らく隠居する柄でなし髪染める
一筋に生きて余白にあるゆとり

また、母、祖母として愛情に満ちた句に、
初節句鯉の泳ぐを入れて撮り
落峰へ孫の素足を触れずおく
感受性の強い詩情あふれた句として
我が影を踏めぬ月夜へ悟りかけ
紅一葉おちて谷間へ詩を呼ぶ
これが本来の姿であるかも知れないと評されている。

孝華さんの生家は同人梅みどりさん宅で、みどりさんには義姉に当たる。二人は本当の姉妹の如く句会も旅行も共に楽しまれ、みどりさんは十一年前にご主人を亡くされてからもよく尽くされた。雅号の「みどり」は梅の木縁起になぞらえたもので、孝華さんが名付親である。毎月の句会に「山より大きな猪は出ん」が口癖で、新年会や忘年会には歌つ

たり炭坑節を踊ったり朗らかそのもので、花作り、詩吟、お寺詣りと気ままに、桜土手の荒神まいりも日課として楽しんでおられた。

朝まいり道の小草も語りかけ
と信仰に深く、知恩院の信行奉仕に参加された折の句には、

修業僧拝みたいよな低い腰
信行にとけて念珠の輪をひろげ
がある。

葬儀は晴れ渡った秋空に続々と別れを惜しむ人たち、そして柳友に微笑を浮かべられていたという遺影。大往生そのものに感じられたが、余りにも早過ぎた同級生の柳友の計は心に大きな穴を開けてしまった。同窓会の世話もよくしてもらったのに。

初七日を終えられた数日後、みどりさんは「今まで顔を見に行くと、私の足音を聞いて喜まさんか」と嬉しそうに声をかけられたのに」と、ほろりと話された。末娘の聡子さんは、東京から川柳を書きこめばいいように宛名を書いたハガキを送られ、孝華さんは作句して母娘の便りを欠かされなかったと聞く。

病んでみてはじめて知った火の温み
崩れゆく積木の音は振り向かぬ
荒涼の砂漠へ今日も石を積みむ

逝去数日前のノートのことである。心から追悼の意を捧げ、ご冥福を祈ります。

法名 稱譽文宝華孝大姉 合掌
見た日笑顔読経のなかに追う 正朗

老地神壇

締切毎月25日。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。

担当・清水健司

西宮北口川柳会

奥田みつ子報

髭そって来た相談に汗をかき
僕だけが聞いたロダンの独り言
敬老日だけは百まで肩叩く
子育ても終った母の独り言
コミュニケーション妻の肩こり叩きつつ
熟年の仕事の鬼で愛煙家
秋刀魚焼く煙が抜ける換気扇
砂丘見て広い砂場と孫の声
産地での土産を市場の値が喰い
聞き捨てにならぬ女房の独り言
歯車の都合で飯を炊いている
紫煙の中に別れ話を溜めている
うつ一つもぐら叩きで暗らしてる
掃除機に吸われて消えた独り言
都合よく居た客にくるとばかり
都合よく嘘を償う嘘が言え
自分でもおかしくなった独り言
ライバルの都合で雑兵従いてくる
美しい嘘を静かに聞く紫煙
真実を都合で曲げる偽善者よ

武庫坊 伊三郎 笑女 紫春 千世子 春蘭 保蔵 求芽 一郎 是つ絵 札子 紀雄 きよ子 園歩 半歩 幽香 米朝 諷云児 いわゑ

ビエロにも消えたいときがある都合
売れ残る植木半値に買い叩く
あれからの噂は知らず独り言
叩かれて叩かれて一筋の道
信念を通せば傍から煙たがれ
掃除機を使わぬ姑がいてくれる
仏より自分の都合に手を合わせ
哀愁を隠し切れずにいる煙
はったりと相手に思わせと余裕
マリンバを叩く少年秋の天
三日も開かぬコインロッカーの独り言
独り言そつとふとんを掛けてやる
空はコバルトととても別れる気にならぬ
幸せなお人でマツタケ買ったはる
からっぽのボトルの底へ独り言
都合により閉店悲しい噂聞く
独り言お国なまりも許される
独り言の好きな羅漢が中にいる
都合よく行つて神様ないがしろ
にんにくに馴れて夫婦の仲の良さ
浦島を帰し乙姫ひとり言
試着室鏡見ながらひとり言
モーツァルト聴くと決めたひとを恋う
豊年満作運動会も日本晴れ
病床でやつとつかぬ青い鳥
住民の都合は聞かぬ産線
風見鶏に誤算があつた風の向き
指先に思いをこめて鶴を折る
喧嘩して来たとは言わぬ女下駄
客のいぬ易者が独り言洩らす
ひとりごとといつてはならぬことをいい

年代 好江 光代 春子 かすみ 陽露子 嘉矩 白漢子 正坊 和友 正一 けいお 眉水 よし津 君子 良征 千秀 一進 芳仙 三枚子 百万両 善太郎 ノブ 市雄 枯梢 春江 曲ん手 まさお 文夫

独り言秘書が慌ててお茶を汲み
ストレスが溜っておりそな独り言
歌麿を視てる夜中の独り言
愚痴言えは祈りもただの独り言
立葵序列守って咲き上がる
ひげを剃りながら何やらひとりごと
定年になったか丸い顔に会う
二の腕の白さに風のひとり言
逢いたくても都合をつける嘘一つ
老いたくても恋にも煙やほり立つ
ひとり言九官鳥もさびしいか
手を叩く方が甘いと限らない
不都合を託る墓標の背が高い
鞭持つ手都合でベンに変えました
都合よく運ぶ童話の虹の色
おのずから五七五の独り言
いっぺんに悪い葉が効いてくる
Y・F・C川柳会 人見 翠記報
ときめきが消えると女太り出す
子の立場思つて私は貝になる
天高し茶柱立たぬウーロン茶
駅下りて靴音高し冬の月
仕事にはあふれ西成昼の月
さり気なく月賦ローンと変身す
名月やテレビは佳境のサスペンス
病床のカレーン越しに秋の月
堺川柳会 河内 月子報
全身で弁解してる電話口
子を責める言葉かなしく見付からず
過失だと言つても法に責められる
ご利益が全身にある欠け仏

新造 山久 静江 博子 俊子 歌子 伊子 凡九郎 散歩 惠美子 天樹 萬風 紫香 房記 翠記 よし津 紅葉 豊平次 節子 泰州 久仁子 草春 市雄 雅風 曲ん手

言い訳はせずに先手でど肝抜く
別れると言われぬ前に書く手紙
幸せだなあ全身で泣けるから
全身で愛されていたのは昔
全身で祈れば神に通じよう
先手打つ男うつすら汗をかき
不孝した分だけ母の背が曲り
強がりがちよと淋しい背なを見せ
すんなりと先手渡した日の誤算
仲直りしたいチャンス待つ背中
顔見れば責める気持ちは消えてゆき
文楽の木偶全身でヨヨと泣く
正直なあなたに先手打たせとく
先手打つ株北浜で酔うている
全身に漢方薬が効いて来ず
釣取らぬ背中へ女将すみません
新社員背中にフアイトためている
口説き落した女の背に灸のあと
南向き一歩おくれた手付金
背中では嘘をつけないのが男
ちちはの背中に冬の海がある
全身で尺取り虫が逃げのびる
自分自身を責めてすこうし楽になる
ハイヒール背中也ピンと伸びてます
大切な夫の背中に孫が乗り
有頂天の背中他人を寄せ付けぬ
わたくしの歩いた跡を消さないで
均等法花嫁人形歩き出す
山の辺の秋を夫婦のスニーカー
他人責める時自分は居てまへん
強がりの背中がこころもち瘦せる

新造 博子 隆積 柳伸 妻一 房一 公一 てるよ 山久 芳水 素灯 青平 甘平 金三郎 千乃子 東雲 紀美女 節子 八重野 外吉 幸二郎 幸子 小雪 小里 かりん 半銭 慧梢 五月子 凡九郎 天笑

東大阪川柳同好会 齊藤三十四報

風の街噂はなしは避けている
風の夜女は影に怖えきり
一陣の風がもめごと持ってくる
新しい風に会いたく旅に出る
今日もまたカレーがにおう換気扇
秋風に少しセンチな恋をする
ノッポビル予期せぬ風が吹きぬける
熱いうどんがおいしくなつて風は秋
海から風木の墓をなぐさめる
背のびしてポストに馴染む末の孫
投函した時から賞品待つクイズ
北国のポスト吹雪に顔を出し
燃える火のポストへそと愛を入れ
間違つた所と知らず飲むポスト
時事川柳ポストへ溜飲下げに行く
墓地買えとカタログ老いを攻めてくる
アンタとは無縁とカタログソッポむく
無人駅自作自演の帯ドラマ
高砂やたつた二人の屋根の下
余剰人員の記事を読んてる無人駅
サークル檸檬 田形 美緒報
今更に歯のうくような世辞を聞き
告白を受けて気持がゆれ動く
告白をされて困っている男
告白はどきどきまぎれの雑踏で
今ならばけんかすまい父の墓
彼岸花今の姿は仮のもの
今それを言えはひとつの愛終る
登山して下界の欲を置いてくる
逝く夏の告白聞いた秋のウツ

花梢 登志実 薫風 兼治郎 文子 春子 飛鳥 さと美 美津枝 君子 良江 為子 照子 楓楽 宏子 東雲 光子 登志実 綾子 みつ子 鬼遊 薫風 久世川柳クラブ 二宗 吟平報

今だから笑い話になる戦
冗談のような告白忘れない
フランクパン嚙つて画家の今がある
翠洋会 中西兼治郎報
北浜の動き気になる内緒株
命がけアワダチ草も生えます
紙障子影もいのちもつして
飽きもせず時計の振りただ動き
改心の涙動かぬ背で泣き
女房の手の内にある命です
細長い列島を選ぶ秋の旅
看護する人にも好きなパイさげて
不動産争う程の物はなし
ひがひ花いのちの燃える色で咲く
いのちの限り燃えねば悔いが残るだろう
もち菓子三途の川の噂する
生き残り三途の川の噂する
寄せ書きの夫君の方が細い筆
敗戦にいのち惜しめと教えられ
細長くながく折つて晦日そば
命より大事なものが一つある
この人となりと気持がうごきだす
時どきはひとりと燃やしてみよう
名月に供え月餅菓子でなし
久世川柳クラブ 二宗 吟平報
母の愛はみ出る程の宅急便
髪梳けば黒いのばかり櫛につき
家の方が美味いうどんを食べにゆき
竹槍の思い出のある終戦日
近所中知つて居るのにまだかくし
赤トンボ仏迎えに来なくなり

花梢 登志実 薫風 兼治郎 文子 春子 飛鳥 さと美 美津枝 君子 良江 為子 照子 楓楽 宏子 東雲 光子 登志実 綾子 みつ子 鬼遊 薫風 久世川柳クラブ 二宗 吟平報

母一人対話の外でねむくなり

断りに行く仲人の重い足

肩書きが重すぎ唄が出てこない

後を押す子がいて重さ苦にならず

一言が重い気持ちをとときはぐし

沈黙が長いと空重くなる

ぎこちない便り孫から願ひ事

乳のみ児が母の行ききを目で追うて

虹を追うひと時の夢で足る女

追い越され又追い越されマイペース

歩くこと孫の歩みに追いつけず

追い越せず追われ通して年が暮れ

幼な子を追うて走れぬ老いを知り

嬰鑠の祖父は白寿を追うており

重い物持つなど臨月いたわれ

どこもかもネジがゆるんで今日も暮れ

人生の重荷おろして老いたのし

くちはしにチャック着けたい外務省

荷が重く手から背中へ町はずれ

たまに来た便り無心の下ごころ

背伸びして重い役つき胃が痛み

重いのも欲と二つで持つ土産

流行を追うてタンスの肥とする

音信不通風の便りをそつと待つ

お重い重いと孫を抱きあげる

手術後の経過へつとする便り

聴障川柳

稲田

新聞に眼鏡は一つ古い夫婦

拾い読み独りうなずく虫眼鏡

亀甲の縁が笑って十万円

この顔に似合う眼鏡と旅に出る

さわえ

つた子

保恒

妙誠

知代子

半仙

山人

種子

つゆ草

照山

英峰

禅心

藤江

定山

江山

志京

雪花

ひさし

美恵子

光水

勝子

雅紅

虞人

甫正

吟平

邦人

豊作報

承作

一平

三香

老眼鏡頭に乘せて置き忘れ

老眼鏡世相に独り腹を立て

亡き母のメガネの度が合う年となり

幾坂を越えて夫婦の老眼鏡

白いもの見ても色づくサングラス

眼鏡かけ容姿の出来る人もあり

うたた寝の鼻で踊った老眼鏡

眼鏡が葡萄園の粒まびき

老眼鏡でまだもの足りぬ虫メガネ

川柳後集

井上柳五郎報

晴天はなくとも雑草生きている

言うことを言うたら胸の内が晴れ

胃カメラの決断晴れる日を願う

もの言えは寒し文相首切れられ

だれの手に渡ると線路の彼岸花

黒星がつづけば昔の傷が出る

大狸小狸任期へ腹づつみ

病室の強気に病名話せない

敵の畏知らぬ強気が墓穴掘る

強情な父は十八番の舞があり

盗作と知らず入賞はめており

盗人とは知らず番犬尻尾振る

唇を盗んで小さい罪作る

ど底にいても盗泉の水のます

泣いて来てたんまり蚊蚊に血を盗られ

永年の職場が逃げる国鉄マン

逃げるのも戦法だよと父はい

役職を逃げるつもり根回しか

逃げ出せば道は坂道曲り道

逃げ過ぎて風が変ったとも知らず

盗まれた話の種が続かない

進一

珍顔

文古

たみ

鉄火

行江

八恵子

健太郎

雷

健一

秋月

秋月

鮫虎狼

柳五郎

美智子

佐加恵

草風

草建

照路

紫峰

哲郎

浄美

玉水

吟平

護

拓治

恒洋

たけ志

桃風

博友

倉吉川柳会

渡辺

吾句報

祭の灯島の一つが浮き上り

火葬場へ最初の最後飯面脱ぐ

砂時計私は徐々に進みます

スーパ一の進出狭い街ゆれる

奉加帳祭の力だしんさせ

秋祭案山子に一本供えま

大猫も神になれるか進化論

最初から強気の妻がリードする

飛び入りで歓迎するプロダラム

最初から嘘見えている胸のバラ

出発進行今日という日は戻らない

秋祭母は主役の味を見せ

臨終の日よりも入りたいプログラム

佳句地10選 (前月号から)

赤木和子選

言論の自由悲しきことを聞く

山二つ橋桁にして虹の橋

お月さまこの世はつらしおもしろ

座布団を枕にかえて目が冴える

ああ青春スロービデオをもう一度

比べてはならぬと思う子の寝顔

役に立つ事もあると又棚へ

余生とは農家の辞書に見当らず

ゴルバチョフ日本の頭撫でに来る

幸せに見える都会の色ガラス

ちかし

車楽

雄々

松女

とめ子

康子

寿朗

秋人

亜弥

かつみ

明

螢

みなと

とお

矢印に出会うと後へは戻られぬ
議事進行ビールは汗をかいて待ち
あいさつも町の子らしく靴そろえ
最初の一頁に総てを書いて置く
進軍ラッパにストレス気味の鬼もいる
プログラムの活字になった初舞台
ススメススメ兵隊は死ぬのが仕事
町に出てかかしが稲の自慢する
ひとりぼっちのプログラムなどいりません
一歩ずつ進む亀にも陽は当たる
最初から面はひとつと決めて彫る
シナリオの最初に牛乳屋のバイク
二重橋越えたら別のプログラム
太鼓どんどろ天の祭の山車が来る
川柳ささやま 脇田 米朝報

秋女 柳風 幸苑 ゆり子 瑞枝 御前 完司 やえ 観洋 次男 荒介 石花菜 独歩 苦句 文平 越山 テル 千代子 金之助 和子 貞子 富美 可住 愛子 百合子 久乃 ゆう也 とみ子 米朝 エキオ

古机私の過去を知り尽す
川柳化粧槽 植村客遊子報
執念の駒が生きてた退き王手
補聴器をはずし陰口良く聞こえ
三度目の職疲れ程金呉れず
低姿勢その魂胆は覗かせぬ
のど仏愛の告白邪魔をする
乱筆へうなすき読めた顔でいる
組板が妻の気嫌を知るリズム
反旗ひるがえて一人旅つづく
午前様理由はちゃんと胸にある
玄関の花活け替えて留守にする
笛吹いて踊らす心算がままならず
昔にはなかった事だと姑同士
嫁と孫まごには私の血が流れ
くだ巻いて仏が本音ぶちまける
主亡き空家に花だけ咲いている
人生を意地で通して六十路坂
雲は翔ぶ大粒の雨夏の午後
淋しさに長距離電話かけて見る
残り香のおしゃれ品よく藍を着る
世は平和瘦せ薬でよく売れる
静岡西奈川柳同好会

法齊 岳手 大鷹 秋月 紅葉 実香 越山 礎石 悲子 白李 みつこ サワ子 遊光 輝月 とし 白峰 永楽 みね子 まさ子 客遊子 庚子郎 たき やす たま つね きん 孝平

突然の電話に鍋を焦げつかせ
主婦の座をおりて多彩になった趣味
愛の熱体温計では計れない
今だから言えます遠い傷にふれ
火にならぬような噂の古い二人
健やかに生きて朱塗りの夫婦著
尼崎尾浜川柳会 春城武庫坊報
色紙へ祈りを込めて鶴を折る
口下手な男も紙にうまく書き
ゴキブリが易々通る妻の尻
近道を通ると田が有り畑も有り
かづ みつ 静代 美智恵 喜平 僕川 すすみ よしつぐ 弘治 貞吉

第一回

国民文化祭川柳大会

日時 昭和61年11月30日(日)午後1時
会場 日本青年館

東京都新宿区霞ヶ丘一五
電話 〇三(四一)〇一〇一
国電「信濃町」「千駄ヶ谷」下車
徒歩10分・神宮外苑内

行事

- ①入選発表
- ②入選作品紹介
- ③授賞式

記念講演

主催文化庁・東京都
国民文化祭文芸部門
実行委員会

通り過ぎて行くライバルも二本足
竹槍で守った島も駄目だった
過去抱いた女が黙る通り雨
チヨッピリの財布を守る妻の知恵
先生に言われたことだけ守る孫
幼な子の腰に揺れてる守り札
家一つ守れず都会に出た不孝
お守りを鈴鳴りにして人を跳ね
約束を守って男の意地見せる
守るほど逃げ場なくなるへボ将棋
旧道を通り老舗の店へ行く
言い分を通して妻に負けている
人生の実り深める秋の窓
秋の蝶空の高さを知らず舞う
ジャンソンとグルメ女は秋が好き
奥谷

打吹川柳会

奥谷

弘朗報

良 征 牧 郎 歌 子 夢 之 助 美 代 昌 子 江 美 寅 之 助 文 人 中 沢 紫 香 佳 秋 十四郎 武庫坊 礼 子 規 仔 紫 映 巡 歩 白 峰 柳 風 とみお 亮 二 康 子 英 治 節 子 美 智 子 佳 女 吉 朗 梅 朗

炎天に夜があるから救われる
舌の先乗せた怒り待つゆとり
数珠を持つ母を輝くように見る
ひたむきな男の輝く顔に惚れ
いずも川柳会 竹治ちかし報
無農薬虫と戦う野菜畑
虫の鳴くお声で凄くことを言う
虫けらのように言われて意地もなく
農薬の進歩へ虫は強く生き
こればかりつまんだ虫に針があり
名目に負けてはいない虫の声
これしきの毛虫をたてに抱きつかれ
虫の音も弱まり里の秋深む
老いの手に勝算のない蠅たたき
人と虫何と因果な星まわり
芋虫のように大人が昼寝する
人去って工事現場に虫の声
末成りのカボチャに虫の仮り住い
虫よけの移り香匂うころもがえ
恋語るベンチ毛虫に気がつかず
今朝は晴れ仕事の虫を送り出す
よく切れる女で虫が近づかぬ
糞虫が人間不信殻を着る
虫干しへ亡母の形見を嗅いでみる
家計簿で節度を示す赤信号
ほどあい崩れて隣遠くなる
火遊びがすぎた節度の垣をこえ
地に落ちた節度を嘆く森の風
母一人愛の節度に気をつかい
ほどあいを過した今日の二日酔い
甘く見て若い節度に弾かれる

高 代 孝 美 雄 々 弘 朗 愚 童 敏 昭 ノ ブ 勝 子 リチエ 立 雲 早 苗 舞 吉 慎 枝 光 雄 佐 吉 房 子 草 丘 篤 吉 舞 吉 桂 子 美 磯 多 賀 子 房 緒 芳 風 流 石 昭 二 芙 佐 子 しま子 久 代 元 之 介

ぶつさら棒だけど男にある節度
節度ある礼儀儀もつましい
嫁姑節度を保ち睦まじい
ほどあいがよくて纏れぬ愛の糸
ほどあいの柄をえらんで秋を着る
人生のほどあい老父母の背に学び
試されているとも知らずよく喋り
試みにまず一本の苗を買う
試みはねずみに頼るくすり瓶
試みが自然の摂理ふみ越える
壊れそうそと一足試みる
試みる父のタクトに子の譜面
試みる土下座の手には振り向かぬ
ジャンケンの五指に運を試される
造反をゆつくり女試みる
ためされる愛の吊橋よくゆれる
試みに父が遺した車挽く
試写会が楽しめ応募出すハガキ
試みが足滑らせた蟻地獄
試みの吹矢が花の芯を射る
実道湖のしじみ試案に口開く
若向きに仕上げる味の匙加減

竹原川柳会 山内静水氏より
金一封拝受致しました

川柳塔社

寿 美 蚊 声 久 栄 辰 子 満 江 智 子 崖 松 代 仕 男 勝 味 知 恵 子 清 吉 秀 雄 吉 枝 秋 峰 文 子 久 道 為 一 郎 育 子 桜 水 芳 正 まこと

青柿の一つに彩が事来る

誰に似た親は口下手子は達者

一人居の家計薄わびしはかりの目

深海魚の眠りを刺激する女

錯覚のペルを二人が聞いている

どう転ぼうと月を欺くことはない

何方ですか庵主ひとりへ夜の客

悪は悪にならず蟬は地にかえる

むらくも川柳会

藤井

初炬燵つう手枕でうとうと

枕元おいて句帖が秀句呼ぶ

面白い顔が受けてる三枚目

口止めもその場かきりで封が切れ

わがままを直す他人の塩加減

口止めをされて次へも口止めし

面白い夫婦で喧嘩も楽しそう

久しぶり笑えば顔に出る小皺

口止めた内緒の噂洩らされる

面白い有名人の裏話

泣き笑いあって人生面白い

化粧して皺が見えない工夫する

口止めをして友達を信じてる

わがままを熱意でさす母の愛

わがままを言おかしめよか妻の顔

わがままを言おかしめよか妻の顔

さわやかな秋晴れ空へ背伸びする

参道のいが栗秋へ口をあけ

ゆさぶつて栗跳ね当る子らも跳ね

好きだった父に栗飯お供えす

里子

悦子

栄子

佐代子

松川芳子

河瀬芳子

眉水

作一郎

明朗報

はる代

鶏生

秀子

ヤス子

林蔵

よし子

文子

富子

翠星

百代

延子

竹乃

みどり

孝華

吉野

よし美

義良

克子

ふみ女

章子

緑水

秋を見にイガを破って栗のぞく

さわやかな山風吸うていこう寺

円満という字が逃げる自己主張

さわやかに秋深みゆく彩を着る

精いっぱい働く汗のさわやかさ

年とれば円満こわす愚痴が出る

夫唱婦随円満な共白髪

円満な家庭健康うらやまし

栗飯に帰省の子らの舌鼓

円高不況づく財布をもてあまし

さわやかな朝にすまない二日酔い

思い出は幼き子らと栗拾い

月末の財布ごっそりやせている

盃へ皺もバックの笑い顔

裏話おもしろおかしく聞いている

健康なしら実年の艶をもち

川柳塔まつえ(10月例会)

売りに出す山に古墳が出てもある

古墳への道をたどれば盗人草

先人の知恵を古墳に教えられ

古墳から古代史実が転げ出る

銅剣が古代の謎を語らない

古代文化秘めた古墳の謎深し

人間の都合で古墳くつがえす

出土品それから古墳くつがえす

有頂天の歌手はくぼみに気づかない

くぼみからもう逃げられぬ蝸牛

可愛げな双のくぼにだまされる

母の里バスに揺られたくぼみ道

地すべりのくぼみへ歌が届かない

このくぼみ税金たつぷり取られてる

ゆき子

峰雪

三津江

幸子

雪路

梅園

蚊声

昌子

巡歩

一憲

由郎

久仁

藤子

正朗

芳子

明朗

文子

満江

愚童

代仕男

多賀子

ノブ

妻子

静恵

由郎

寿美子

静翁

育子

雄々

市雄

和解から心のくぼみ癒えてきた

目のくぼみ少し疲れていません

くぼみから秋だ秋だと虫が鳴く

わたしは雄魚くぐりぬけねば冬の網

網を背に夕陽の中のシルエツト

まぼろしの白魚へむなしい網しぼる

その日まで露命をつなぐ四ツ手網

網張って秋の美人を待つとする

回遊魚網にかかって知る世界

美辞麗句並べて網を張っている

安売りのみかんは赤い網が好き

台風じや海の男も網も寝る

呼び捨ての声が枕の下にある

警官の呼び捨てがマスコミが叩く

呼び捨てになかなか出来ぬ婿養子

呼び捨ては出来ない嫁に遠慮する

呼び捨ての酒は昔の声になる

やめる気になつて上役呼び捨て

呼び捨てで呼んで親しむわいて来る

夫逝ってから栓抜き役目減る

栓抜きはいらぬ酒買汽車の旅

栓抜きを離さずいつもキーホルダー

栓抜きを頼い宴会賑やかに

栓抜きを持って幹事はうろたえず

栓抜きの手つきに秘めた過去がある

深酒の癖を栓抜きたしなめる

駒つなぎ川柳会

里小路報

前車にスピード合わせねずみとり

口にする不運に金は貸さない

開運寺妻の祈りが長過ぎる

翠星

昭二

千代

桂子

鳳人

きみえ

正朗

ちかし

貢範

芳子

友枝

瑞枝

巡歩

壯樹

みえ

荒介

長三

鶴丸

舞吉

青湖

静江

風子

孤呂二

与根一

叮紅

小路報

英一

克己

曲手

章

コンタクトあゝ知らなんだだまされた一枚のレンズに視力よみがえるカビの花ミクロの世界を見るレンズよく見えるレンズで自分を見直そう整形で化けた鼻とはつゆ知らず大さめのハンカチで拭くはぜ日和汗かぬ男は細い指で生き不運とも言わずに父は笑うだけ運の無い時は雨まで強く降り大惨事写し非情のレンズ冴え天眼鏡今年も女難ないと出る騒いだ末目から出てきたコンタクト美しく化けて見せたい人がある合鍵を渡し不運がつきまとうハンカチも海も涙も秋になるひまわりにゴッホも汗を散らしたか僕の嘘包むハンカチ白すぎるハンカチセツトボクと恋愛せえへんか貴方用のハンカチもあるバッグ人を愛して汗かくことが多くなり同じ汗流しているのに負けている失敗は冷たい汗にさいなまれさげようとするから不運つきまとい押ピンを踏んで不運まだ続く目に見えぬボールレンズがとらえてる自分の目のつもりで眼鏡の玉を拭くタレントの油断レンズに覗かれる化けるのに少し手間どる日の女どう化けてみても笑うお月さん一枚のハンカチ西日避けてゆく名優の汗は楽屋でとつと出る

国公 庸佑 勝美 花仔 寿美 冬業 千代 浩一郎 笛生 新造 外吉 律子 博子 節子 美幸 作二郎 善信 白洋 柳影 郁栄 隆二 弘生 頂留子 素灯 東雲 眉水 文秋 白兔 美津枝 史一 好高

お隣は同じ仕事で汗かかぬキャンセルの切符が分けた運不運病床で長い生命線を見る野良猫が化けて出そうな目でにらみ変身の蝶々にむかひは問わぬこと森の深さが不運な王女を殺さない老眼鏡母のレンズに近くなる河童から見れば人間みなお化けハンカチのシャネル5が嘘吐かせない花びらににじんだ汗はだませない困った男と困ったとこで遭い虫かごのレンズを火元とは知らずビックリ箱に化けたぬけがら入れているハンカチを三枚持って逢いに行くハンカチを貸してあげたい汗をかき

わかあゆ川柳会

小砂

白汀報

幸治 柳宏子 壮之助 射月芳 萬代 惠美子 甘平 翠公 健司 重人 八重野 雀踊子 柳伸 小路 翠星 ヒデ子 秀穂 醉夢 聖子 世似 鈴江 英子 かつ子 笑子 惠美子 歳栄 民子 天痴人 清泉

雁首を並べ常連団を喰うある時は浴衣おんなの火を包む川柳泉尾 吉川 寿美報 ファッションが秋を着てる駅に佇つ円高に海外旅行急かされるステアコのまんまに「妻は留守です」先人の句碑に見惚れて足軽く炎天下眼医者へ通うサンクラスはおずりをしてあきたらぬ母性愛反抗期意地を見せてるでかい靴老い猫が膝にのつてる今朝の秋風鈴をどこにつるかと風にきき友に似て微笑むCMタンスにゴン久しぶり孫の笑顔に勇み足ひと言の刺まだ抜けず土用波ひよつとことおかめ日本の顔であり絶世の美人の寝顔は見ぬように円高も僕の財布は太らない今昔縞の財布の村芝居財布の中出張勝ちの諭吉さん主流派にのつて泳いで栄を得るさつきまで泳いでいたという刺身瞳を閉じて萩のこぼれる音をきく川柳かやま 堀端 三男報 道草をしたくてしんがり歩く癖まっすぐに歩いて壁につき当る手の鳴る方へ歩いて蹴蹴こつそりと故里歩いて回る朝歩きながら熱い手紙を読んでいるところてんやがて私に順がくる押されてもドッコイ私冷めてます

はるみ 白汀 シメ子 伴子 広子 文子 シマ子 三千代 弘子 美子 はつ子 清子 満州子 敏 美代子 白水 義一 田和子 恭子 昭子 寿美 紀久子 信秋 紀美女 天彦 栄美子 英子 公子

いじらしい押しだ好きなんだナ僕を
教会の扉わたしの罪で押す
押しの一手岡本太郎の目が光る
右脳を絞るチューブを押すように
咄家を押したらきつと落ちがでる
押す前に引くこと知っている策士
押し下さい心が鳥になれそうで
言い訳もせぬ唇に押さえられ
押し通す自信背すじが伸びている
ゼロという字の無気味なる素顔
視界ゼロ貴方はこの身まかせます
ゼロ点へ戻れば灯り見えて来る
とても大きなゼロに納得させられる
悪びれず貯金はゼロと妻はいう
ゼロからの出発ゼロで締めくくる
老眼鏡やとローンがゼロとなる
ゼロ回答最後に男試される
ゼロが並べばいつかは虹に変わるだら
思考力ゼロの女に泣かされる
精いっぱい街の谷間の灯を点す
雪深い谷に生れて機を織る
谷底に人生路の水がある
得をする事を覚えて谷渡る
無医村の谷によく効くお湯が沸く
谷の唄きれいな自負を生きている
四季のないビルの谷間でアレギー
谷底を這うのも虫まだ翔べず
落ち武者がビルの谷間へ投げ出され
忘恩や心の谷間ゆれやます
谷ひとつ向うに赤い花がある

きみ 輝的 萬忠 芳朗 勇太 狂虎 桂香 正子 帆船 白光子 信子 緑良 精子 恭子 登志代 太茂津 照勝 光代 雅子 忠雄 豊太 紫幸 克子 千寿子 茶の子 寿子 久子 三男

川柳藤井寺 赤木 和子報
マル優の不正に庶民つぶされる
喜びの中に淋しき老いの坂
逢うて来た帯に本心たみ込み
何気ない浮気が一生棒に振り
孫の画く祖母の顔には皺がない
浮気するにも籠の鳥籠の中
のど自慢声の悪いは親ゆすり
憎いはずなのに恋しい好敵手
五人錯覚する猫五匹
ベツトとも共存している兎小屋
何も彼も棄てて来いとはおっしゃらず
十五年経って見下す孫の背
この美女の老醜の日をふと思ひ
紆着て嵯峨野あたりで浮気する
愚痴ばかり聞こうるさい敬老会
涅槃像ガラス越しから拝まされ
朝顔の浮気は高い塀も越え
どの指も苦勞知らずの憎い指
腕組めば思案もつくか迷い道
憎らしく見せて主役をひきたてる
もう時効すぎた浮気でいびられる
浮気っぽい妻は僕にもいい女
物音がみな近くなり秋気澄む
憎しみを越えて老父を迎え入れ
中核さん問答無用は非道過ぎる
先生を待っているお母さん
牡丹餅のお下りがくる彼岸入り
風見どり遺囑とあやまるお家芸
記念にと長岡火花買いました
憎しみの募る枕を裏返す

与呂志 志洋 吸江 須美 治子 清心 正人 秋園 たくし 和子

川柳高知 川竹 松風報
点滴を待って待つ三途の渡し舟
特価品だけの寿命と思う靴
雑草の一本もない父の庭
台風之余波に魚の佃が狂い
紅の色変えと翔んでみたくなり
雑草の強さが残る炎天下
奥さんと酒に魅かれて来た句会
美人ではないが笑顔にある魅力
お互いにライバル意識持つ選挙
仲間からはずれないため三代会
よろしくと仕事仲間の見舞客
言い訳の嘘が上手な飲み仲間
父さんに言えぬ話もする仲間
損得は抜きで一肌脱ぐ仲間
川柳塔きやら木 石垣 花子報
かわいくてバラを時々切つてやる
ふる里は墨絵ばかりの雲の下
雲が逃げると本当の山見えてくる
ときどきは神話よこぎる黒い雲
いわし雲浜は大漁の声で湧き
安住の空を求めて雲流れ
雲が出て無口になった山男
美しい夕焼雲につかまるな
白雲うゆうう少女の胸にある艶書
雲のじゅうたんいつか寝かせてくれますか
叙位叙勲たんぽぽつけた枕木よ
泣く子等に母の枕木あたえよう
一刻も逃げ場所がない枕木だ
枕木が雑草に昔を語る午後

とみ子 佳風 竹萌 朱坊 春枝 弘生 節野 菊子 功 幸泉 三吉 千鳥 松風 亜弥 時枝 朗子 八重子 田鶴 花子 瑞枝 登栄 晶子 玲子 千春

予定きつしり老いなど言うといれぬにぎり飯千個見事な和と思つ死ぬるのは静かな秋と決めておく糸電話妻から届くラブコールもう一度信じてみよう秋の空両の手を合せては聞こえる弥陀の声夏バテと笑つてくれた甘茶づるハエ叩き持つたらゴキブリ居なくなる友の計や人ごとでない星仰ぐ花好きが今日の予定を狂わせる決め球はまだまだ打たれない自信大柄な姉骨壺に納まりぬ父母に申し訳ない不肖の子雲の峰ただひと筋の道なりき闘いの庭に踏み出す解禁日諦めもあつてますます夫婦仲頭痛薬母はかくれて飲んでいるいにしえの色そのままよい仁王夏休み子に回される独楽となり少女期に私をかえす雲の彩味覚の秋金では買えぬ嫁の味十人十色いいとこばかり見ておこつ折り鶴が二千再起へ賭ける夢弱虫のずつと一緒にいる夫婦白菊を男が持ては哀しかり

京都塔の会

松川

杜的報

政代 蘭幸 清水 節夫 淑子 滝代 喜久恵 君枝 太虚 一路 輝恵 静火 房子 満子 比呂子 静雨 操子 康子 臣子 シゲヨ 貞子 博子 淑子 笑子 楓云児 白李 敏正 達子 幸

美しいトカゲと出会う夏の怪スッポンボンの孫と握手をして別れ盆三日ごきぶりも蚊も見逃そう微笑にもいろいろあつて分かり合う幸せになるというから鐘を撞く指切りの孫の指にはそむかれず指切りの指が冷たい女でしたかあさんと指切りして居るあかね雲指切りの丘も今では高速路指切りに背いた指が疼き出す孫とする指切り千円札で足りいつわりの指切りもあるネオン花転勤の落ち目知ってる靴の紐ゴキブリへお手つきばかりして逃がし妻を病気にさせて二次会から逃げる七人の敵から逃げる靴みがく自分にも負けてる逃げるピッチング逃げどきも考え野良犬そばへ寄り逃げ腰の女が憎いことを言う

もくせい川柳会

田中

正坊報

紫香 杜的 花代子 年代 武庫坊 巨詩 弘生 はつ絵 誠史 め女 白溪子 英子 芳子 陽露子 和友 飛鳥 求芽 水客 薫風 明 紫香 よし子 萬的 つ子 洋子 正坊 寿美子 美弥子 慶子

寝たきりの姑の爪切る秋日和孫泊めて久しぶりです川の字に空高く人の憂いにいわし雲甘栗を買って中座の新喜劇一人では菊も紅葉もつまらない運動会来なくていいよと中学生逃げ上手夫は無口を売りものに老眼を拭いて本心確かめる此の人の孤独ころを覗かせず廃止線横目に走る自家用車秋夜長辞宛枕にラジオ聞く再婚は純白の衣裳遠慮する手話仲間銀杏落葉は背なに降る萩の枝ぐりつ菊の支柱立てづけづけとてない男遠慮せず幸せを願う平和な子の寝息履き心地よくてこの靴捨てがたい母恋しリンゴの皮を長く剥き足折つて夫に大きな借りができゆつくりとお経に合わすうちわ風

川柳ひら

行吉

照路報

きく子 博史 典子 佳秋 英子 春子 房子 武庫坊 め女 市雄 明吉 隆 作二郎 登代子 花村 山久 登志実 曲手 富子 福一 栄翁 胤親 かずを せつ子 年子 典子 亀男 幸江 志寿子 ともゑ

秋風がすねた私の背をたたく

形式の仲人役にかり出され

梨狩りのバスを横目に稲刈る

もの言わぬ花も母には語りかけ

形式は出向と言う肩たたき

下り坂どうあれ実年翔んでみる

手をつなぐ善意が灯す平和の灯

未来図へ俺とお前の夢を盛り

善意の輪悪の紙面のすみで生き

応援の母さん一緒に足をあげ

年輪に浮世の波が解りかけ

尋ねたる二軒どちらも梨馳走

ありがとう善意に席をゆずられて

老いらくもあって短かい夢をみる

この人に金を貸さないのも善意

多摩因播戦友より梨の宅急便

天と地を善意の虹が橋をかけ

南大阪川柳会

中川

見てくれがよいので油断してしまっ

外観に溺れて街を抜け出せぬ

ひよつとこの面は涙でぬれてる

別嬪を好んで家計はだらしない

内幕を繕う派手な門構え

外観で人の貧富を決めて居る

人目にはどう見えようが夫婦です

女には女の立場にある議題

議題からはすれぬ位置に妻はいる

日の丸を揚げよ揚げぬで小半日

虫の声議題は確か衣食住

生きてゆく議題は蟻と雑草と

骨抜き議題で面子だけ立てる

滋養報

重人

作二郎

楓楽

悦郎

寿美

ハル子

あいき

智子

芙左女

三十四

善信

曲手

弘生

孝子

裕子

美佐保

やすえ

良一

博

方己

敏和

トモ子

美代志

アヒル

柏峯

寿子

千恵子

真備雄

柳五郎

照路

群衆に押しあげられた正義感

群衆と一緒に歩いている安堵

群衆の心うわさに揺れやすい

群衆の中の自分を放すなよ

みかん実るとみかんがりに行く群衆

時の人信じ群衆蟻になる

群衆を愛し群衆に裏切られ

気の弱い男で群衆の中にいる

右へ廻れした群衆は恐ろしい

原色に戻って過去を描き直す

原色は花の命の燃えるとき

原色は大屋政子がひとりじめ

原色で描いた子の絵が温かい

原色の似合う若さをうらやまれ

絵日記に原色がよく似合う

情熱があり原色がよく似合う

原色のままでは困るお嫁さん

互角だと思っていたのは私だけ

核配備米ソ互角にある平和

七三の子想へ互角に渡り合い

仕事では互角手並で負かされる

実力は互角恐れることはない

袴を脱げ互角の縄暖簾

城北川柳会

野呂

露天風呂皆んなの肌が白く見え

花よりも雑木紅葉が好きになり

運動会孫がどれやら同じ顔

若き日の炎に燃えた彼岸花

赤い羽根今日はうどんで事すまし

羨まし日々夢を追う楽天家

山なみは一雨毎に紅をつけ

恒明

柳宏子

文秋

凡九郎

度

喜風

公一

山久

綾珠

滋雀

千里

柳伸

隆二

頂留子

春蘭

新造

三重子

雀踊子

勝美

庸佑

慶三

智慧子

章久

有佳

トキワ

龜男

泰世

文子

繁子

見世

折節に亡母の佛よびもどし

熟れる迄待つてほしいと洩い柿

鼓笛隊のリズムに合せ朝の家事

きれいい好きな亡母に詫びて墓掃除

民謡は父母に抱かれたる安らぎを

こんな苦でない記憶へ深く辞典

子育ての苦勞が愛情深くする

食欲増す料理作りに精が出る

一步步夢踏みしめる歩き初め

真直な心で一の字書いて居る

黄のカンナ赤のカンナも燃えつくる

どちらからともなく同じ事を言い

亡き母が無常に恋し曼珠沙華

幸せは妻の笑顔から生れ

繰り返す日々人生の砂時計

言訳をすればする程齢が知れ

下積み石にも秋が深くなる

贈られる事のみ多き老いの日々

噴水の虹の向うにある未練

後輩が無言で見せる力瘤

離れてる距離だけ深い母の愛

お茶旨し羊羹旨し秋旨し

やがて冬山も私も身がくろい

晩年は並足でよい花の里

白杖の半径きびしい線がある

亡母の喪中につき

新年のご挨拶は欠礼させていただきます

板尾岳人

悦子

佐津乃

節子

テルミ

寿美礼

静

明美

ふさ子

公一

登志代

綾珠

温子

倫郎

悟峰

白

ふみ

静歩

末子

達子

頼一

純子

右近

道子

ただし

満津子

12 月 各 地 句 会 案 内

	日 / 時 及 び 題	会 場 と 投 句 先
駒つなぎ 川 柳 会	1 日(月) 夕 6 時より 忘れる・暗い・弁解・元氣	寺田町高松会館 国鉄環状線寺田町駅南口下車 南へ1丁3筋目左へ駅より歩3分 〒572 寝屋川市成田町19-28 里 小路
尼 崎 いくしま	5 日(金) 午後1時半より 会話・空気・自由吟	サンシビック尼崎 阪神尼崎下車南西徒歩3分 〒660 尼崎市昭和南通8丁目201 福田札子 句会費 300円 投句料 60円切手3枚
西宮北口	8 日(月) 午後1時より 余裕・当然・自由吟	西宮中央公民館 阪急神戸線西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代 句会費 300円 投句料60円切手4枚
菜 の 花	10日(水) 夕 6 時より 電池・卵・形(かたち)・親	八尾西郷会館 近鉄大阪線八尾駅南西歩5分 八尾神社境内 〒581 八尾市弓削町南2-141 飯田悦郎
川 柳 塔 まつえ	13日(土) 午後1時半より 集合・財布・余韻	慈雲寺 松江市和多見町 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅 句会費 300円 投句料 300円(60円切手可)
川 柳 わかやま	14日(日) 午後1時より 暮・好調・裁く	紀之国会館(県民文化会館西隣) 〒640 和歌山市駕町15 野村太茂津 句会費 300円 投句料 60円切手3枚
もくせい 川 柳 会	15日(月) 午後1時より 嘘・灰皿・もう一つ・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急宝塚線曽根下車東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
堺川柳会	16日(火) 夕 6 時より 大役・だしぬけ・退屈・駄目	堺青少年センター3F 阪堺線綾之町西南 〒593 堺市堀上緑町2-9-2 河内天笑
南海電鉄 川 柳 会	18日(木) 夕 6 時より 鍋・バケツ・ゲーム	南海会館ビル内南海電鉄本社ビル地下食堂 〒542 大阪市南区難波5丁目1番60号 南海電気鉄道(株)不動産管理部管理課 広井季雄 句会費 無料 投句料 60円切手1枚
富 柳 会	18日(木) 午後1時より 惜しい・帰る・鍋	富田林市中央公民館 (〒584 富田林市南大伴353 池 森子) 〒591 堺市向陵中町2丁駅前ビル4の6 板尾岳人
高槻川柳 サークル 卵 の 花	18日(木) 午後1時より 重荷・残り・自由吟	高槻市民会館301号室 阪急電車高槻下車歩5分 〒569 高槻市桜ヶ丘北町3-19 辻 白溪子 句会費 500円 投句料 200円(60円切手3枚と20円切手1枚)
南 大 阪 川 柳 会	19日(金) 夕 6 時より 退陣・地の利・包む・適当	寺田町高松会館 国鉄環状線寺田町裏駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 180円(郵券可)
川 柳 ねやがわ	21日(日) 午後1時より 故郷・実績・鐘	寝屋川市立総合センター4階 寝屋川市駅下車京阪バス総合センター前下車 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 句会費 500円 投句料 60円切手3枚
川 柳 東 大 阪	27日(土) 夕 6 時より 杖・順番・似顔絵・足あと	東大阪市社会教育センター2階 近鉄布施駅北へ5分長堂小学校隣 〒579 東大阪市新池島町1丁目4-14 齊藤光利 句会費 500円 投句料 60円切手3枚

★特に記載なき場合 句会費 500円、投句料 300円(郵券可)、各題3句以内

原稿送り先(〆切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)

〒596 岸和田市荒木町1-29-1 宮園射月芳

●募 集●

二月号発表 (12月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栗 選
水煙抄 (10句) 黒川 紫 選
愛染帖 (3句) 橘 高 薫 風 選
課題吟 (各題5句以内)
「秘密」 岸 本 豊平次 選
「背く」 藤 田 頂留子 選
「野心」 田 中 正坊 選
★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

三月号発表 (1月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栗 選
水煙抄 (10句) 黒川 紫 選
愛染帖 (3句) 橘 高 薫 風 選
課題吟 (各題5句以内)
「芸」 福 本 英子 選
「運」 榎 原 秀子 選
「靴」 林 はつ絵 選
★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず。
★用紙は川柳塔社柳箋をご使用ください。

12月の常任理事会は1日(月)

定価 五百円 (送料50円)
半年分 三千二百円 (送料共)
一年分 六千三百円 (送料共)
昭和六十一年十一月二十五日印刷
昭和六十一年十二月一日発行
編集兼 西 尾 巖
印刷所 藤 原 童心社
大阪市阿倍野区三木町二一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室
〒545
発行所 川柳塔社
電話 (三谷) 一六九一四番
振替口座大阪 813336八番

本社12月句会

日時 十二月八日(月) 午後六時
会場 メンズファッションセンター3階
東区内本町一 電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車(2番出口)交差点西南角
兼題 「叩く」 野村 太茂津
「あご」 斉藤 三十四 選
「約束」 宮口 笛生 選
「宴」 金井 文秋 選
大坂 形水 選
席題 二題 当日発表 各題三句以内厳守
会費 五百円

★投句は柳箋(4cm×19cm)に一葉一句。
投句料 300円(60円切手5枚)同封のこと。

川 柳 塔 社

1月の兼題 「代表」 「揃う」
「耳」 「初」

本社1月句会は7日(水)

「夜市川柳」募集

第7回 「艶」 西田 柳宏子 選

第8回 「力」 3句・締切 12月末日

3句・締切 1月末日

野村 太茂津 選

投句先 〒593 堺市堀上緑町二一九一

河内天笑方

堺川 柳 会

編集後記

☆本年の最終号をお届けする。目次下エッセイの「新年回顧」も書いたが、今年は川柳塔社の一つの節であったように思う。

☆中島生々庵前主管のご逝去、一方では第一回勉強会がはじまり、次号から女性コーナー「尚香の花」の作品群が登場してくる。来年も飛躍の年でありたい。

☆私個人、今年は還暦を迎えたので感慨深かった。路郎先生のように「六十一まだ情熱は燃えに燃え」というのではなくて、ほのぼのとしたものである。還暦記念に出した句集「愛染」にそのほのぼのとしたやさしさが出たかどうか。多くの方からご支援を得てうれしさいっぱいです。

☆愛染の最後の句の「八十になったら恋をししてみよう」に因んで、多度津の三井辞夢さんから「八十になったら恋のお相手を」との祝詞を頂戴した。川柳は人間である、との言葉通り、

それは辞夢さんの人間の懐の深さを感じさせた。目かくしをされた馬車馬のように前方だけしか見られない私などと違って、解釈にも余裕と幅がある。「鑑賞も人間である」と言いたくなつた。

☆畏友寺尾俊平さんも時を同じうして句集「葦川」を出版された。私とは同期の桜。抒情に対する二人の個性を較べて頂ければ幸いです。

☆七日の本社句会で愛染の祝福を受けた翌朝、唐津への旅に出た。昨年は初対面けれど、よそゆきの感じがあったけれど、今回は仲間としての応待が出来た。昨年「茶碗」という題を選んだ記念に唐津焼の飯茶碗を買った。毎日使っているので一年の艶を加えた筈である。それが歴史というものだ。今年も湯呑に句を書いた。「旅人へ何とやさしい駅だこと」虹の松原の無人駅を思ったのだ。

☆還暦は実年の花、来年からは実年の実りに入る。自

覚をしなければ。(薫)

▼「武器密輸組織を追及」これは、ある新聞のある日の一面見出しで、タイ国際航空の爆発事件のその後の記事である。その下の欄に「米ソ外相、来週半ば2回会談」とある。戦さに関連した内容には相通じるものがあるが、暴刀団と国家との大きな違いは高度なものとは思えない。

▼飛行機も核兵器もわたしの生活には、何の関係もないが、後者の方を愛慮するのはどうしたところだろう。

▼同じ一面に「大気公害患者の救済縮小」とある。この記事の方がもっとも関係深いことと思えてならない。詳しいことは別にして怒りを覚える。

▼毎日が日曜日の生活になつて、午前中の日課は新聞を読むことに費やされる。テレビはなくても新聞はなくてはならない存在であるが、大部分はなくてもよい記事である。もっとも必要なのは広告欄である。宝石、毛皮、貴金属、次に宅

地、建物、自動車、電気製品、化粧品、薬品その他、しかし書籍に関する広告は別格である。本の広告を読んでいると、社会の一面が見えてすこし賢くなった気分になってくれる。

▼「少年隊って?」本田美奈子って?」人気のあるアイドル歌手を見てもみな一様に見えてしまう。オオジサンと呼ばれぬために「の題で二十九歳の男性がラジオ欄にコラムを書いていった。老化現象か。(き)

☆地下鉄の中吊り広告を見るときもなく見て、こんな文句が目に入った。「森進一・昌子夫妻「初夜」明けた朝の「顔色」」かの悪名高き写真週刊誌フライデー某月某日号の大見出しである。

☆週刊誌の思わせぶりな見出しは、今さら珍しくもないけれど、このカギカッコの使い方には、お主なかなかヤルナ、と思わずニヤリとさせられた。

☆僅か十六字の短いセンテンスが、カギカッコという

記号の有る無しで、読み手に与えるインパクトがまるで違ってくる。森進一・昌子夫妻初夜明けた朝の顔色——これでは、川柳で言えはああそうです、で、終つてしまふ当り前川柳。見出しとしては物足りぬ。これをひとひねり、初夜と顔色というキーワードにカギカッコを付けることにより、読み手に限りなき連想の楽しみを与えることになった。そういうえば、森進一はその方ではつわ者だそう、といつたミスターの噂を、その時、はしくも思い出したくらいである。

☆記号ということと面白い話がある。大文豪ビクトルユーゴーが、自分の作品集の出版元に、売行きをたずねる、とだけ記した手紙を出した。早速戻ってきた返書には、とだけ書いてあった。世界一短い手紙の例として有名である。

NEW FORMAL COLLECTION



泣いて笑って……
 夜を通り過ぎたら
 また陽がのぼっていた
 男のロマンと
 フォーマルと。

OSK JEFF
 ORIGINAL DESIGN

株式会社 **オーエスケー**

〒540 大阪市東区南新町 1-13
 ☎ 06(941) 8015

ボリュームたっぷり スタミナ満点!!

豚饅・焼売・焼餃子



なんば戎橋筋本店
 その他有名百貨店でどうぞ



ほうらい



TEL641-0551